

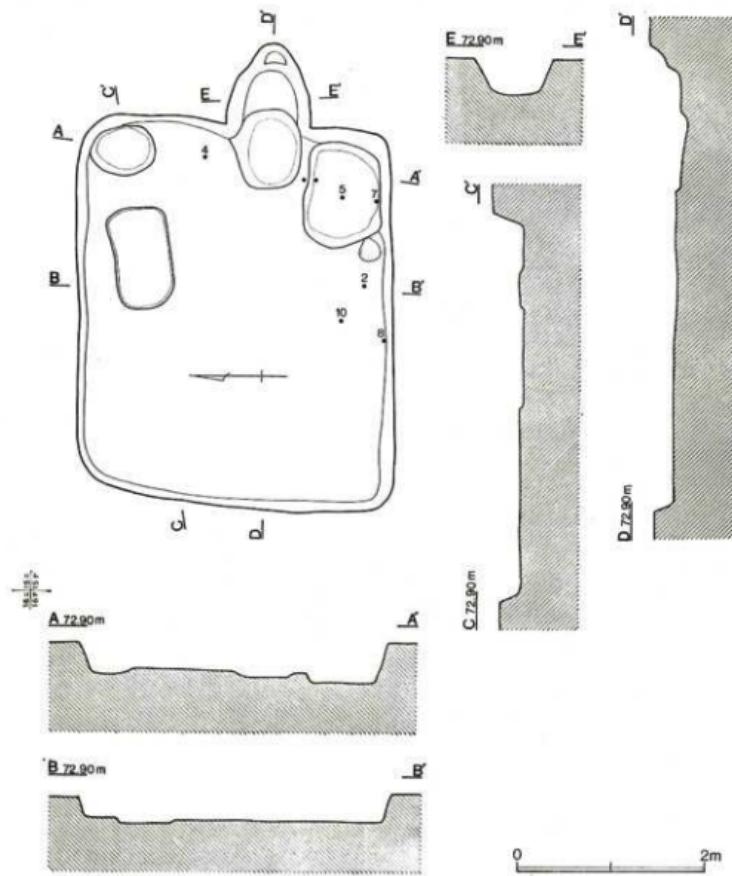
第84図 第59号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	高台付 埴 須恵器	口径 15.0 高台径 7.3 器高 7.0	高台はへの字状に張り出し、端部は水平になる。口唇は外反し、やや肥厚する。	右回転撫で 8周。切り離し不明瞭。高台張り付け後、内外右回転撫で。末野産	胎土：0.4以下 B+C+E 焼成：1 色調：2.5Y8/2 灰白 残存：60%
5	台付甕 土師器	口径(11.2)	コの字状口縁で、口唇は大きく外反する。	口縁 2段の横撫で後、体部右→左への笠削り。二次加熱。	胎土：微 A+E+F+G 焼成：4 色調：5YR5/8 明赤褐 残存：18%
6	甕 土師器	底径 4.0	小さな平底を造り出す。	胴部・底部とも笠削り。内面木口撫で。	胎土：微 A+多 F+G+H 焼成：4 色調：5YR7/4 にぶい橙 残存：底のみ
7	甕 土師器	口径 20.2 胴径 22.1 現高 22.3	胴最大径は上位にあり、口縁はコの字状となる。	口縁 2段の横撫での後、胴部上位右→左、下位左上→右下へ笠削りする。内面は右→左の笠撫で。	胎土：微 A+多 E+F+G+H 焼成：4 色調：5 YR 6/4 にぶい橙 残存：60%
8	甕 土師器	口径(18.6)	コの字状口縁で、口唇は薄く外反する。	口縁は 2段の横撫での後、胴部は右→左への笠削り。内面は右→左への笠撫で。	胎土：微 A+多 F+H 焼成：4 色調：5 YR 5/8 明赤褐 残存：20%
9	甕 土師器	口径(21.4)	やや外に開くコの字状口縁。やや厚手である。	口縁は 2段の横撫で。	胎土：微 A+多 E+F+G+H 焼成：4 色調：5 YR 6/4 にぶい橙 残存：口縁20%
10	甕 土師器	口径(24.5)	やや外に開くコの字状口縁。口唇は肥厚する。	口縁は 2段に横撫でした後、胴部右→左への笠削り。内面は右→左への笠撫で。	胎土：微 A+多 D+E+F+G 焼成：4 色調：5 YR 6/6 橙 残存：25%
11	甕 土師器	胴径(25.2)	胴部上位の破片で、最大径が胴上位にある。	外面は右下→左上へ笠削り。内面は右→左への笠撫で。	胎土：微 A+多 E+F+H 焼成：4 色調：5YR5/8 明赤褐 残存：18%
12	甕 須恵器	口径(39.0)	口縁は短かく大きく外反し、口唇は上下に尖き出しおり。端面は窪みが遡る。	粘土帶積み上げ後、平行叩き成形。内面は笠撫でする。 末野産	胎土：0.4以下 A少+B 焼成：5 色調：2.5Y5/1 黄灰 残存：口縁45%

第60号住居跡（第85図）

15—1区に位置し、規模は4.08×3.36m、深さは0.32mを測る。形態は隅の丸い長方形で、主軸はN—90°—E、床標高は72.34mである。

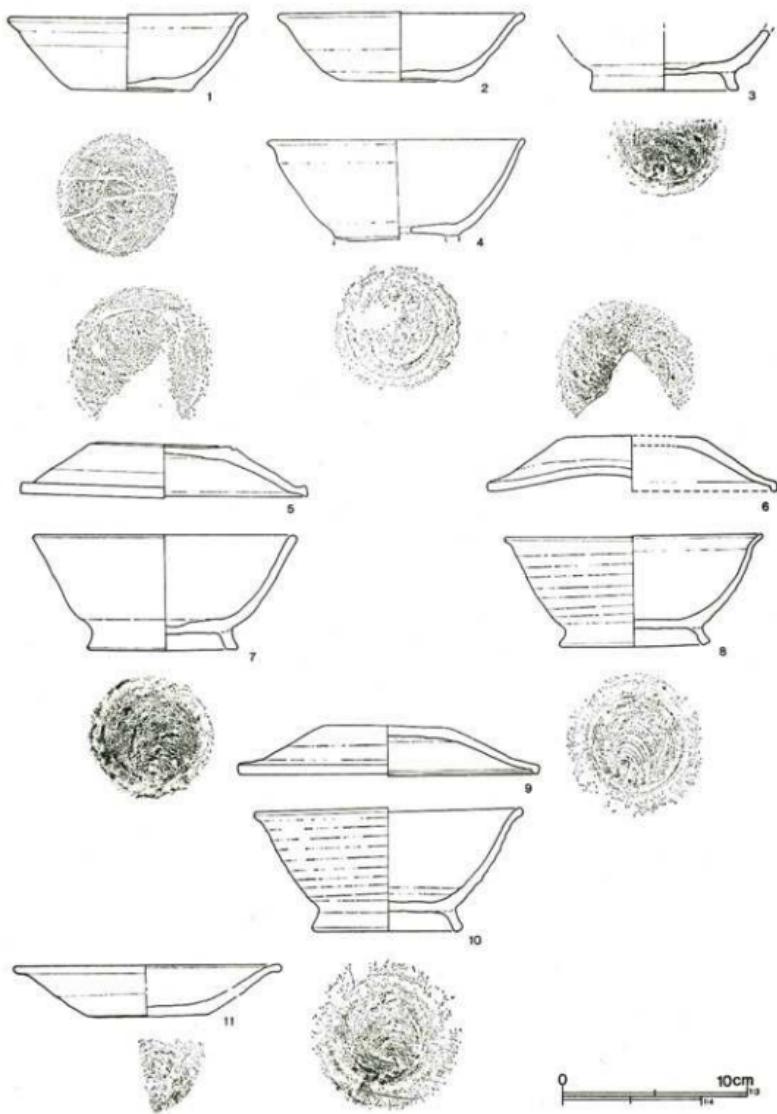
竈は短辺である東壁や右寄りにあり、長さ1.54m×幅0.75mを測る大形竈である。焚口から煙道へは急に立ち上がる。床面南西隅の竈右脇に、貯蔵穴と考えられる0.15×0.8m、深さ0.1mの方



第85図 第60号住居跡

形土坑がある。他に北東隅、北壁寄りにも浅い落ち込みがある。柱穴は未確認である。

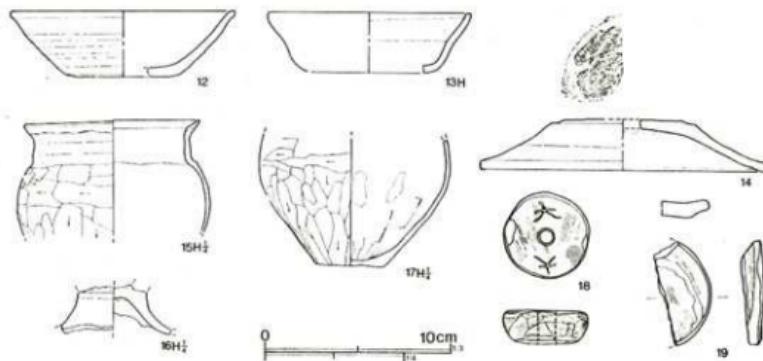
遺物は貯蔵穴から杯(1)、高台付塊(7)、蓋(5)・(6)が、甕左から高台付塊(4)が、南壁中央付近から杯(2)、高台付塊(8)・(9)が出土した。また甕内から杯(2)、蓋(9)、土師器杯(3)、土師器台付甕(8)・(9)、土師器甕(4)が、甕焚口から紡錘車輪が出土する。鉄滓は少なく15gしかない。



第56図 第60号住居跡出土遺物(1)

第60号住居跡出土遺物（第86・87図）

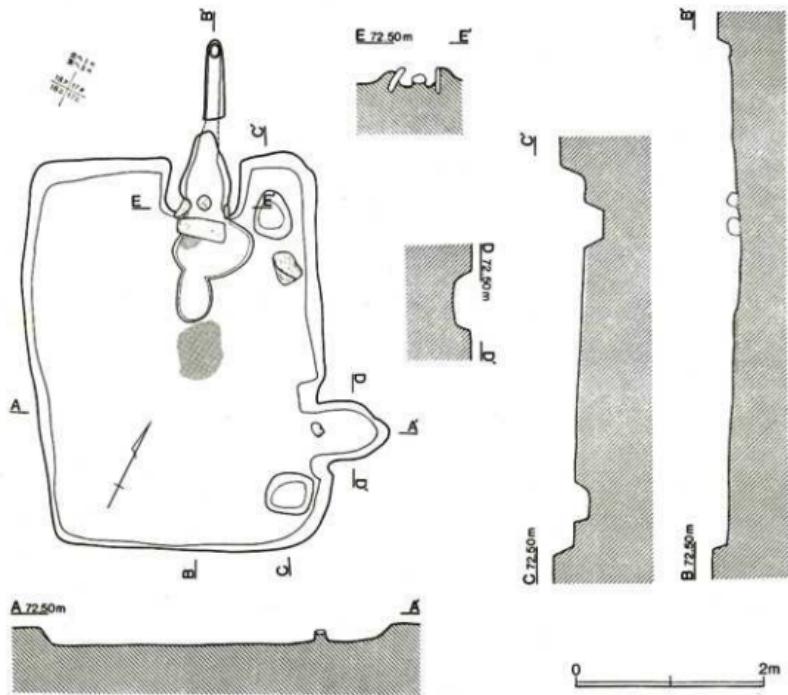
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	口径 13.0 底径 6.6 器高 4.2	平底から指差し込み部を経て、体部と外反する口縁に至る。体部に微細鉄洋付着。	右回転撚で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.4以下B+C+D+E 焼成：1 色調：10YR 6/3にぶい黄橙 残存：90% 貯蔵穴
2	壺 須恵器	口径 13.4 底径 6.4 器高 4.7	平底から指差し込み部で外反し、体部を絶て肥厚する口唇に至る。	右回転撚で。底部右回転糸前引き切り。 末野産	胎土：1.0以下のB+C+D+E多+金H 焼成：1 色調：5YR 5/4にぶい赤褐 残存：70% 磁・床
3	高台付 壺 須恵器	高台径 8.0	高台はやや外に張る。	右回転撚で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撚で。 末野産	胎土：0.3以下のB+C+E 焼成：3 色調：10YR 5/1褐灰 残存：底50%
4	高台付 壺 須恵器	口径 14.0 現高 5.5	体部は丸く、口唇にて僅かに反る。高台ははがれる。	右回転撚で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外側に粘土を補なう。 末野産	胎土：0.7以下B+E少 焼成：3 色調：2.5Y6/3にぶい黄 残存：60% 床
5	蓋 須恵器	口径 15.7 天井径 7.9 器高 2.9	つまみのない蓋で、天井部は平ら。口唇部は端面をつくり、断面三角形となる。	右回転撚で。天井部右回転離し糸切り1.5周。 末野産	胎土：0.9以下B+D+E多 焼成：1 色調：N3/0 褐灰 残存：60% 貯蔵穴
6	蓋 須恵器	口径(15.8) 天井(8.0) 器高 2.9	つまみのない蓋で、焼け歪む。天井部は平らで、口唇は屈曲して垂れ下がる。	右回転撚で。天井部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：B+E多 焼成：5 色調：N4/0灰 残存：50% 貯蔵穴
7	高台付 壺 須恵器	口径 14.4 高台径 8.2 器高 6.2	高台はハの字状に開き、端部水平となる。体部は直線的に開き、厚手である。	右回転撚で6周。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内外右回転撚で。 末野産	胎土：0.7以下B+C+D+E多 焼成：5 色調：N3/0灰 残存：100% 貯蔵穴
8	高台付 壺 須恵器	口径 14.1 高台径 8.2 器高 6.0	高台はハの字状に開き、端部は沈線を持ち外傾する。口唇は大きく外反する。	右回転撚で8周。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内外右回転撚で。 末野産	胎土：0.2以下のB+D+E多 焼成：2 色調：10YR 7/2にぶい黄橙 残存：80% 床
9	蓋 須恵器	口径 16.4	天井部にはがれあり。口唇部は屈曲して垂れ下がる。	右回転撚で。 末野産	胎土：0.7以下B+D+E多+H 焼成：2 色調：10YR 6/3にぶい黄橙 残存：70% 磁
10	高台付 壺 須恵器	口径 14.7 高台径 8.2 器高 6.7	高台はハの字状に開き、端部は丸くなる。口唇は外反する。体部は埴輪目顕著。	右回転撚で9周。底部右回転離し糸切り。高台張りつけ後、回転撚で。 末野産 胎土分析No.16	胎土：0.7以下B+C+D+E+H多 焼成：1 色調：10YR 6/2灰褐 残存：90% 床



第87図 第60号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	皿 須恵器	口径(14.6) 底径(6.4) 器高 2.7	平底から直線的に外傾し、口唇にて外反する。	右回転撚で5周。底部右回転糸切り。	胎土: 0.3以下 B・D・E 多焼成: 5 色調: N3/0 暗灰 残存: 25%
12	杯 須恵器	口径(12.2) 底径(5.0) 器高 3.5	平底から外傾する体部を経て、僅かに外反する口唇	右回転撚で7周。底部右回転糸切り。	胎土: B+D少 焼成: 1 色調: 5Y 7/3 浅黄 残存: 50%
13	杯 土師器	口径(19.0) 器高 3.2	底部から緩やかに屈曲して、体部で一端反り、口縁にて内擣する。口唇内側沈線。	口縁内外横撚で。外面底部 窪削り。摩滅著しく整形不明瞭。	胎土: B・F多 烧成: 1 色調: 5YR 6/4にぶい橙 残存: 15% 瓶
14	蓋 須恵器	口径(15.4) 底径(7.7) 器高 2.7	5と同様口唇部が三角形になる。天井部は糸切り失敗のため段が付く。	右回転撚で6周。天井部右回転糸切り。	胎土: 0.2以下 B+C+E 焼成: 5 色調: N3/0 暗 灰 残存: 25%
15	台付甕 土師器	口径 12.3 胴径 13.1 現高 7.8	丸い胴部からコの字状口縁に移行するが、口唇は薄くなる。全体に薄手。	口縁2段の横撚での後、胴上部を右→左への窪削り。 胴中位を上→下への窪削り。内面は窪撚で。	胎土: 微A+B+C+H 焼成: 2 二次加熱 色調: 2.5Y R6/6橙 残存: 胴中 位以上 100% 瓶
16	台付甕 土師器	基部径 4.8	脚は大きく開くが上下が欠失。接合部より剥離する。	脚内面左回りの窪撚での後、内外横撚で。	胎土: 微A多+B+F 烧 成: 3 色調: 5YR 7/4 にぶい橙 残存: 脚 瓶
17	甕 土師器	口径 13.5 底径 4.9 現高 9.0	平底から直線的に外傾する 体部を経て、中位にて屈曲 し内擣する。	外面胴中位を右→左への窪 削り、胴下位は上→下への 窪削り、底部は一方向の窪	胎土: 微A多+B+D+H 焼成: 3 色調: 2.5YR 6/6橙 残存: 脇下半70%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
18	紡錘車 石製品	外径 器厚 孔径	4.6 1.8 0.9	側面は丸味を持ち、孔怪部 は端部でやや孔が広がる。 表面に鉄滓が付着する。また 広端部には「大」の刻線 文字が、相対して 2 つあ る。	削りが施される。内面は右 →左への範囲で。	重量: 49.26g 残存: 100%
19	紡錘車 土器製			土器の底部を擦って使用す る。一面に余切りらしきも のが見られる。	末野産 胎土: 0.2 以下 B + D 焼 成: 3 色調: 7.5Y6/1灰 残存: 30%	

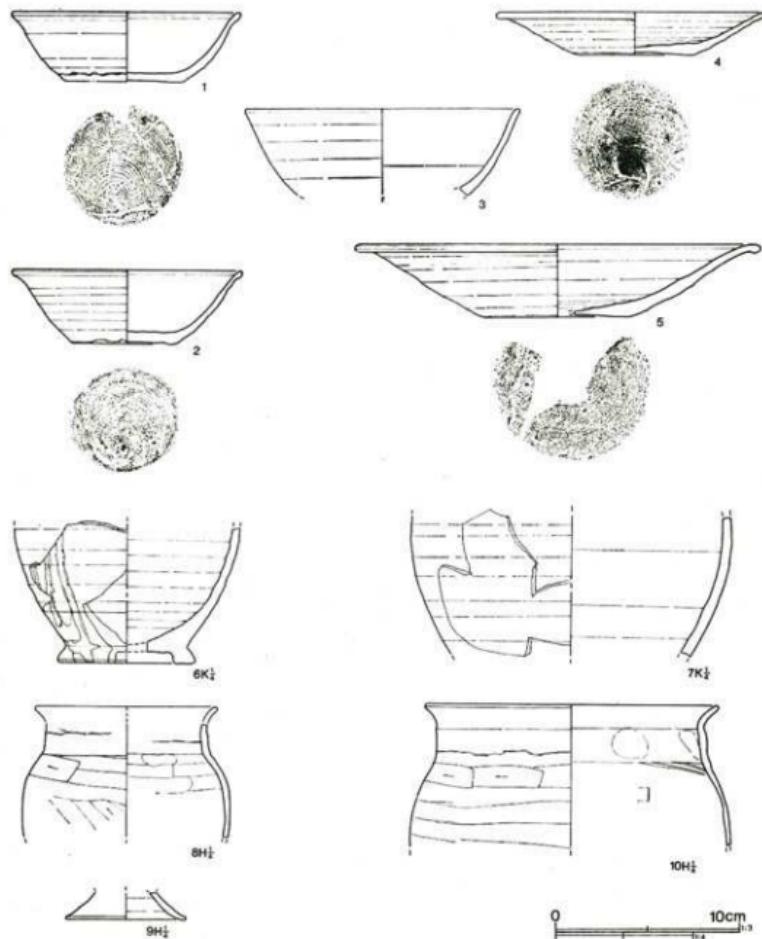


第88図 第61号住居跡

第61号住居跡（第88図）

17—ニ・ヌ区に位置する。規模は $4.2 \times 3.2\text{m}$ 、深さ 0.2m を測る。形態は長方形で、主軸はN—26°—Wで、床標高は72.15mである。

竈は北壁右寄りと東壁右寄りの2ヶ所にあり、北竈は長さ $1.9 \times$ 幅 0.5m で、長い煙道としっかりした袖を持つ。また石の支脚を備え、側壁と天井には片岩が使われる。東竈は長さ $0.95 \times$ 幅 0.6m で、短い袖を持ち、石の支脚を備える。北・東両竈の右側にそれぞれ径 0.5m 前後の貯蔵穴を持つ。



第89図 第61号住居跡出土遺物

北竈焚口前方と中央付近に鉄滓が分布する。柱穴などは見つからなかった。

遺物は竈から土師台付甕(9)、土師器甕(8)が、南東隅ピットから坏(1)、壺(3)が出土した。他に皿(4)と灰釉瓶(7)が出土する。(6)はA地区と(7)は62号住居跡と接合する。製鉄関連遺物として鉄滓235kgが出土する。

第61号住居跡出土遺物（第89図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.5 底径 6.3 器高 3.8	平底から内凹する体部に移り、口唇にて外反する。	右回転拂で5周。底部右回転離し糸切り。 末野產	胎土：1.2以下B+D+E 焼成：2 色調：2.5Y6/3 にぶい黄 残存：80% ピット1
2	坏 須恵器	口径 12.6 底径 5.7 器高 4.0	平底から内凹気味に立ち上がり、口唇にて外反する。	右回転拂で7周。底部右回転まわし糸切り。 末野產	胎土：1.1以下B+C+E 焼成：4 色調：5Y7/1 灰白 残存：60% ピット2
3	壺 須恵器	口径 16.0	内凹気味に立ち上がる。	右回転拂で5周。南北企産	胎土：微A微+金H+I微 焼成：1 色調：7.5YR 6/3にぶい褐 残存：12% ピット1
4	皿 須恵器	口径 15.1 底径 6.2 器高 2.3	平底から直線的に外傾する。口唇は大きく外反する。	右回転拂で7周。底部右回転離し糸切り。 末野產	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：4 色調：5Y7/3 浅黄 残存：50%
5	皿 須恵器	口径 22.8 底径 8.0 器高 3.9	大形の皿であり、口唇部は大きく外反し、玉縁状になる。	右回転拂で6周。底部右回転離し糸切り。 末野產	胎土：0.9以下B+E 焼成：4 色調：5Y7/2灰 白 残存：70%
6	瓶 灰釉 高台径 (9.9)	胴径(16.3)	高台は外へ張り出し、台形となる。端部は水平となる。内外面とも繪緞目が明瞭である。淡緑色の釉が流れれる。	右回転拂で。体部下位に回転窓削りが入る。高台付着後内側に指拂で。 猿投產	胎土：夾雜物ほとんどない 焼成：5 色調：7.5R4/6 赤 残存：20% ピット1
7	瓶 灰釉	胴径 23.0	胴下半の部分。中位以上に斑点状の黄白色釉あり。	右回転拂で。一部左回転拂で。胴下位に右回転窓削り。 猿投產	胎土：微A微、夾雜物ほとんどなし 焼成：5 色調： 5Y5/1灰 残存：25%
8	甕 土師器	胴径(14.9)	丸い胴部から直立する口縁に移る。	外面胴部右→左・右下→左上への窓削り。内面は上位が指拂で、下位が籠拂で。	胎土：微A多+F+H+G 焼成：4 色調：5YR5/4 にぶい赤褐 残存：27%
9	台付甕 土師器	脚径 8.6	脚はハの字状に大きく開く。	内外とも横拂で。二次加熱	胎土：微A多+F+G+H 焼成：2 色調：5YR6/6 橙 残存：50% 第1竈

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	甕 土師器	口径 21.0 胴径 22.9	球胴からコ字状口縁に移る。	口縁を横撫した後、胴外面を右→左へ箒削りする。 内面は右→左への木口撫で。	胎土：微A多 + F + G 焼成：2 色調：5 YR 6/6 残存：75% 第1輩

第62号住居跡（第90図）

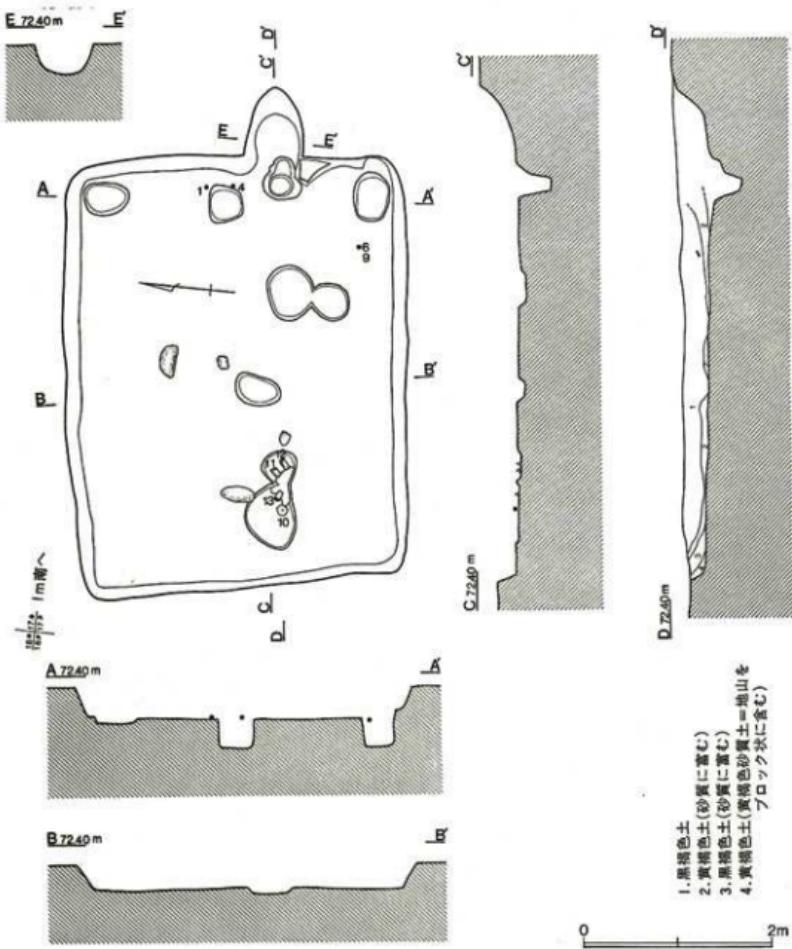
17-1区に位置する。規模は4.6×3.65mで、深さは0.36mを測る。形態は長方形で主軸はN-84°-E、床標高は71.91mを測る。

竈は短壁である東壁中央右寄りにあり、長さ1.2×幅0.35mを測る。焚口には深さ0.35mのピットが存在するが、竈と直接関連があるか不明である。床には数個のピットが存在するが、竈左と南東部のピットは0.3mの深さがあり、貯蔵穴の可能性もある。西壁近くのピットには羽口が3本傾斜面に並ぶが、炉であるか不明である。

遺物は壺(1)・(2)、高台付塊(3)、蓋(4)、細頸壺(5)、土師器甕(6)・(7)・(8)・(9)、土師器台付甕(10)、羽口(11)・(12)・(13)が出土する。第76号住居跡と接合したのが4個体ある（第76号住居跡参照）。製鉄関連遺物として鉄滓200gと羽口数個がある。

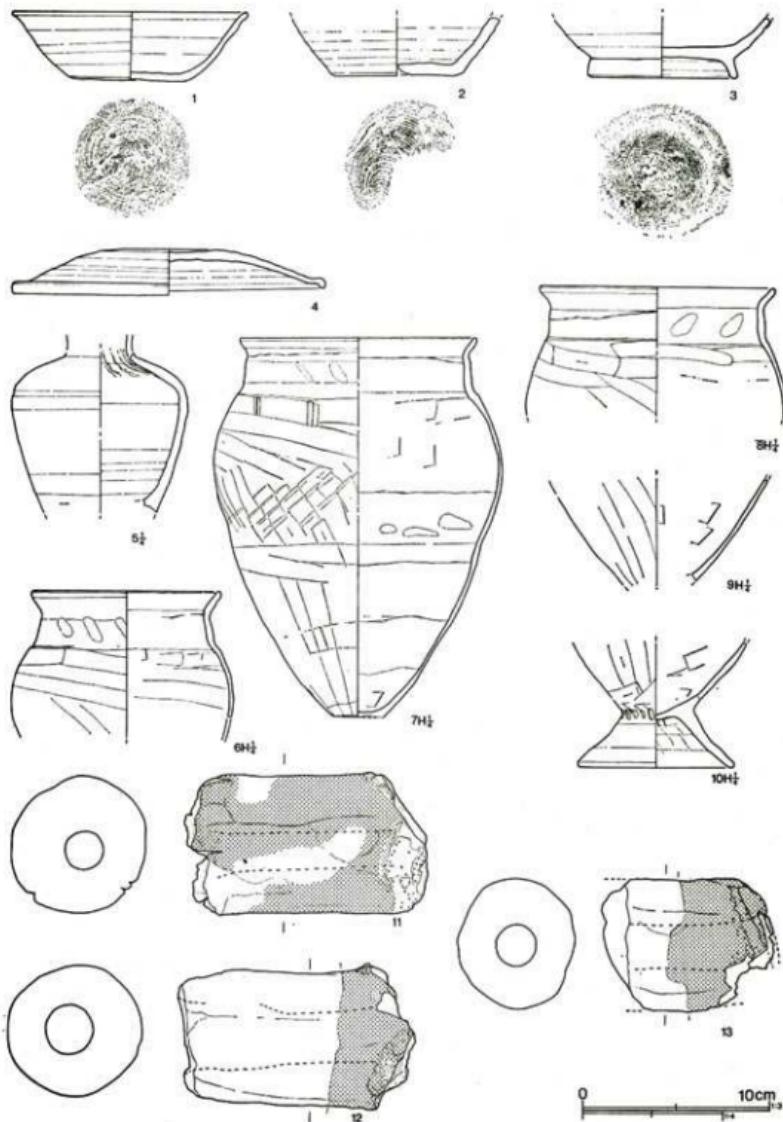
第62号住居跡出土遺物（第91図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	口径 12.6 底径 6.2 器高 3.7	平底から外傾する体部に移る。摩滅著しい。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。	胎土：0.6以下B+E多 焼成：2 色調：5 Y 6/1 灰 残存：80% 床
2	壺 須恵器	底径 6.5	平底から外傾する体部に移る。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。	胎土：0.6以下B+C 焼成：5 色調：7.5 Y 6/2灰 オリーブ 残存：50%
3	高台付 塊 須恵器	高台径 8.0	高台は直線的に外開きする。端部は丸くつくりられる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。	胎土：0.7以下B+C 焼成：4 色調：7.5 Y 7/1灰 白 残存：底部100%
4	蓋 須恵器	口径 16.6 天井径 7.4 器高 2.5	つまみのない蓋である。口縁は下へ折れ曲る。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。摩耗のため不明瞭。糸切り部周辺箒削り。	胎土：0.5以下B+C+D+E多 焼成：1 色調： 7.5 Y 6/2灰 オリーブ 残存：80% 胎土分析No.4 床
5	細頸壺 須恵器	肩部径 (12.3)	最大径が肩部にある。肩部から窄まり、外反して頸部に至る。	右回転撫で。外面体部下位は右回転箒削りされる。頸部から肩部にかけて内面に絞り目が見られる。内面下位左回転撫で。南比企産？	胎土：0.2以下B+C 焼成：5 色調：10 Y 4/1灰 残存：体部20%



第90図 第62号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	甕 土師器 銅鑄	口径 13.4 現高 15.7	丸い胴部から、内傾するコ の字状口縁に至る。口唇は 外傾し肥厚する。二次加熱	口縁3段の横振での後、胴 部を右→左へ範削りする。 内面は右→左への範削で。	胎土: 0.3以下 A+E 焼成: 3 色調: 7.5Y R6/6 残存: 75% 床



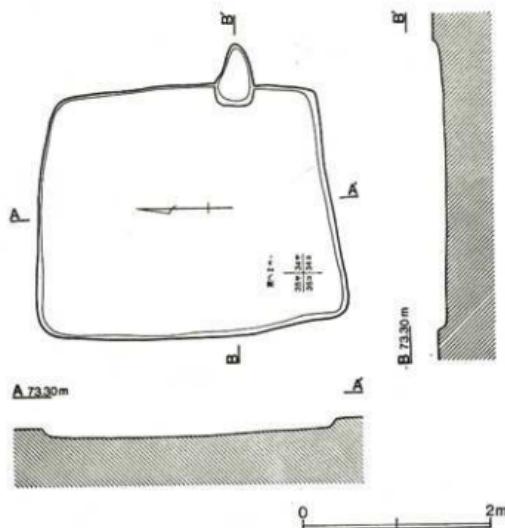
第91図 第62号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	甕 土師器	口径 17.9 胴径 21.8 底径 3.8 器高 28.6	小さな底部から最大径を上位に持つ胴部を経て、コの字状口縁に移る。薄手。	口縁横撫で2段の後、胴部上位を右→左、下位を左上→右下へ範削りする。内面は右→左への範撫で。粘土帯読み上げは胴部で5段。	胎土：微A多+D+E+F+G+H 烧成：2二次加熱 色調：7.5YR7/6橙 残存：50% 瓢
8	甕 土師器	口径(16.6) 胴径(18.4)	丸い胴から直立するコの字状口縁に至る。	口縁横撫での後、胴部は右→左への範削りする。内面は木口撫で。	胎土：微A多+B+D+E+F+G+H 烧成：4 色調：2.5Y6/6明黄褐 残存：30%
9	甕 土師器		外傾する胴下半部。6と同一個体か。	外面上→下への範削り。内面右→左への範撫で。	胎土：微A+E 烧成：3 色調：5YR6/6橙 残存：80% 床
10	合付甕 土師器	脚径 11.1	脚部は大きく開き、基部から全体部へも内窩気味に開く。二次加熱。	脚部内外範撫で。脚部外面上→下への範削り。内面右→左への木口撫で。	胎土：微A+B+F+G+H 烧成：2 色調：2.5YR6/6橙 残存：80% 床
11	羽口	全長 13.1 外径 7.3 孔径 2.05	外径は基部がやや太くなる。孔部も基部が太くなる。全面が還元部である。	両端を口部として使用しているため発泡している。右側を最初に使用したため、隔壁が著しい。棒に巻きつけ、表面を指頭により押圧して整形する。	胎土：1cm以下A+スサ多 残存：100%
12	羽口	全長 12.8 外径 7.1 孔径 2.6	口部の方が径が太く、基部で窄まる。基部の孔径は擦れで太くなる。還元部が狭い。多に比べ砂が多い。	棒に巻きつけ、表を指頭で撫でる。口部は発泡し、一部鉄滓が付着する。	胎土：細A多+スサ
13	羽口	現長 9.3 外径 6.9 孔径 2.2	口部は傾斜するが、下半は欠損する。また基部も欠損する。	棒に巻きつけ板に押しつけ多面をつくる。口部は著しく発泡するがガラス質にならない。部分的に鉄滓付着。	胎土：A多+D+スサ 残存：60%

第63号住居跡（第92図）

34—サ区に位置する。規模は2.7×3.2mで、深さ0.15mを測る。形態は東壁が狭い台形となり、主軸はN—89°30'—Eで、床標高は72.87mである。

竈は長辺である東壁右寄りにあり、長さ0.65×幅0.42mである。柱穴はなく、出土遺物もない。



第92図 第63号住居跡

第64号住居跡（第93図）

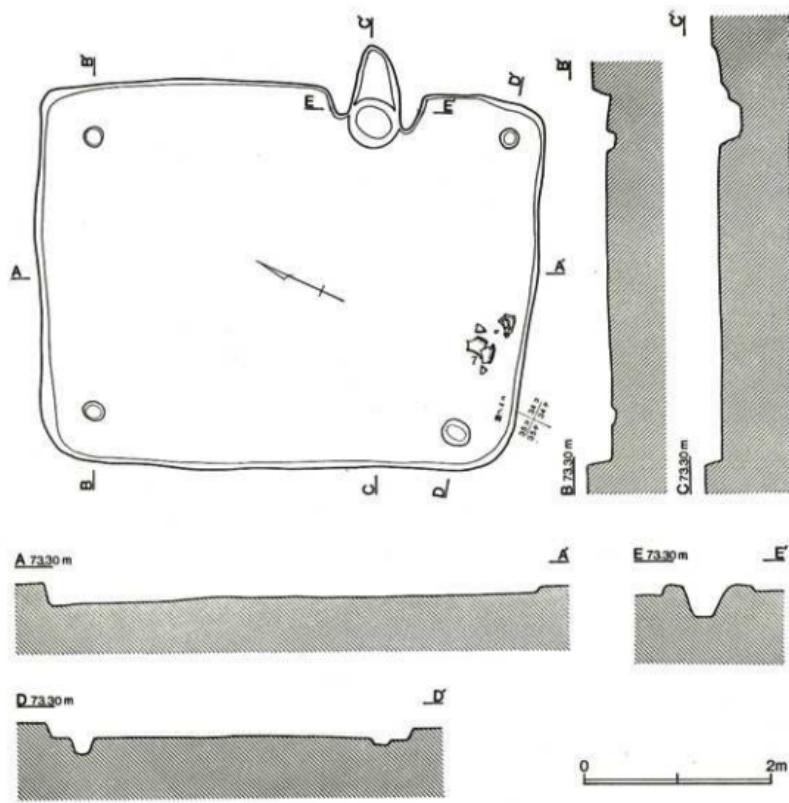
34—E区にあり、規模は $4.13 \times 5.42\text{m}$ で、深さは 0.24m を測る。形態は長方形で、主軸はN—68°—Eで、床標高は 72.86m を測る。

竈は長辺である東壁右寄りにあり、長さ $1.1 \times$ 幅 0.95m で、焚口は深さ 0.35m の掘り込みがある。袖は高まりを持って存在する。柱穴は4隅にあるが、径 $0.2 \sim 0.3\text{m}$ の浅いビットである。

遺物は竈内から杯(1)・(2)、砂鉄の付着した甕(5)・(7)、台付甕(4)が、覆土から杯(1)、高台付塊(3)、土師器甕(6)が出土する。甕(7)は床・覆土と接合した。製鉄関連遺物として鉄滓が 2.35kg ある。

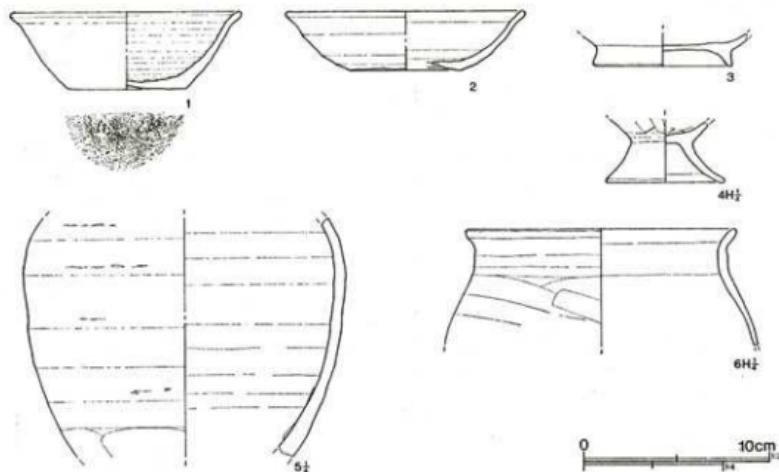
第64号住居跡出土遺物（第64・65図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径(12.5) 底径(6.3) 器高 4.2	平底から丸味に立ち上がり、口唇にて外反する。	右回転撚で8周。底部右回転糸切り。 南比企産	胎土：0.7以下A+I微 焼成：5 色調：10G Y6/1 緑灰 残存：30% 竈・覆土
2	杯 須恵器	口径(13.0) 底径(6.0) 器高 3.2	底径から丸味を持つ体部を経て、僅かに外反する口唇に至る、扁平な形態である。	右回転撚で5周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.7以下B+C+D 焼成：5 色調：N 5/0灰 残存：30% 竈

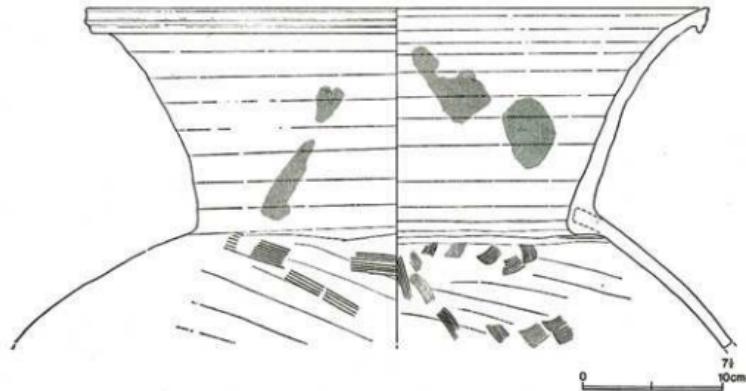


第93図 第64号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付 壇 須恵器	高台径 7.5	高台は僅かに外開きするが、端部は薄く尖る。	右回転撲で。摩滅著しく整形不明瞭。	胎土：0.7以下 B + D + E 焼成：1 色調：10Y R 6/4 にぶい 黄橙 残存：底部 100% 覆土
4	台付甕 土師器	脚径 8.4	脚は外へ大きく開く。二次加熱を受けてもろくなる。	脚部内外横撲で。胴下位外面笠削り、内面木口撲で。	胎土：微A多 + D + E 焼成：3 色調：2.5 Y R 5/6 明赤褐 残存：30% 瓦



第94図 第64号住居跡出土遺物(1)



第95図 第64号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕 須恵器	胸径(22.8)	胸中位の破片であるが、最大径は上位に持つようである。内面に多量の砂鉄が付着し、砂鉄容器であろう。	粘土帶積み上げ痕明瞭。右回転撫で。 末野産	胎土: 0.6 以下 B+C 烧成: 5 色調: N 5/0 灰残存: 胸15% 甕・覆土
6	甕 土師器	口径(17.8)	体部から緩やかにコの字状口縁に至る。	口縁横撫で。胴外面横位の箇割り。二次加熱のため器面が荒れ、整形不明瞭。	胎土: 磁 A+E+F+G+H 烧成: 2 色調: 5 Y R 7/6 橙 残存: 20% 覆土
7	甕 須恵器	口径 44.7 頸部径 28.7 口縁高 15.5	胸部から屈曲し、外反する口縁に至る。口唇部は下方に重ね、端面に突帯が巡る形態となる。口縁内外には厚く砂鉄がこびり付く。割れ目にも付着する例もあることから、破片になってから付着したものであろう。	粘土帶積み上げ、平行叩き成形。内面には青海波文が見られる。口縁は積み上げた後、回転撫でを施す。体部と口縁の接合は、体部に口縁を乗せ、粘土を内側に厚く巻き込んでいる。 末野産	胎土: 1.2 以下の A+B+C 烧成: 5 色調: N 4/0 灰残存: 口縁70%肩部10% 床・甕・覆土

第65号住居跡（第96図）

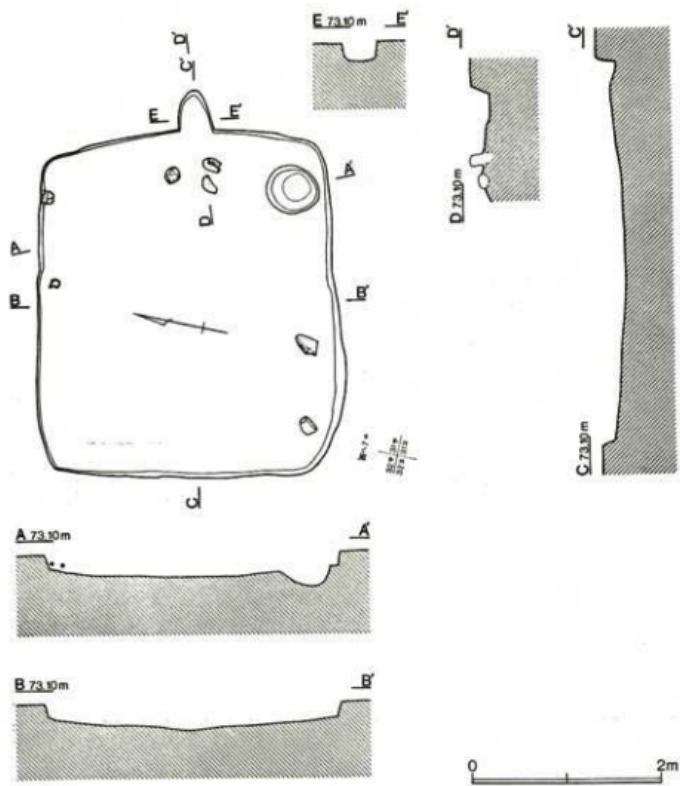
32—サ区に位置し、規模は3.68×3.21m、深さ0.25mを測る。形態は長方形で、北壁がやや短くなる。主軸はN-79°30'—Eで、床標高は72.74mを測る。

竈は短辺である東壁中央にあり、長さ1.0×幅0.35mで、竈前方には石が3つ見られる。床面南東隅に、径0.55mの掘り込みがあるが貯藏穴であろう。柱穴は検出できない。

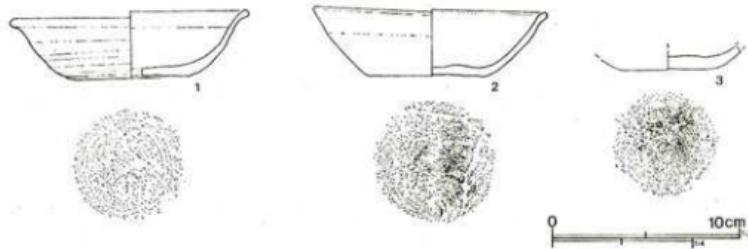
遺物は坏(1)・(2)・(3)が西壁脇より出土した。

第65号住居跡出土遺物（第97図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.8 底径 6.5 器高 3.6	平底から腰らむ体部を経て、やや肥厚し外反する口唇に至る。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土: B+C+E 多 烧成: 1 色調: 10Y R 7/2 にふい黄橙 残存: 80%
2	坏 須恵器	口径 12.5 底径 6.3 器高 3.5	平底からやや腰らむ体部を経て、外反する口唇に至る。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土: 0.2 以下 B+C+D 多 烧成: 2 色調: 5 Y R 6/6 橙 残存: 80% 胎土分析 No.5
3	坏 須恵器	底径 5.3	平底から緩やかに体部へ移る。	右回転撫で。底部右回転糸引き切り。内面底部周辺に深い撫で。	胎土: 0.1 以下 A 多 烧成: 1 色調: 5 Y R 6/8 橙 残存: 底部 100%



第96図 第65号住居跡



第97図 第65号住居跡出土遺物

第66号住居跡（第99図）

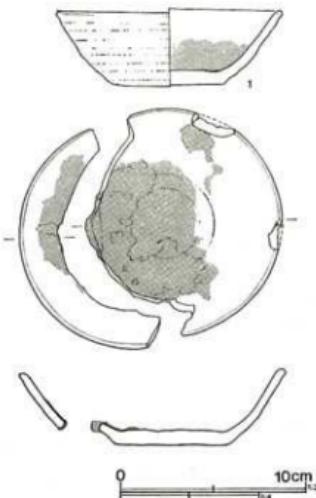
30・31—サ区に位置する。規模は $5.1 \times 4.1\text{m}$ で、深さは 0.4m を測る。形態は長方形で、主軸はN—90°—Eで、床標高は72.35mある。

竈は東壁中央右寄りと、北壁中央左寄りにあり、東竈は煙道が垂直に立ち上がるが、北竈は緩やかに傾斜する。

竈と南壁脇には石が散乱する。

柱穴など床面の施設は検出できなかった。

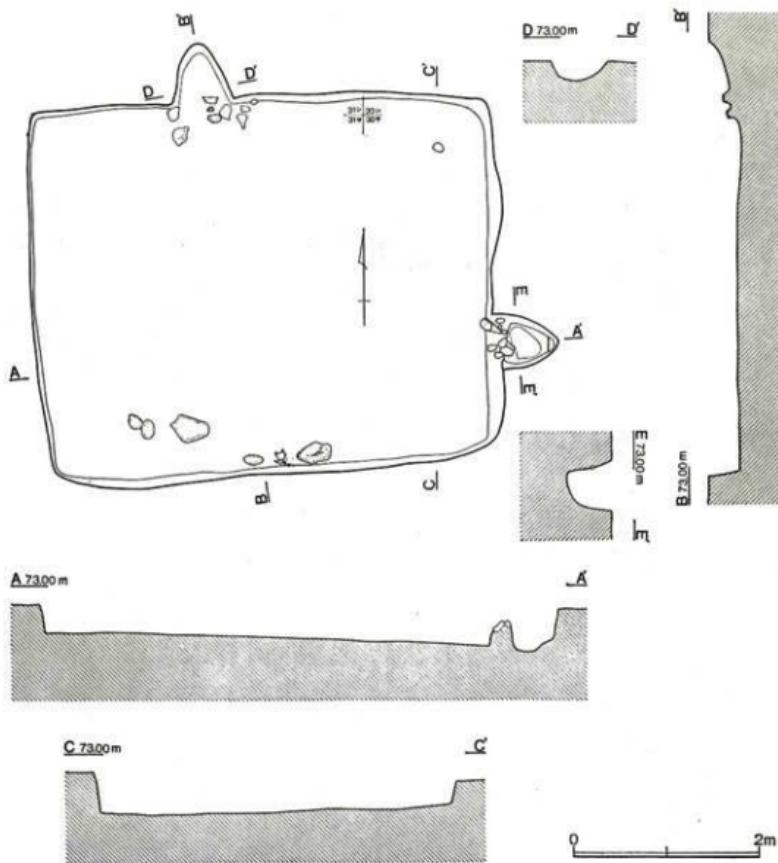
遺物は東竈から高台付塊(8)、頬鉢、土師器妻端が、北竈から杯(2)・(3)・(4)、土師器杯(5)・(6)、土師器甕(2)～(4)が出土する。床からは鉄滓付着の杯(1)が、また西壁脇には鉄滓が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓が390g出土する。



第98図 第66号住居跡出土遺物(1)

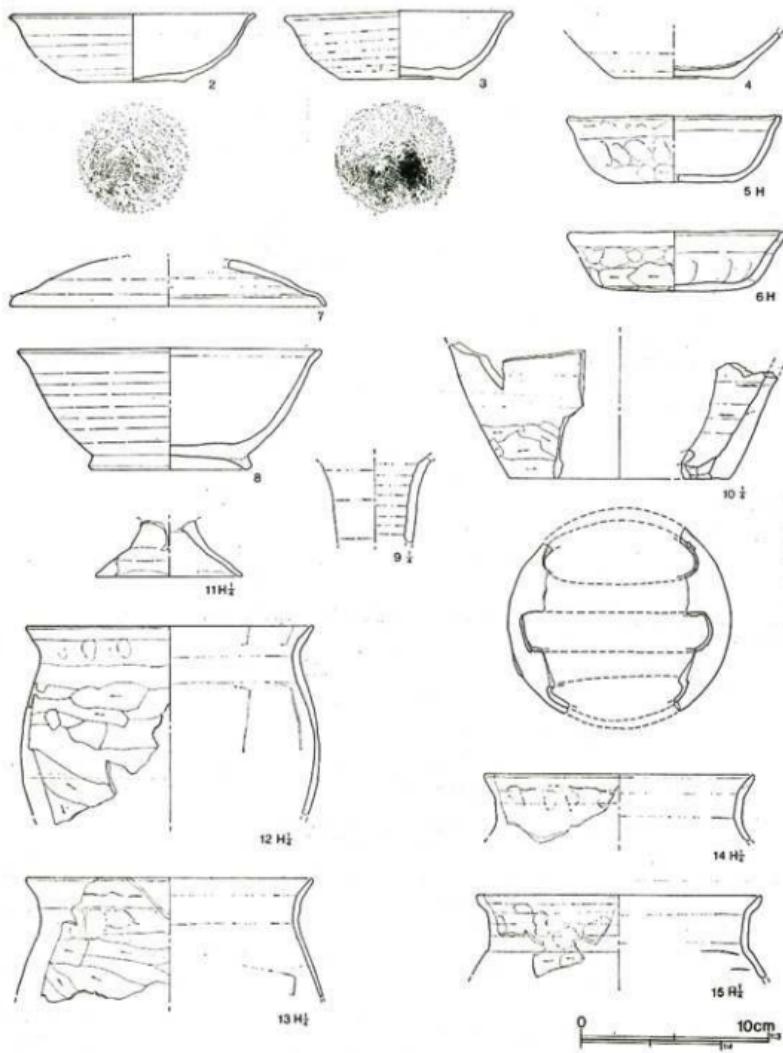
第66号住居跡出土遺物（第98・100図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 12.2 底径 5.9 器高 4.1	内面に鉄滓が流れ付着する。割れ口にも流れ出しているが、鉄滓を入れた後に割れて流れ出したものであろう。杯はやや厚目であるが、埴燒として使用したものか不明。	右回転撫で9周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：B+C+D 焼成：3 色調：10YR 6/6 明黄褐 残存：100% 床
2	杯 須恵器	口径(13.2) 底径 5.7 器高 3.6	平底から内側する体部を経て、口唇にて外反する。薄手。	右回転撫で6周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：0.6以下B+C+D ・E多 焼成：3 色調： 7.5Y4/1灰～5YR4/4に よる赤褐 残存：60% 北竈
3	杯 須恵器	口径 12.2 底径 6.4 器高 3.6	やや上げ底気味の底部から、脹らむ体部を経て外反する口縁に至る。	右回転撫で7周。底部右回転糸引き切り。末野産	胎土：0.3以下B+C+E +金H 焼成：3 色調： 2.5YR5/1赤灰 残存：80% 北竈



第99図 第66号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	杯須恵器	底径(6.3)	底部から直線的に外傾する体部へ移る。多孔質。	右回転撲で。底部右回転難し糸切り。 末野窯	胎土：0.8以下B+C+D 焼成：1 色調：10Y R6/1 褐灰 残存：25% 北窓
5	杯土師器	口径(11.4) 器高 3.5	平底から緩やかに体部に移る。口唇内側には沈線を入れる。体部には指頭痕あり。	口縁横撲で。底部右→左への窓削り。	胎土：B+F多 焼成：3 色調：2.5Y R6/6橙 残存：40% 北窓



第100図 第66号住居跡出土遺物(2)

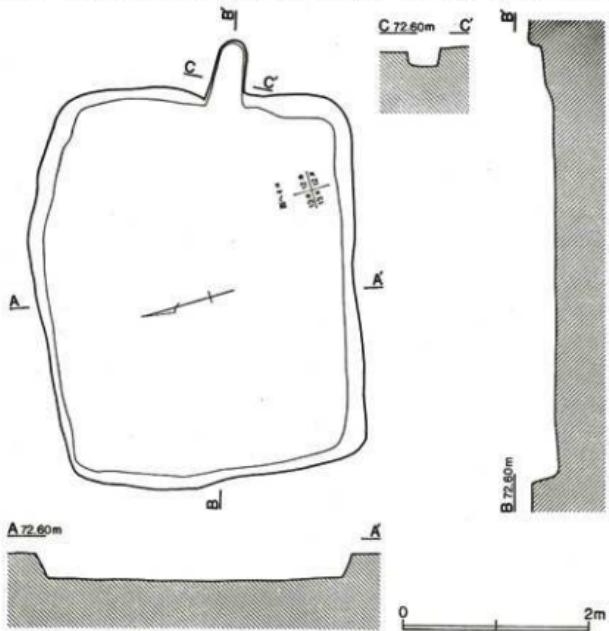
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	杯 土師器	口径(11.6) 高さ 3.2	平底から緩やかに立ち上がり、内側に沈線を持つ口唇に至る。体部に指痕痕。	口縁横撫で。底部と体部下位は荒削り。	胎土：B + F 多 焼成：3 色調：5 YR 6/6 橙 残存：50% 北竈
7	蓋 須恵器	口径(16.9)	口唇部はやや外方に向けて開き、全体に薄いつくりとなる。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.7 以下 B + C + D + E 多 焼成：1 色調：2.5 YR 7/2 明赤灰 残存：25% 覆土
8	高台付 塊 須恵器	口径(16.3) 高台径(8.8) 器高 6.4	高台は短かく外に張り出す。口唇は外反する。	右回転撫で 8周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.8 以下 B + C + D + E 多 焼成：1 色調：7.5 YR 7/6 橙 残存：45% 東竈
9	瓶 須恵器		口縁の一部であるが、緩やかに外反する。斑点状の釉が掛かる。	右回転撫で 9 + α 周。 南北企座	胎土：微 B + C + I (1cm=6) 焼成：5 色調：7.5 Y 7/2 灰白 残存：口 25%
10	瓶 須恵器	底径(15.4)	孔部に2本の棱があったと考えられ、中央の1孔は細長く、端の2孔は半月状となる。体部は彎曲を持って立ち上がる。	粘土帶積み上げ、右回転撫で。孔部は底を作った後、内外から窓でカットされる。体部下位は右→左、最下位は左→右への手持も荒削り。 末野産	胎土：0.6 以下 B 焼成：5 色調：5 PB 3/1 暗青灰 残存：底部30% 覆土・東竈
11	台付甕 土師器	脚径(10.3) 脚高 3.9	脚は大きく開くが、中位で屈曲し、より開く。	脚部横撫で。	胎土：微 A 多 + B + E + F + G 焼成：3 色調：2.5 Y 5/8 明赤褐 残存：20% 覆土
12	甕 土師器	口径(20.1) 胴径(21.0)	あまり張りのない胴部から、緩やかに外反する口縁に至る。口縁はやや厚い。	外面は横撫での後、胴上位は右→左への、胴中位は上→下への削り。内面は胴部が右→左への荒削りの後、口縁横撫で。	胎土：微 A 多 + B + F + G 焼成：3 色調：2.5 YR 4/8 赤褐 残存：口縁 30% 北竈
13	甕 土師器	口径(20.2)	体部から緩やかに外反する口縁に至る。	口縁横撫での後、胴部右→左への荒削り。内面は荒削りで。	胎土：B + E + F + 金 H 多 焼成：1 色調：5 YR 6/6 橙 残存：20% 北竈
14	甕 土師器	口径(18.9)	コの字状口縁。	口縁横撫で。	胎土：B + E + F + 金 H 多 焼成：3 色調：5 YR 7/6 橙 残存：口縁 20% 北竈
15	甕 土師器	口径(19.5)	コの字状口縁。	口縁横撫で 2段。胴部は右→左への荒削り。	胎土：B + E + F + G + 金 H 多 焼成：3 色調：2.5 YR 5/6 明赤褐 残存：20% 東竈

第67号住居跡（第101図）

13—ネ区に位置する。規模は $4.3 \times 3.55\text{m}$ 、深さは 0.29m を測る。形態は長方形で、北壁がくの字に曲る。主軸はN— $105^{\circ}30'$ —Eで、床標高は 72.11m である。

竈は短辺である東壁右寄りにあり、長さ $0.7 \times$ 幅 0.4m で、煙道は水平の後、垂直に立つ。

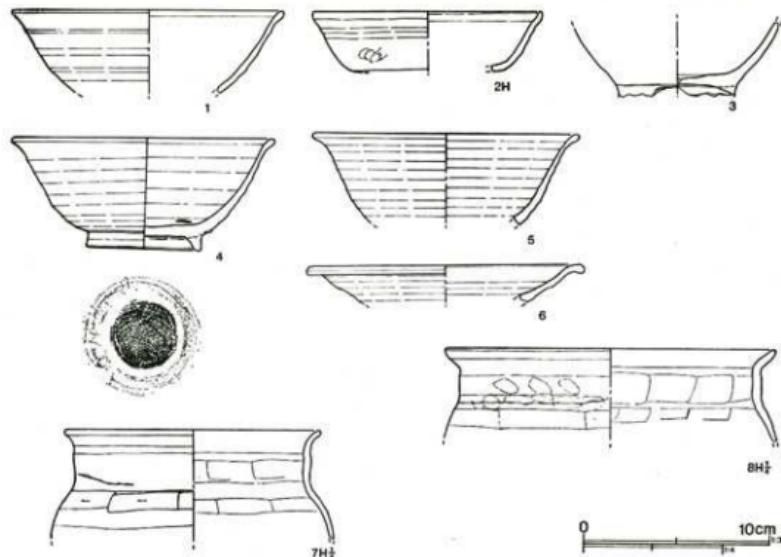
遺物は壺(1)、土師器壺(2)、皿(6)、高台付塊(3)・(4)・(5)、土師器甕(7)・(8)が出土する。



第101図 第67号住居跡

第67号住居跡出土遺物（第102図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1 須恵器	壺	口径(14.6)	丸い体部から外反する口縁に至る。	右回転撚で。	末野産 胎土：B+C+D 焼成： 2 色調：2.5Y7/2灰黄 残存：13%
2 土師器	壺	口径(12.3)	底部から緩やかに屈曲した後、外傾する体部を経て、内側に沈線を持つ口唇へ。	口縁横撚で。底部範削り。	胎土：B+E+F 焼成： 4 色調：5YR6/6橙 残存：25%
3 須恵器	高台付 壺	(6.3)	高台端部に口縁欠損。高台は三角形となる。	右回転撚で。	胎土：0.4以下B+C+E 焼成：1 色調：2.5Y7/2 灰黄 残存：30%



第102図 第67号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	高台付 壺	口径 14.1 高台径 6.2 器高 6.0	高台はあまり開かず、端面 は沈線を巡らせ内傾する。 体部は腰らみ口唇は外反。	右回転撚で9周。底部右回 転糸切り。高台付着後内外 撚で。 末野産	胎土：0.3以下B+C 焼 成：5 色調：N 3/0灰 残存：50%
5	高台付 壺	口径(14.4)	高台は欠損する。体部は丸 く、口縁は大きく外反す る。体部に鍛轆目明瞭。	右回転撚で10周。 末野産	胎土：0.6以下B+C 焼 成：5 色調：2.5Y6/1黄 灰 残存：22%
6	皿 須恵器	口径(15.0)	下半部欠失する。口縁は玉 縁をつくり、大きく外反す る。	右回転撚で。 末野産	胎土：0.5以下B+C 焼 成：5 色調：N 4/0灰 残存：20%
7	甕 土師器	口径(18.1) 胴径(20.0)	直立するコの字状口縁であ る。口縁はやや長い。	口縁は横撚で2段に施した 後、胴部は右→左へ範削 り。内面横位の範撚で。	胎土：微A+D+E+F+ G 焼成：3 色調：5Y R 7/4にぶい橙 残存：13 %
8	甕 土師器	口径(23.3)	直立するコの字状口縁で大 形である。口縁はやや厚目 に作られる。	口縁は2段の横撚で。その 後胴部を右→左へ範削りす る。内面は横位の範撚で。	胎土：微A多+E+F+G +H 焼成：3 色調：7.5 Y R 7/4にぶい橙 残存： 22%

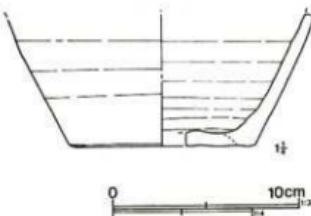
第68号住居跡（第104図）

18—1区に位置する。規模は $5.2 \times 4.9\text{m}$ で、深さは 0.17m を測る。形態は僅かに隅の丸い正方形で、主軸はN— 80° —E、床標高は 72.15m である。

竈は東壁僅か右寄りにあり、長さ $1.05 \times$ 幅 0.8m である。竈の天井に使われた石が落ち込んでいる。

床面には柱穴など、他の施設は見られないが、北東隅に小石が散乱する。

出土遺物は甕(1)が1点出土する。製鉄関連遺物として鉄滓が 245g 出土する。



第103図 第68号住居跡出土遺物

第68号住居跡出土遺物（第103図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 須恵器	底径 13.0	平底から直線的に外傾する 体部へ移る。	粘土帯積み上げ後、叩き成形。 内面に一部青海波文が 見られる。その後回転撫で 整形。底部は木口撫で。	胎土：0.7以下B+C+E 焼成：5 色調：2.5 YR 5/1褐灰 残存：33% 末野産

第69号住居跡（第108図）

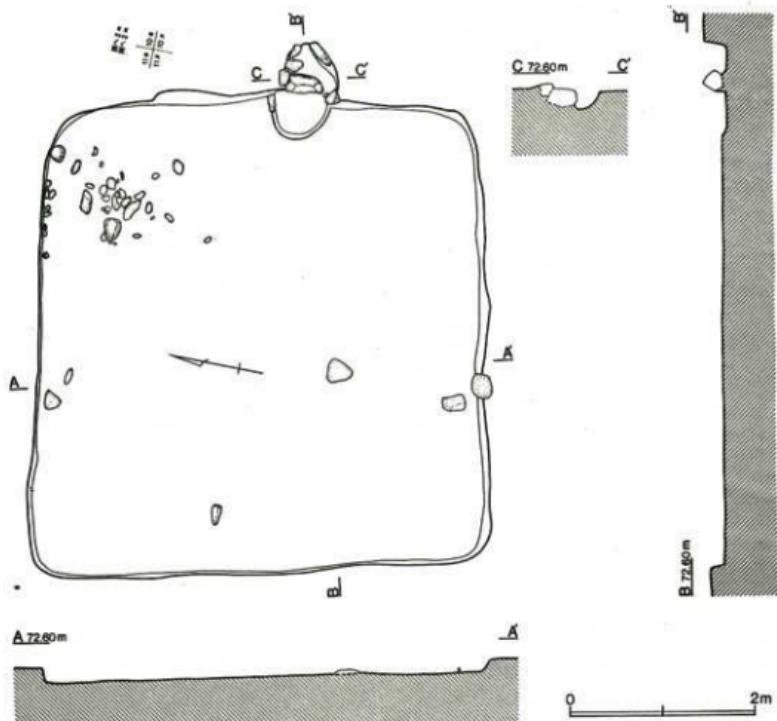
19—セ区に位置し、第70号住居跡に切られる。規模は $3.67 \times 5.28\text{m}$ 、深さは 0.38m を測る。形態は長方形で、主軸はN— 7° —Wで、床標高は 71.27m である。

竈は長辺である北壁中央にあり、長さ $1.5 \times$ 幅 1.15m で、煙道は袋状となり、煙道の中に焼けた天井部が落ち込む。床面全体に20cm前後の石が散乱する。柱穴は4隅にそれぞれ存在する。

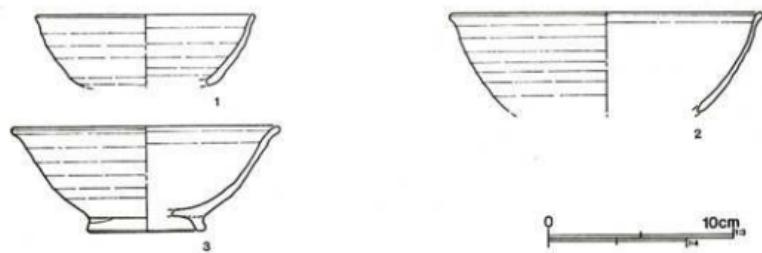
遺物は竈内から高台付塊(2)が出土する他、甕(1)と高台付塊(3)が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓が 260g 出土する。

第69号住居跡出土遺物（第105図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 須恵器	口径(11.9)	丸味を持つ体部である。	右回転撫で6周。 南北全産	胎土：0.2以下B少+I(1 cm=12) 焼成：5 色調： 7.5Y6/1灰 残存：30%
2	高台付 塊 須恵器	口径(17.0)	大振りで薄いつくりである。 口唇は玉縁状につくられ外反する。	右回転撫で8周。 末野産	胎土：0.6以下B+E 焼 成：2 色調：10 YR 7/2 にぶい黄橙 残存：12% 竈



第104図 第68号住居跡



第105図 第69号住居跡出土遺物

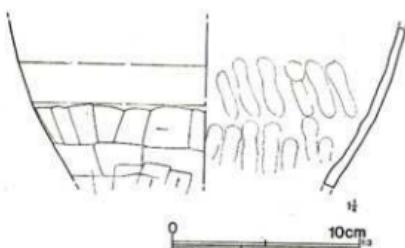
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付塊須恵器	口径(14.6) 高台径 (6.5) 器高 5.6	高台はやや外に張り、端面に沈線を入れる。口縁は大きく外反する。摩滅顯著。	右回転拂で7周。底部右回転糸切り離し後、高台張りつけ。高台の内外に回転拂で。	胎土：0.4以下 B+C+H 焼成：2 色調：10Y R7/3 にふい黄橙 残存：13% 覆土

第70号住居跡（第106図）

18—セ区に位置し、第69号住居跡を切る。規模は 5.66×4.6 m、深さ0.4mを測る。形態は不整形で、長軸はN—0°で床標高は71.3mである。

竈はなく、床には他の施設はない。床には20cm前後の石が散乱する。

遺物は覆土から甕(1)が出土。他に第73号住居跡と接合する甕の破片がある。



第106図 第70号住居跡出土遺物

第70号住居跡出土遺物（第106図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 須恵器	現高 11.3	胴下半部。	胎土帶積み上げの指頭痕が内面に明瞭に見られる。その後、右回転撫でを施す。体部下位外側は毬撫で。	胎土：0.5以下B+C+G 焼成：5 色調：5P B4/1 暗青灰 残存：23% 覆土

第71号住居跡（第109図）

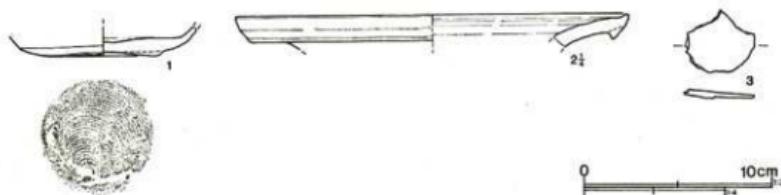
18—ス区に位置する。第72号住居跡を切断する。形態は方形で、主軸はN—164°—Eで、床標高は71.43mである。

竈は南壁左寄りにあり、長さ0.8×幅0.55mを測る。柱穴はなく、出土遺物もない。

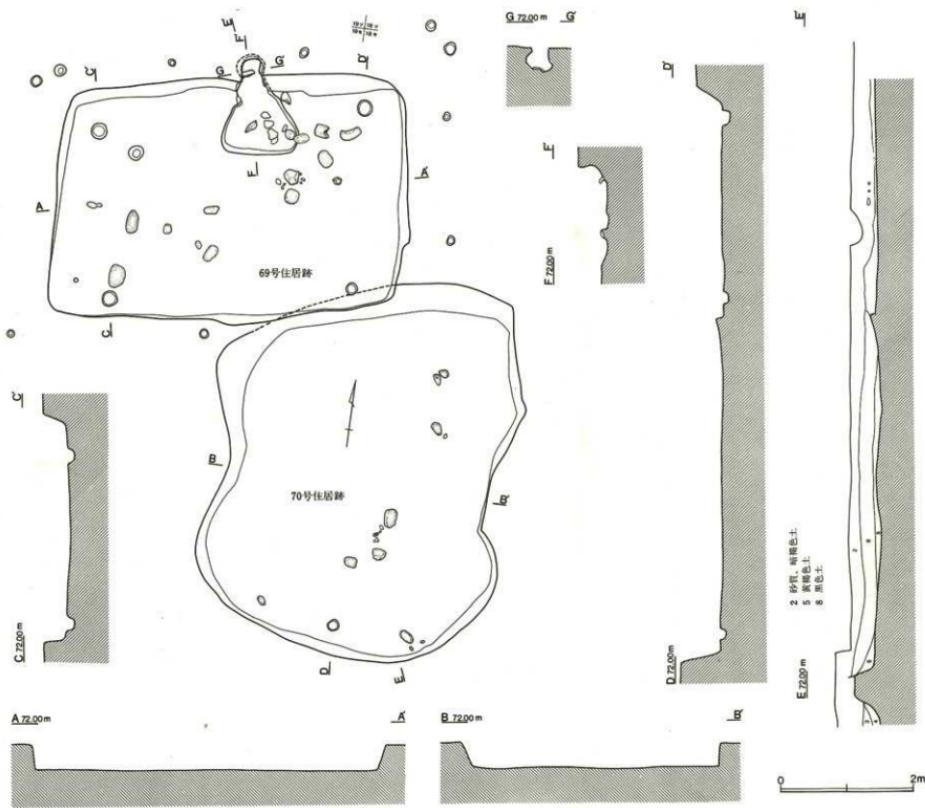
第72号住居跡（第109図）

18—ス区に位置し、第71号住居跡によって切られる。規模は $4.1 \times 2.7 + \alpha$ m、深さ0.45mを測る。形態は不整形円形で、長軸はN—22°—W、床標高は71.08mである。竈および柱穴はない。東壁に接して 1.15×0.6 mの範囲で鉄滓と炭化物が分布し、上層にも鉄滓・焼土・炭化物を含む層が堆積する。

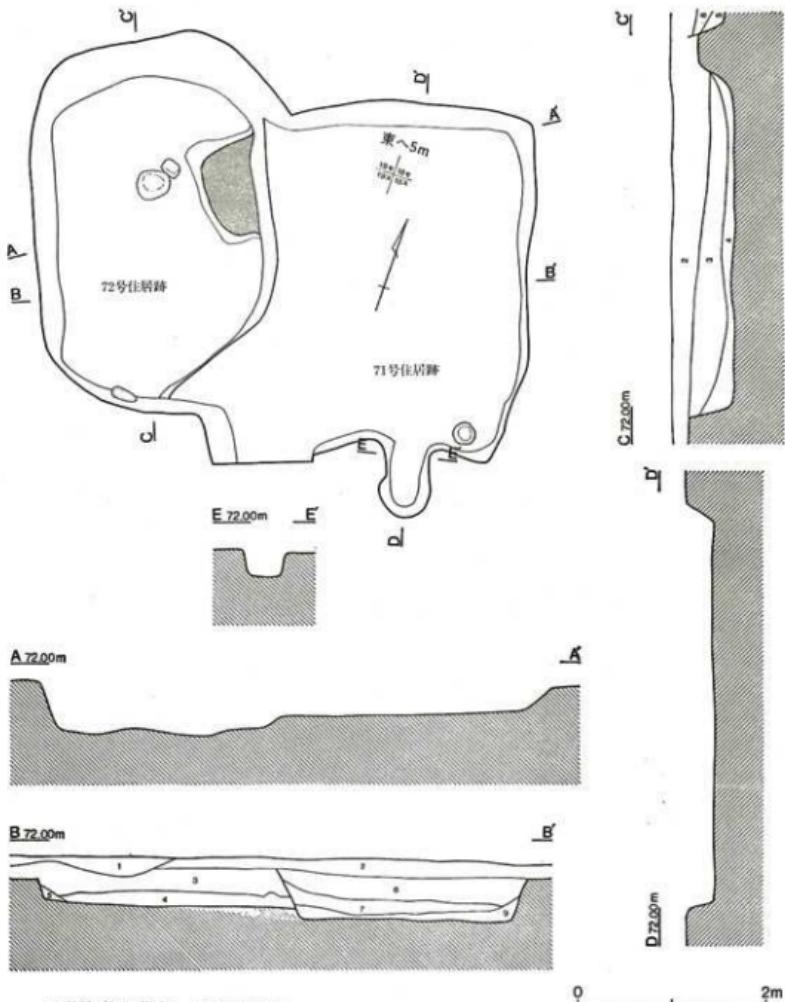
遺物は覆土中より坏(1)、甕(2)、鐵片(3)が出土し、製鉄関連として鉄滓7.73kgと炉壁片がある。



第107図 第72号住居跡出土遺物



第108図 第69・70号住居跡



第109図 第71・72号住居跡

第72号住居跡出土遺物（第107図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	底径 6.0	底部から大きく開き、体部下位にて屈曲し立ち上がる。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.6以下B+C+D+E 焼成：2 色調：2.5 YR 6/8 橙 残存：底部 覆土
2	甕 須恵器	口径(27.5)	口唇端部は上下に突出する。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：12% 覆土
3	板状鉄片	厚さ 0.35	剥離し不整形。僅かに弯曲する。	鍛造。	重量：5.9g

第73号住居跡（第110図）

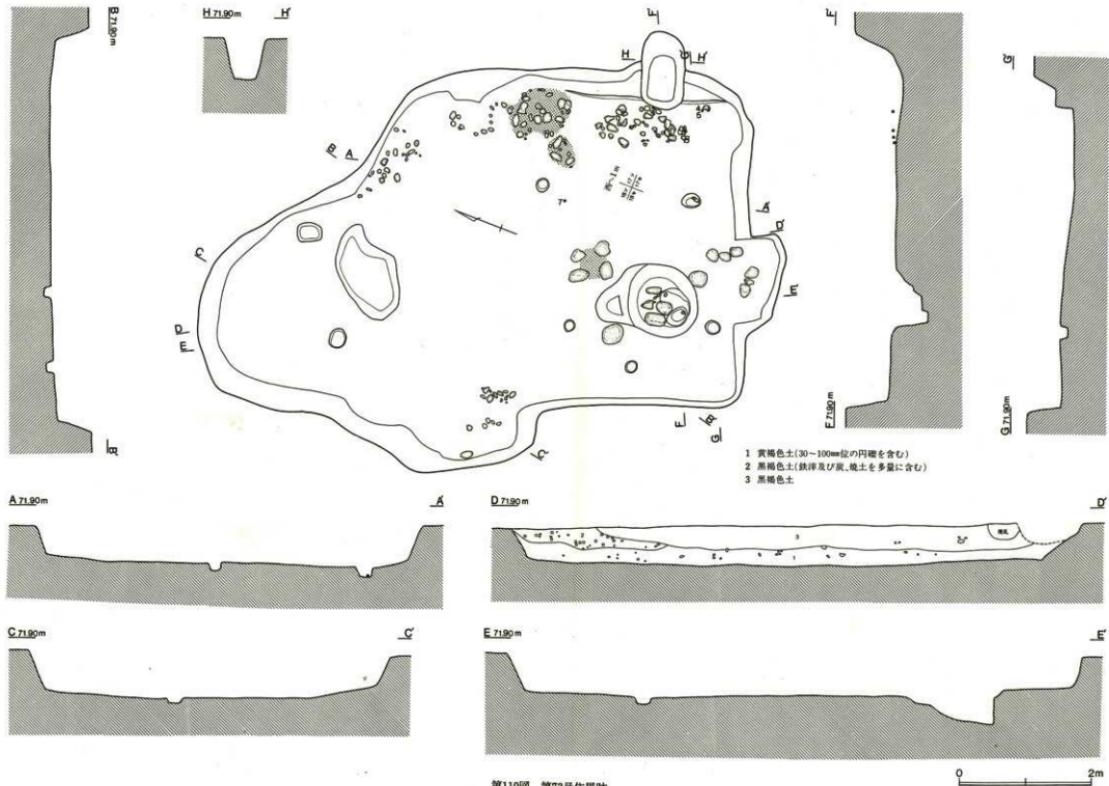
18—セ・ソ区に位置するが、規模は $5.17 \times 8.3m$ 、深さは0.65mを測る。形態は南側が方形であるが、北壁は不安定で、不整形に張り出しが、土層からは切り合わない。主軸はN—60°30'—Eで床標高は70.96mである。甕は東壁右寄りにあり、長さ $1.2 \times$ 幅 $0.54m$ の大形である。床面上には23cm以下の多量の石が分布するが、甕左前方では一部、石の下に炭が広がる。中央南には径1.1m、深さ0.5mの落ち込みがある。柱穴は確認できなかった。

北壁側には、鉄滓・炭・焼土を多量に含む黒褐色土が流れ込む。

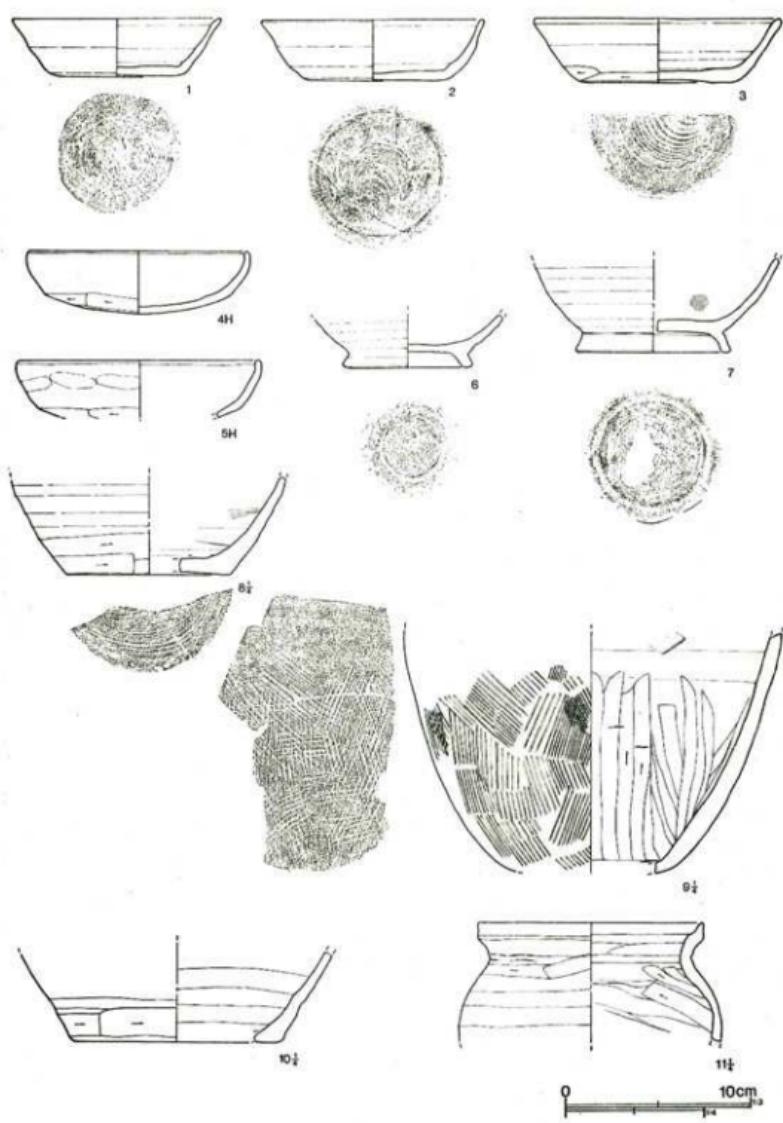
遺物は床面から高台付塊(7)、土器部壺(4)・(5)が、甕内から甕(9)が出土した。(7)と(8)は鉄滓が付着している。他に鉄滓が50g出土する。

第73号住居跡出土遺物（第111・112図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	口径 11.3 底径 6.3 器高 3.1	平底から直線的に外傾する 体部に移行するが、内面の 底部から体部へは強く屈曲する。	右回転撫で。底部右回転糸 切り後、周辺部笠削り。そ の後、中央の糸の残る部分 を擦り消すため、滑らか。 南比企産	胎土：微B+C+I (1m ² — 1) 焼成：5 色調：N 5/0 灰 残存：40% 覆土
2	壺 須恵器	口径 12.0 底径 6.9 器高 3.3	平底から屈曲して体部に移 行する。口唇はやや薄くな る。	右回転撫で。底部右回転糸 切り後、周辺笠削り。 南比企産	胎土：0.2以下B+C 焼成：5 色調：2.5GY 6/1 オリーブ灰 残存：90% 床
3	壺 須恵器	口径(13.3) 底径(8.1) 器高 3.4	平底から強く屈曲して外傾 する体部に至る。	右回転撫で。底部右回転糸 切り後、周辺笠削り。 末野産	胎土：0.3以下B+C+E 多 焼成：2 色調：5 Y 7/1灰白 残存：30% 覆土

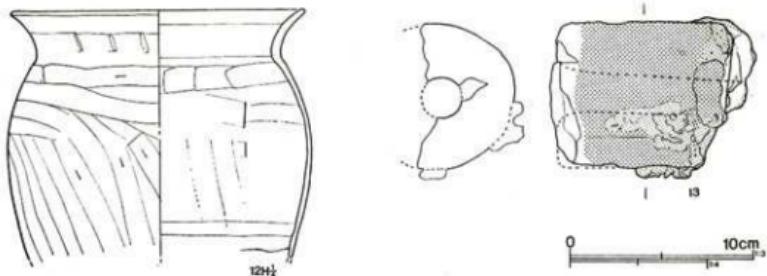


第110図 第73号住居跡
—143・144—



第111図 第73号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	杯 土師器	口径 11.9 器高 3.3	丸底から内凹する体部を経て口唇に至る。	口縁部横撫で後、体部下半右→左への箇削り。	胎土：微A+E+G+H 焼成：4 色調：2.5 YR 5/8 明赤褐 残存：55% 床
5	杯 土師器	口径 13.2	丸底から体部下位で屈曲し、内凹する体部に至る。口唇は僅かに内傾する。	口縁部横撫で後、体部下半右→左への箇削り。	胎土：微A+D+E+F+G 焼成：3 色調：2.5 YR 5/8 明赤褐 残存：40% 二次加熱 床
6	高台付 碗	高台径 7.0	高台は八の字状に大きく開き、端面が外傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台付着後、内外を右回転撫で。 末野産	胎土：0.3以下B+C+E 焼成：2 色調：2.5 Y7/2 灰黄 残存：底部 覆土
7	高台付 碗 須恵器	高台径 8.4	高台は高くへの字状に開くが、厚さが一定し端部が水平につくられる内面に1cm大の鉄滓が付着する。	右回転撫で7周+α。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。 末野産	胎土：0.4以下B+C+E 焼成：5 色調：2.5 Y7/2 灰黄 残存：上半欠 床
8	甕 須恵器	底径(11.5)	平底から丸味を持って立ち上がる。鉄滓が僅かに付着する。	右回転撫で。胴最下位部は右→左への回転箇削り。底部は右回転糸切り。 末野産	胎土：0.8以下B+C+D+E 焼成：5 色調：2.5 Y7/2 灰黄 残存：40% 覆土
9	甕 須恵器	胴径 26.9 現高 16.8	底部付近で、体部から窄まり、平底風になる。	粘土帶積み上げ、平行叩き成形。内面は下→上への木口撫でが施される。	胎土：0.7以下B+C+E 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：胴下半60% 甕
10	甕 須恵器	底径(15.1)	平底から直線的に外傾し立ち上がり体部に移行する。	粘土帶積み上げ。右回転撫で。外面体部最下位は左→右への箇削り。	胎土：0.6以下B+C+D+E 焼成：4 色調：2.5 YR 7/2 明赤灰 残存：20% 覆土
11	甕 須恵器	口径(16.0) 胴径(18.7)	丸い胴から外反して口縁に至る。口唇は直立し、内側に段を外側に平坦面を持つ。	右回転撫で。体部は外面を木口撫で、内面を箇撫でする。口縁は内外横撫で。	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：5 色調：5 P B5/1 青灰 残存：13% 覆土
12	甕 土師器	口径(21.0) 胴径(21.8)	最大径を上位に持つ胴部から、大きく外反する口縁に至る。口縁はやや肥厚する。	口縁横撫で後、胴上位は右→左、中位以下は右上→左下へ箇削りする。内面は横位の箇撫で。	胎土：微A+B+C+E+F+G 焼成：4 色調：2.5 YR 5/6 明赤褐 残存：40% 覆土
13	羽口	全長 11.3 外径 7.9 孔径 2.2	先端が隔壁して黒色ガラス化するが、そのためか短かい羽口である。孔部は基部にて擦れたため太くなる。	棒に巻きつけ、表面を指頭撫で撫てる。口部周辺には溶けた鉄滓が垂れ下がる。	胎土：A少+スサ多 砂は他の羽口より少ない。 残存：60%



第112図 第73号住居跡出土遺物(2)

第74号住居跡（第113図）

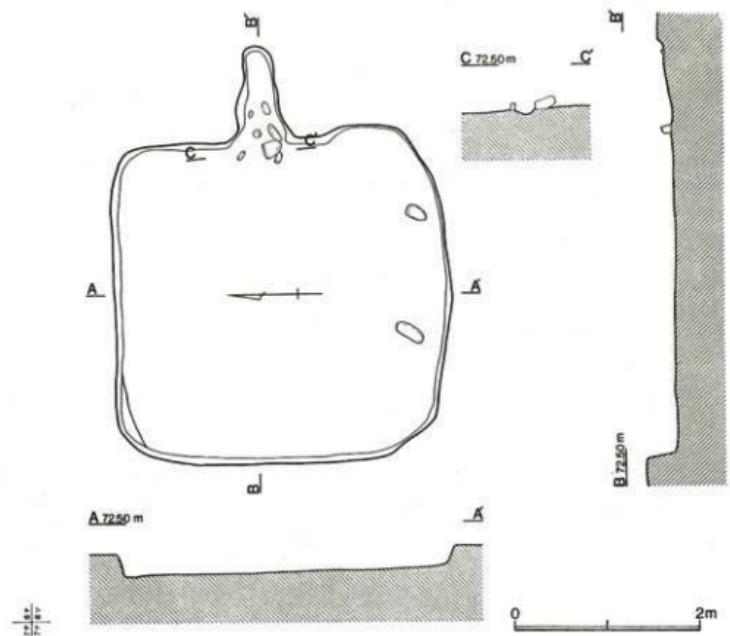
6一つ区に位置し、規模は $3.47 \times 3.68\text{m}$ 、深さは 0.23m を測る。形態は不整方形で、主軸はN— 89° —E、床標高は 71.97m である。

竈は東壁中央にあり、長さ $1.1\times$ 幅 0.55m で、煙道は狭く長い形態で緩やかに傾斜して立ち上がる。竈には支脚が置かれる。柱穴は未検出である。

遺物は竈から土師器小形甕(3)、支脚(4)が、覆土から土師器壺(1)、高台付塊(2)・(3)、土師器甕(8)・(9)の他、塊(5)、長頸瓶(6)、瓶(7)、甕(4)、土師器甕(7)・(9)・(10)、釘(11)が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓 350g 、羽口片、鉄滓付着土器がある。

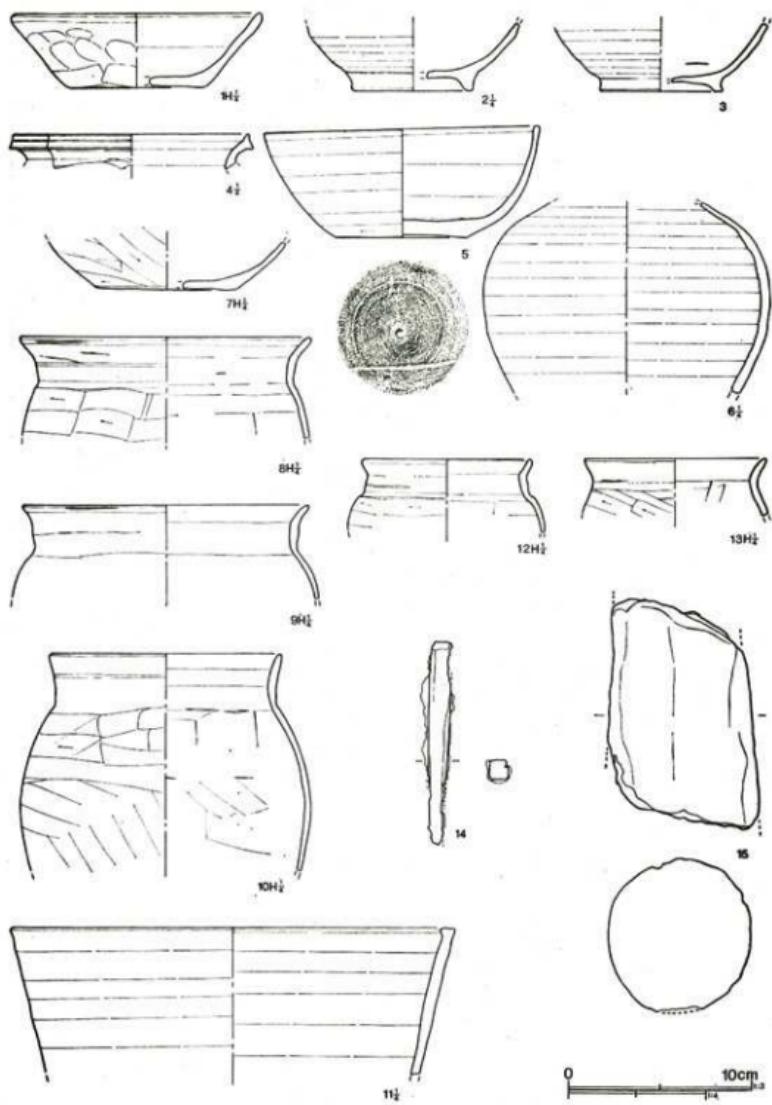
第74号住居跡出土遺物（第114図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 土師器底径 器高	口径(18.7) 7.3 4.0	平底から外傾する部体へ移行するが、厚手である。外面には指痕が明瞭。	底部は窓削り。部体下位は窓撫で。二次加熱。	胎土：微A多+B+E+F+G 烧成：4 色調：7.5 YR 6/4にぶい橙 残存：30% 覆土
2	高台付 塊 須恵器	高台径 (6.6)	高台は端部を丸くつくる。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。高台内外右回転撫で。末野産	胎土：微A+B+C+E 烧成：1 色調：10YR7/3にぶい黄橙 残存：25% 覆土
3	高台付 塊 須恵器	高台径 6.7	高台は外に強く張り出し、端面に沈線を加える。高台は短かい。薄手。	右回転撫で7周+α。底面摩耗で不明瞭。末野産	胎土：微A+B+E 烧成：1 色調：7.5YR6/4にぶい橙 残存：30% 覆土
4	甕 須恵器	口径 16.9	口縁は反り、口唇は上下に延びる。端面はやや窪む。	右回転撫で。末野産	胎土：微A+B+C 烧成：5 色調：N4/0灰 残存：口縁15%
5	塊	口径 15.1	平底から僅かに外反してか	右回転撫で。底部全面右回	胎土：微A少+I (1 cm)



第113図 第74号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器	底径 7.1 器高 5.9	ら内側する体部に至る。	転窓削り。また体部最下位 も同様窓削り。南北企座	10) 焼成: 3 色調: 2.5 Y 6/2 灰黄 残存: 40%
6	長頸瓶 須恵器	胴径(20.6) 現高 13.6	最大径をやや上位に持つ胴 部片である。	右回転窓で13周+α。	胎土: 0.5 以下 B+C+E 焼成: 2 色調: 2.5 Y R 6/2 灰赤 残存: 30%
7	甕 土師器	底径(10.0)		体部下位上→下への窓削 り。	胎土: 微A+B+C+E+F+G+H 焼成: 4 色調: 2.5 Y R 6/6橙 残存: 40%
8	甕 土師器	口径(20.9)	やや外傾するコの字状口 縁、口縁は肥厚する。	口縁二段横振での後、胴外 面右→左への窓削り。内面 右→左への木口振で。	胎土: 微A多+F+H 焼成: 4 色調: 5 Y R 5/4 にぶい赤褐 残存: 15% 覆土
9	甕	口径(20.5)	僅かに外傾するコの字状口	口縁横振で2段の後、胴部	胎土: 微A多+E+F+G



第114図 第74号住居跡出土遺物

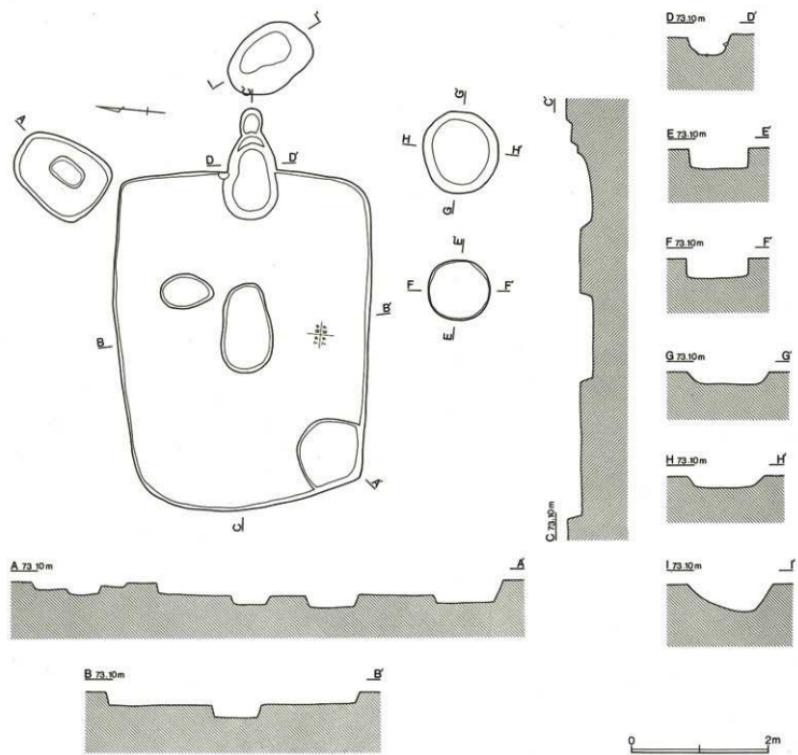
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	土師器		縁。口縁は肥厚する。口縁には粘土接合痕が見られる。	箇削り。内面箇撫で。二次加熱を受ける。	焼成: 3 色調: 5 YR 6/8 橙 残存: 12% 覆土
10	甕 土師器	口径(16.7) 胴径(20.9) 現高 15.5	張りの少ない胴から、僅かに外反する口縁に至る。口縁は肥厚する。	内面に粘土接合痕が明瞭。口縁横撫での後、胴部は上位が右→左、中位は左上→右下への箇削り。内面は右→左への箇撫で。	胎土: 磁 A + E + F + G 焼成: 4 色調: 5 YR 6/6 橙 残存: 25% 覆土
11	瓶 須恵器	口径(31.9)	直線的に外傾する体部片で、口唇は端面に中窪みの平坦面を持ち、内側へ延びる。	右回転撫で。 末野産	胎土: 0.4 以下 B + C 焼成: 4 色調: 10 YR 6/3 にぶい黄橙 残存: 13%
12	小形甕 土師器	口径(12.1) 胴径(14.2)	小形甕で、口縁は内傾するコの字状口縁である。	口縁 2段の横撫での後、胴部外面を右→左へ箇削り。内面は右→左へ箇撫で。	胎土: 磁 A + F + G 焼成: 4 色調: 7.5 YR 6/4 にぶい橙 残存: 23%
13	小形甕 土師器	口径(13.0)	胴部から口縁へは緩やかに移る。内面頭部には、弱い稜をつくる。二次加熱。	口縁横撫での後、胴部外面は右→左へ箇削り。内面は右→左へ箇撫で。	胎土: 磁 A + F + G 焼成: 4 色調: 5 YR 6/6 橙 残存: 25% 瓶
14	釘 鉄製品	現長 11.0	鋸が著しく、旧態を保ってはいないが、断面一辺1.05 cmの正方形で、一端は細くなる。	鍛造。	重量: 39.53g
15	支脚 土製品	現長 12.5 外径 7.7	頂部と基部を欠くが、頂部が細い截頭円錐状となるであろう。	粘土にスサをからめながら固める。胎土は羽口と同様である。	胎土: 1.0 以下 A 多 + スサ 焼成: 二次加熱を受けもらい 色調: 2.5 YR 6/8 橙 残存: 70% 瓶

第75号住居跡（第115図）

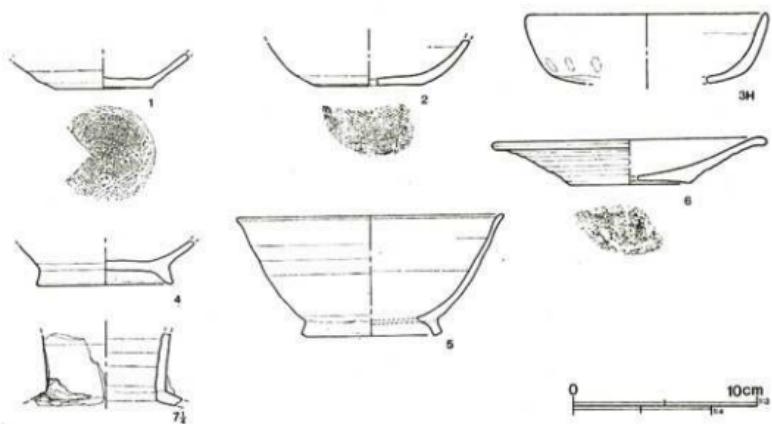
6・7一チ区に位置する。規模は4.95×3.75mで、深さは0.37mを測る。形態は長方形で、主軸はN-84°30'—E、床標高は72.55mである。

竈は短辺の東壁中央にあり、長さ1.6×幅0.7mを測る。焚口は深くなり、煙道へは段を持ちながら立ち上がる。竈の床は、焼土が明瞭に見られた。床は中央、南西隅に浅い土坑が存在するが、性格は不明である。これと同類の土坑が住居の周辺に4個見られるが、住居との関連は不明である。柱穴は検出できなかった。

遺物はいずれも覆土から出土しており、壺(1)・(2)、土師器壺(3)、高台付壺(4)・(5)、皿(6)、灰釉壺(7)が出土する。この他第76号住居跡出土の壺剣と接合する破片がある。鉄斧が570g、羽口片が6点出土する。



第115図 第75号住居跡



第116図 第75号住居跡出土遺物

第75号住居跡出土遺跡（第116図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径 5.3	平底から指差し込み部で外反し、立ち上がる。焼き重ねのため外側部上位が酸化する。	右回転撚で。底部右回転離し糸切り。 南北企座	胎土：0.2以下A+I(1cm -3) 焼成：5 色調：7.5 GY 4/1暗緑灰 残存：底部 80% 覆土
2	杯 須恵器	底径(6.0)	平底から指差し込み部で外反し、丸い体部に移る。	右回転撚で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+E 焼成：5 色調：N 5/0灰 残存：25% 覆土
3	杯 口径(13.1) 土器		丸底から屈曲して外傾する体部に移行する。体部上位は厚手である。	口縁横撚で。底部箇削り。	胎土：B+D+金H多+F 焼成：2 色調：5YR6/6 橙 残存：20% 覆土
4	高台付 塊 須恵器	高台径 7.5	高台はへの字状に張り出し、端部が薄くなる。	右回転撚で。底部糸切り後 高台張りつけ。内外右回転 撚で。 末野産	胎土：0.5以下B+C+D +E 焼成：1 色調：5 YR6/6橙 残存：底部100% 覆土
5	高台付 塊 須恵器 (7.7) 器高 6.6	口径(14.6) (7.7) 器高 6.6	高台はへの字状に張り出し、端面は外傾する。口唇部は外反し、全体に薄い作りとなる。	右回転撚で。高台張りつけ 後、内外を右回転撚です る。 末野産	胎土：0.2以下のB+C+ D+H 焼成：2 色調： 10YR7/1灰白 残存：20% 覆土
6	皿 須恵器 底径(6.5)	口径(15.0)	やや上げ底の底部から、大きく外反する体部を経て、	右回転撚で7周。底部右回 転離し糸切り。 末野産	胎土：0.7以下B+C+D 多 焼成：3 色調：10Y

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	壺	高 2.45	反り返る口唇部に至る。口唇部は肥厚し、体部は縮締目が著しい。		R 6/1 褐灰 残存: 20% 覆土
7	壺 頸部径 灰釉 (8.6)		頸部で屈折し、やや外反気味に開く。屈曲部に厚く釉が掛かる。口縁部の接合は胴部に乗せるだけである。	右回転拂で。丁寧な引き上げである。 猿投窓	胎土: 夾雜物はほとんどなし 焼成: 5 色調: 5 Y 7/1 灰白 残存: 頸部 20% 覆土

第76号住居跡（第117図）

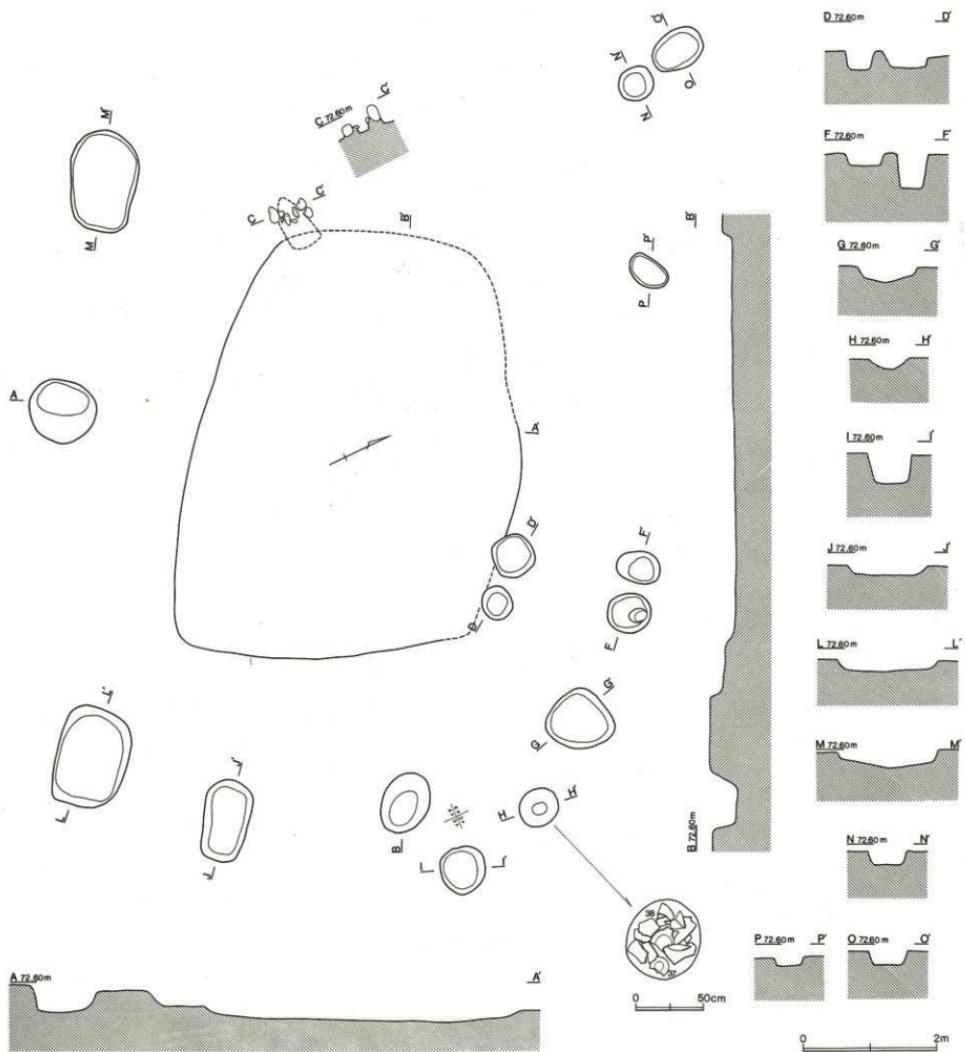
4一チ区に位置し、黒田第21号墳を切る。規模は6.42×4.87mで、深さ0.38mを測る。形態は不整長方形で不明確である。主軸はN-57°30'W、床標高は72.16mである。

竈は南西隅に石に囲まれて存在するが、不明確である。壁も不明確である。周囲には15個の土坑が見られるが、住居との関連は不明である。北東の1土坑からは、底に大甕を敷きつめて、その上に皿が1個置かれた状態で検出されている。

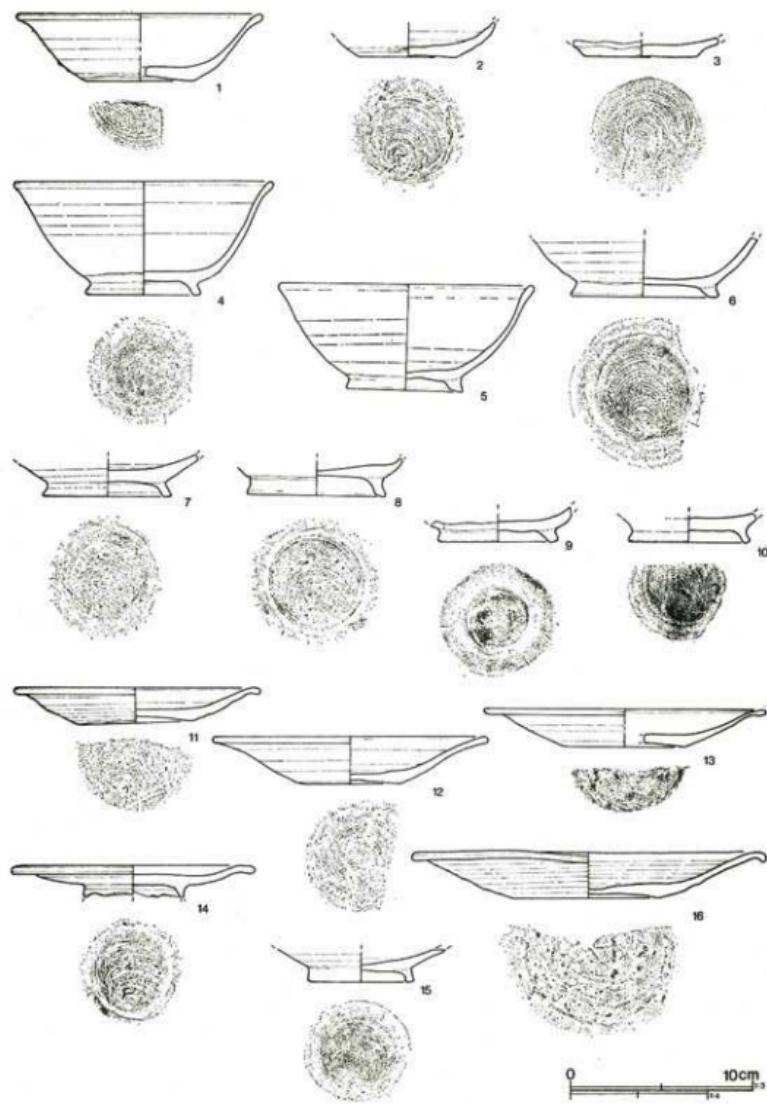
出土遺物は、多く出土するが、竈から高台付塊(5)、土師器台付甕(6)が、他に鉄滓付着の壺(1)、土鍤(2)、壺、把手付壺(3)、灰釉瓶(4)、無底瓶(9)、大甕(10)などがめだつ遺物である。接合関係は著しく、(1)が第75号住居跡と、(2)が第62号住居跡、(3)が第62・77号住居跡、(4)が第77号住居跡、(5)が第77・78号住居跡、(6)が第77号住居跡、(7)・(8)・(9)が第62号住居跡と接合した。製鉄関連遺物として、鉄滓が2.38kgと羽口片が出土した。

第76号住居跡出土遺物（第118～122図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	口径(13.5) 底径(5.9) 器高 3.6	上げ底氣味で、口縁部は肥厚し外反する。鉄滓付着。	右回転拂で5周。底部右回転糸切り。 束野窓	胎土: 0.3以下 B+C 焼成: 5 色調: N 4/0 灰 残存: 20%
2	壺 須恵器	底径 5.2	平底から内彎する体部に移る。	右回転拂で。底部右回転糸切り。 南北企窓?	胎土: 0.5以下 B+C 少焼成: 5 色調: 5 Y 6/1 灰 残存: 底部 100%
3	壺 須恵器	底径 6.3	平底から指差し込み部で外反する。	右回転拂で。底部右回転糸切り。 束野窓	胎土: 0.3以下 B+C 焼成: 2 色調: 5 Y 6/1 灰 残存: 底部 100%
4	高台付 須恵器	口径 14.2 高台径 6.3 器高 6.2	高台はハの字状に開く。口縁は大きく外反し、玉縁状になる。	右回転拂で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。高台の内外回転拂で。 束野窓	胎土: 粗 B+C 焼成: 2 色調: 2.5 Y 7/1 灰白 残存: 40%
5	高台付 須恵器	口径 14.1 高台径 6.4 器高 5.8	高台はやや開き、端面に沈線を入れ、内傾する。口縁は肥厚し外反する。	右回転拂で5周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後内外回転拂で。 束野窓	胎土: 0.4以下 B+C+E 焼成: 3 色調: 7.5 Y R 6/6 橙 残存: 40% 竈

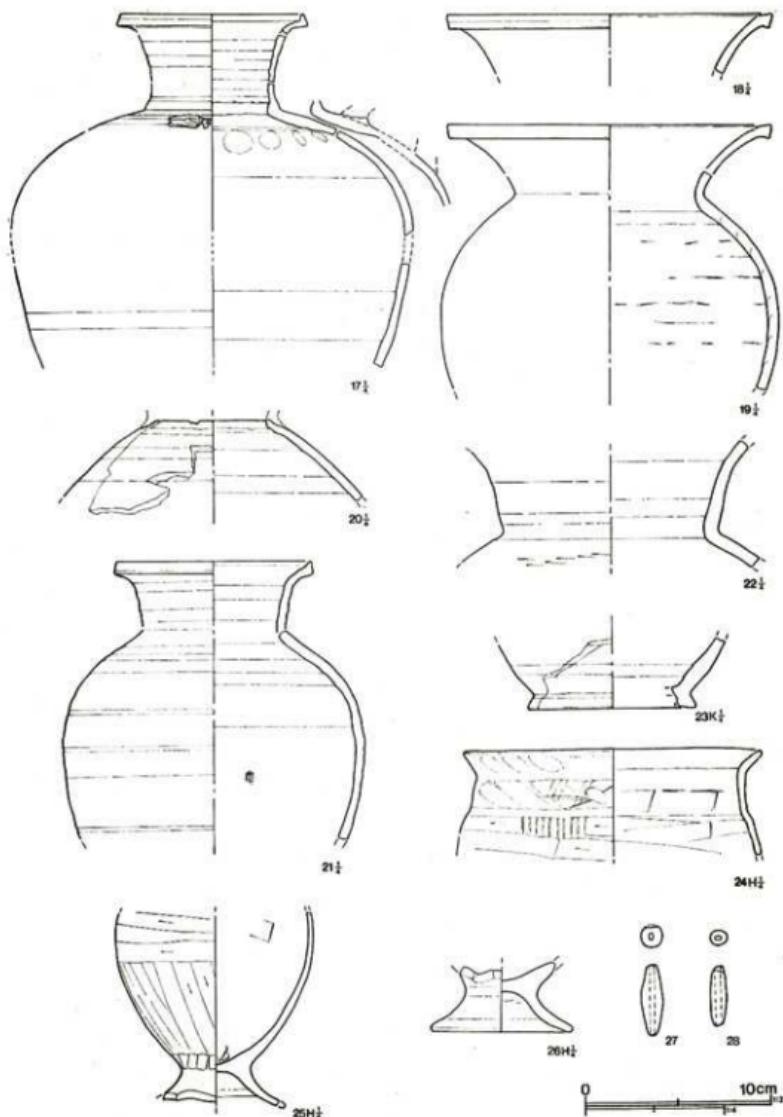


第117図 第76号住居跡



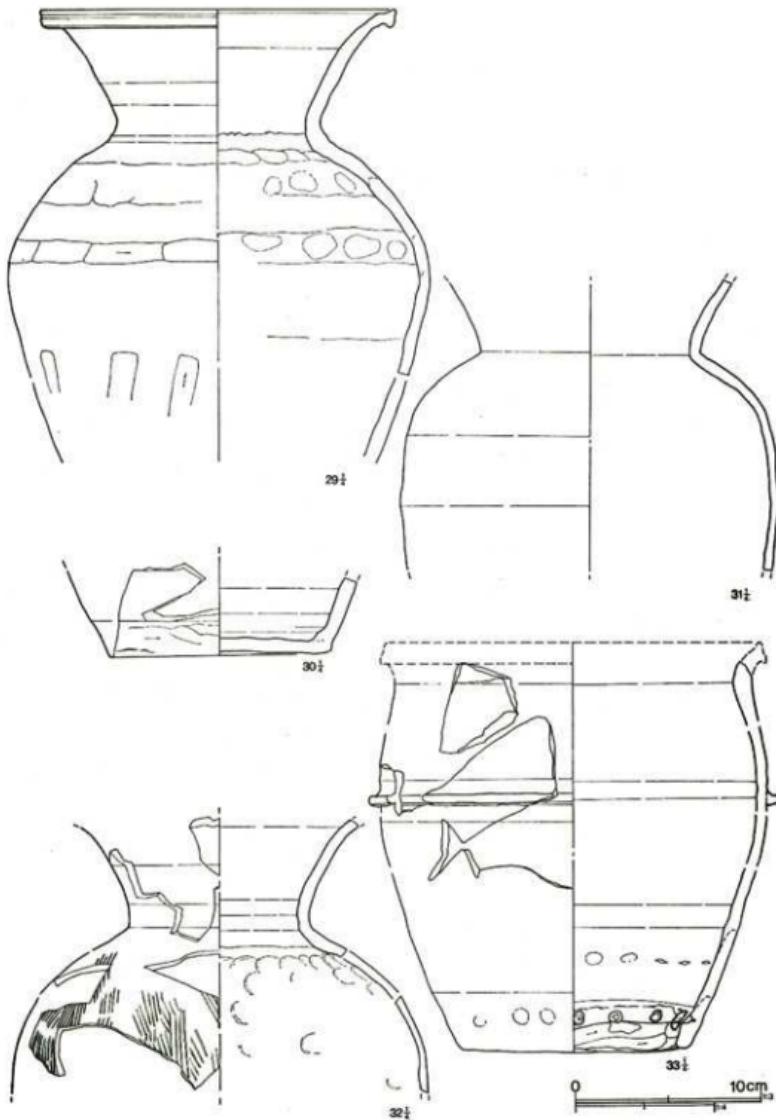
第118図 第76号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	高台付 碗 須恵器	高台径 8.2	高台はハの字状に開き、端面に沈線を入れる。	右回転撚で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後内外回転撚で。 東野産	胎土：0.3以下B+C+E 焼成：4 色調：10YR6/2 灰黄褐 残存：底部80%
7	高台付 碗 須恵器	高台径 7.1	高台はハの字状に開き、端面が水平になる。	右回転撚で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外回転撚で。 東野産	胎土：0.5以下B+C 烧成：4 色調：5Y6/1灰 残存：底部100%
8	高台付 碗 須恵器	高台径 7.6	高台はハの字状に開き、端面が窪み内傾する。	右回転撚で。右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撚で。 東野産	胎土：0.5以下B+C+D 焼成：5 色調：N4/0灰 残存：底部100%
9	高台付 碗 須恵器	高台径 6.1	高台径は小さく、外へ大きく張り出す。	右回転撚で。右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撚で。 東野産	胎土：粗B+C+D+E+H 焼成：1 色調：7.5 YR7/4にぶい橙 残存： 底部100%
10	高台付 碗 須恵器	高台径 6.7	高台はハの字状に開き、端面は外傾する。	右回転撚で。右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撚で。 東野産	胎土：0.3以下B+C 烧成：4 色調：N5/0灰 残存：底部60%
11	皿 須恵器	口径 13.6 底径 6.4 器高 2.0	上げ底から大きく外傾する 体部を経て、反り返る口唇 に至る。	右回転撚で7周。右回転糸切り。 東野産	胎土：0.3以下B+C 烧成：5 色調：N4/0灰 残存：50%
12	皿 須恵器	口径 15.2 底径 5.8 器高 2.6	上げ底から大きく外反する 体部に至る。	右回転撚で4周。右回転糸切り。 東野産	胎土：0.7以下B+C+D 焼成：5 色調：N4/0灰 残存：50%
13	皿 須恵器	口径(15.5) 底径(6.5) 器高 2.1	上げ底から外傾する体部を 経て、大きく反り返る口唇 に至る。口唇は肥厚する。	右回転撚で4周。右回転糸切り。 東野産	胎土：B+C+E 烧成： 2 色調：2.5Y7/2灰黄 残存：30%
14	高台付 皿 須恵器	口径 13.5 高台径 5.6 現高 1.7	高台は細く、開きは少ない。 皿部は口唇が大きく反り返る。	右回転撚で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外回転撚で。 東野産	胎土：B+C+E 烧成： 2 色調：5Y7/1灰白 残存：60%
15	高台付 皿 須恵器	高台径 5.8	碗の高台と比べ小さい。高台端部は台形に近く、端面は水平になる。	右回転撚で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撚で。 東野産	胎土：0.3以下B+C+D+E+H 焼成：3 色調： 7.5YR6/3にぶい褐 残存： 底部100%
16	大皿 須恵器	口径 19.5 底径 8.0 器高 2.6	上げ底から外傾する体部を 経て、大きく反り返り玉縁 状になる口唇に至る。体部 は輪縁目明顯。焼け歪む。	右回転撚で9周。底部右回転糸切り。 東野産	胎土：0.7以下B+C+D 焼成：5 色調N4/0灰 残存：55%
17	把手付	口径(12.9)	肩に把手が付く壺である	右回転撚で。口縁の接合は	胎土：B+C少+I(1cm=



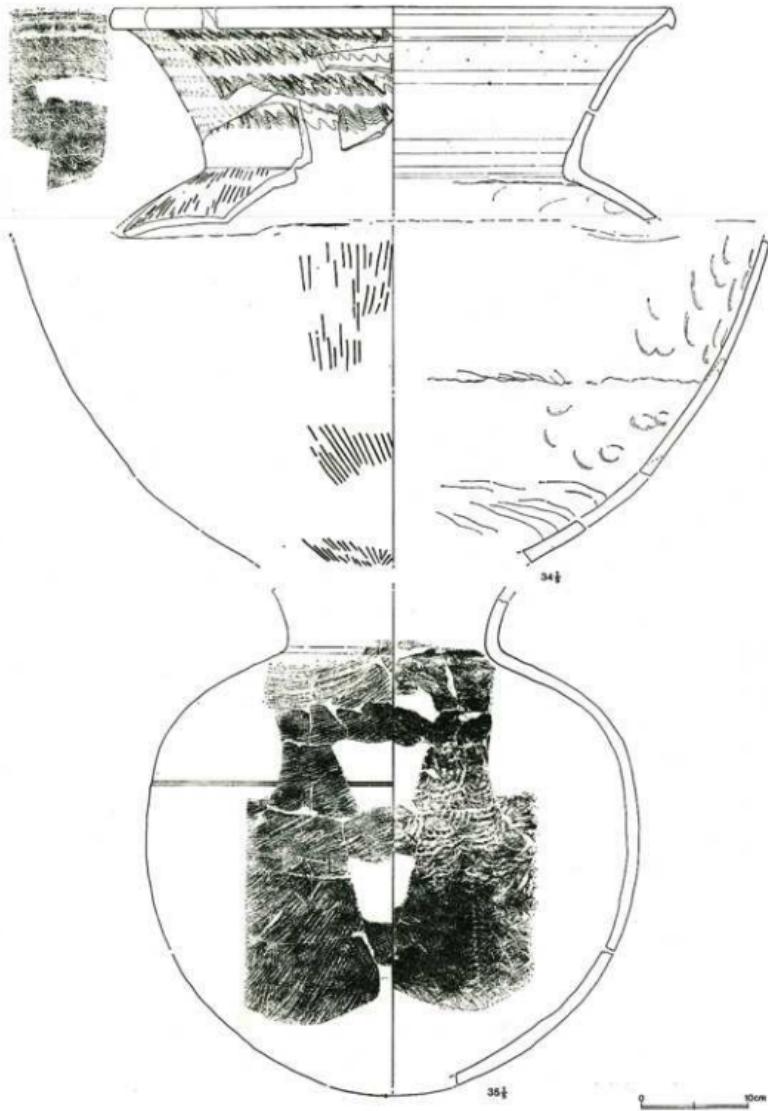
第119図 第76号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	壺 須恵器	口径(28.6) 現高(25.0)	が、肩部は張るであろう。口縁部は大きく外反し水平近くになった後、口唇は内傾するように立ち上がる。	胸部に乗せる。把手の接合は肩部を笠削りした後、棒状の粘土を張りつけ、指で撫でつける。 南北企産	10) 焼成: 3 色調: N 5/0灰 残存: 20% 底部欠第62・77号住の破片と接合した。
18	壺 須恵器	口径(23.0)	口縁は大きく外反し、口唇端面下位には瘤みを巡らす。口唇上面は平坦をつくる。	右回転撫で。内面には緑色の釉が掛かる。やや多孔質。 南北企産	胎土: 0.1以下 B 焼成: 5 色調: 5B 4/1暗青灰 残存: 口縁30%
19	壺 須恵器	口径(23.0) 胴径(24.0)	胴部は丸く、頸部で屈曲して大きく外反する。口唇は下方に延び端面をつくる。	幅1.5cm強の粘土帯接合痕がある。口縁内外には右回転撫で。胸部内面僅かな右回転撫で。 南北企産	胎土: 白・黒A 焼成: 5 色調: 10Y R 6/2灰黄褐 残存: 25% 第62号住居跡と接合。
20	壺 須恵器	現高 6.6	胴上位は緩やかに窄まるが、口縁は上に乘せ僅かに粘土を巻く。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。丹彩であろうか、表面が赤色化する。 末野產	胎土: B+C+D+E 焼成: 3 色調: 2.5Y 5/1黄灰 残存: 20% ピットと第75号住居跡覆土と接合。
21	壺 須恵器	口径(13.7) 胴径(21.5) 現高 19.6	最大径を中位に持つ胴部から、屈折して外傾する口縁部に至る。口縁部は上方に尖り端面は平坦部を作る。	粘土帯積み上げ、右回転撫で。胸部外面には沈線状の輪轍目明瞭。内面胸部中位に1cm=8×7本の布目痕あり。 末野產	胎土: 0.5以下 B+C+E 焼成: 5 色調: N 4/0灰 残存: 30% 第62号住居跡と接合。
22	甕 須恵器	頸部径15.2	頸部で強く屈曲して外反する口縁に至る。	粘土帯積み上げ、平行叩き成形。その後口縁部は左回転撫で。 末野產	胎土: 0.5以下 B+C+D 焼成: 5 色調: 5P B 4/1暗青灰 残存: 頸部40%
23	瓶 灰釉?	高台径12.1	高台は台形となり、端面は内傾する。	右回転撫で。胸部下位は右回転笠削り後、高台張りつけ。内面は底部周縁に強い回転指撫で。	胎土: 白色微A 夾雜物はとんどなし 焼成: 5 色調: 10Y 4/1灰 残存: 高台20%
24	甕 土師器	口径 21.3	胴部からやや内傾するコの字状口縁に至る。口唇部は肥厚し、外傾する。	口縁部2段の横撫での後、胸部上位を右→左へ笠削りする。内面は右→左への笠撫で。	胎土: 微A+E+F+G+H 焼成: 4 色調: 5Y R 5/4にぶい赤褐 残存: 胴上位90%
25	台付甕 土師器	口径 14.0 脚径 4.9	脚台部は大きく開き、胴部は緩やかに内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ胴部に至る。	脚部は横撫で、胴部下位は左上→右下への笠削り、胴部中位は右→左への笠削りが行なわれ、内面は右→左への笠撫で。	胎土: 微A+E+F+G+H 焼成: 4 色調: 5Y R 6/6橙 残存: 50%
26	台付甕 土師器	脚径 10.2	脚は大きく開く。基部で緩やかに外反する。	脚部は横撫でを施す。	胎土: 微A+E+F+G+H 焼成: 4 色調: 7.5

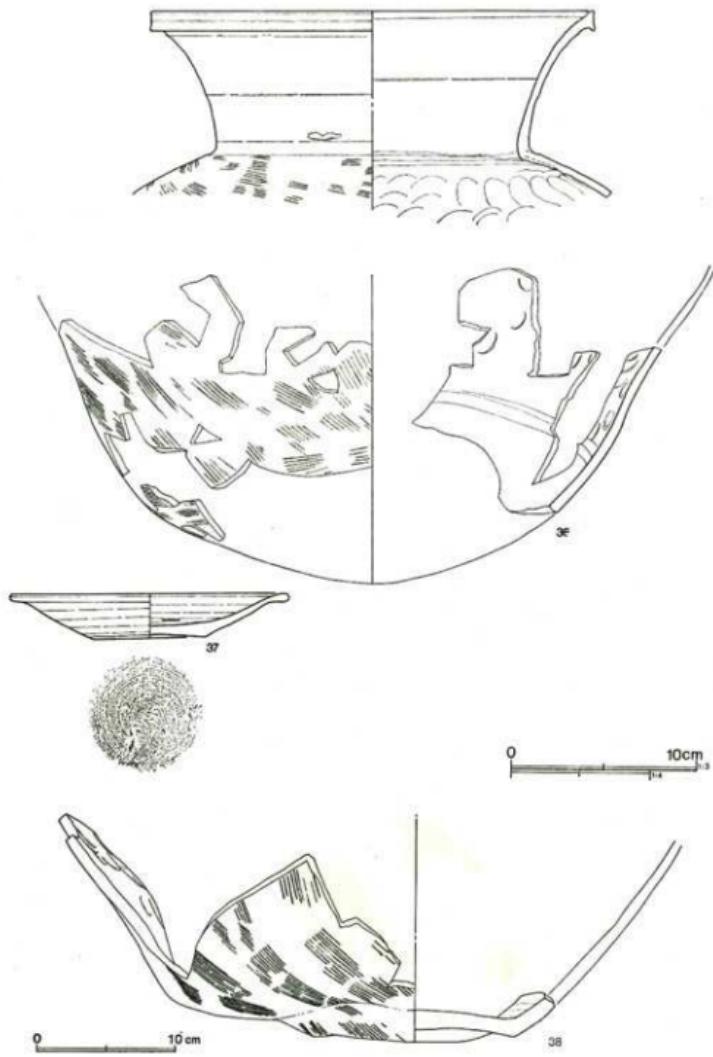


第120圖 第76号住居跡出土遺物(3)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
27	土鍾	全長 3.75 外径 1.2 孔径 0.25	細形で、中央が最大径となる。	棒に巻きつけ抜く。 重量：4.37g	Y R6/6橙 残存：台脚100% 窓西
28	土鍾	全長 3.2 外径 0.9 孔径 0.3	細形で、長楕円形を呈する。	棒に巻きつけ抜く。 重量：2.14g	胎土：微A+E+F+G+H 焼成：5 色調：10R 5/6赤 残存：95%
29	甕 須恵器	口径 25.2 胸径 30.0 現高 32.0	胴部は下位から外傾して立ち上がり、屈曲して内灣する。口縁部から大きく外反し口唇部は下へ延びる。端面は沈線を巡らせず、口唇上方には平坦部をつくる。	粘土帶積み上げ。胴上半部内面に接合痕著しい。口縁は右回転撫で。胴部最大径部分に左→右への範削りが巡る。	胎土：0.7以下B+C+D+E多 焼成：5 色調：N 3/0暗灰 残存：底部欠50% 第77号住居跡出土品と接合。 末野産
30	甕 須恵器	底径(15.8)	平底から外傾する胴部に移行する。	粘土帶積み上げ。右回転撫で。底部内面は右回転撫で7周。外面胴最下位、左→右への範削り。	胎土：0.2以下B多 焼成：5 色調：N 4/0灰 残存：30% 末野？
31	壺 須恵器	頸部径(15.7) 胸径(27.1)	やや長い肩から頸部にて強く屈折して、大きく外反する口縁に至る。	粘土帶積み上げ後、右回転撫で。肩に肩部のみ範削で行なう。	胎土：B+C+D 焼成：5 色調：N 4/0灰 残存：30%胴下位。口唇欠 末野産
32	壺 須恵器	頸部径(12.9) 現高 19.2	丸い胴部から、大きく外反する口縁に移る。肩に斑点状の自然軸が掛かる。	粘土帶積み上げ。胴部は平行叩き成形。内面に無文の当て具痕付着。口縁部は右回転撫で。器内はセピア色で土は精選され生産地不詳。	胎土：0.3以下B+C少 焼成：5 色調：10 G 3/1暗緑灰 残存：上半部30% 第62号住居跡と接合。
33	瓶 須恵器	頸部径(25.4) 胸径(29.1) 底径(16.1) 孔径(14.5)	孔部は大きく、その周辺には範状工具で開けられた、貫通しない穴がほぼ等間隔に開けられる。この穴は梭を渡す穴と考えられる。胴中位には短かい突帯が巡る。頸部は外反する。	粘土帶積み上げ後、右回転撫で。孔部は左→右へ範削りする。胸部は突帯を付着した後、上部を回転撫でで付着する。	胎土：B+C+D+F+H 焼成：4 色調：2.5 G Y 5/1 残存：25% 末野産
34	大甕 須恵器	口径(52.2) 頸部径(35.2)	底部は丸底で緩やかに立ち上がる。口縁部は頸部で屈折して大きく外反し、口唇は上と下へ突き出す。口縁部には4段の波状文が巡る。底部に焼台に接した。	粘土帶積み上げ後、平行叩き成形を行なう。内面胴最下位には撫でが横走し、その上には無文の当て具痕が残る。口縁部の波状文は右回りである。	胎土：0.9以下B+C+D+I(1cm=6) 焼成：5 色調：10 Y 6/1灰 残存：口縁部30%、底部25% 第77号住居跡と接合。 南比企産



第121圖 第76號住居跡出土遺物(4)



第122図 第76号住居跡出土遺物(5)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
35	壺 須恵器	頸部径 (19.8) 胴径(46.4)	青灰色で円形の跡あり。 やや縦長の珠網を呈するが、胴中位上には沈線が巡る。口縁部は緩やかに屈曲し、外反する口縁に至る。	粘土帶積み上げ後、平行叩き成形。下方では垂直に近く、上方では水平に近い。内面の當て目は下方では青海波に近く、その上を平滑に仕上げている。上方はやや深い同心円當て目で、口縁は右回転撫で。	胎土：B+C+D+E 焼成：4 色調：10Y 5/1灰 残存：30% 第77・78号住居跡と接合する。
36	大 壺 須恵器	口径(48.0) 頸部径 (34.0)	口縁は大きく外反し、口唇は上下に突出する。底部は丸底。	粘土帶積み上げ。平行叩き成形。口縁部は右回転撫で。	胎土：B+C多 焼成：5 色調：10Y 6/1灰 残存： 胴中位欠、口縁20%
37	皿 須恵器	口径 15.1 底径 6.0 器高 2.4	やや上げ底で、体部は外傾するが口唇は大きく外反し、肥厚する。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。	胎土：B+C+D+H 焼成：5 色調：N 4/0灰 残存：80% 東土坑
38	大 壺 須恵器	底径 14.5	焼け歪みが著しい。大慶では数少ない平底である。	粘土帶積み上げ。平行叩き成形。内面は無文の當て目痕あり。	胎土：0.8以下 B+C 焼成：5 色調：5PB 4/1 暗青灰 残存：胴下半40%

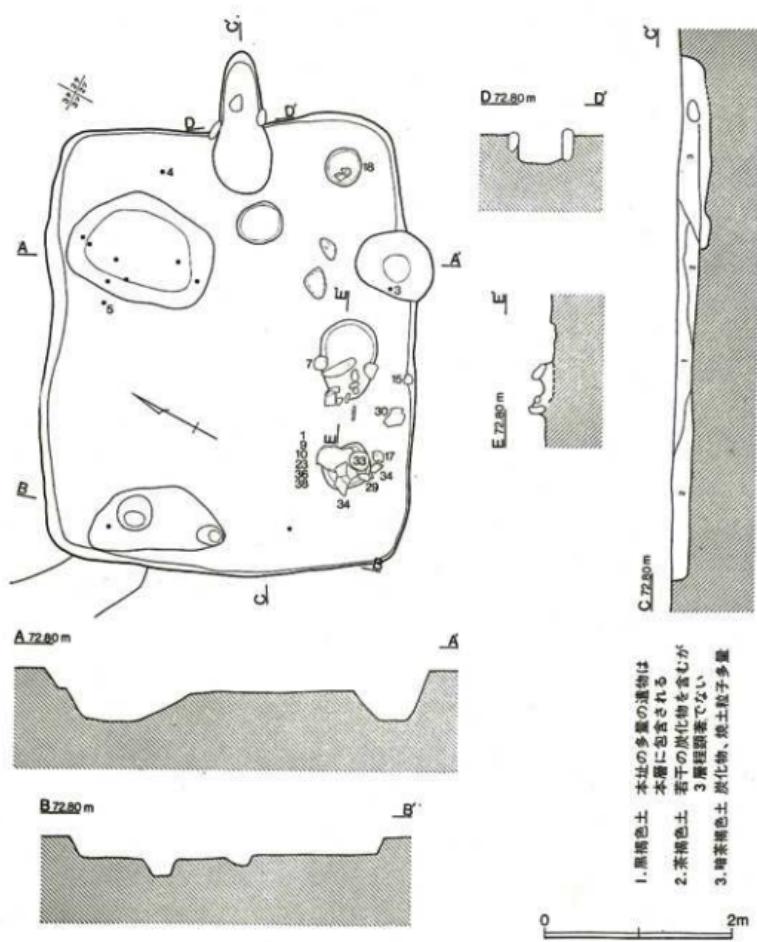
第77号住居跡（第123図）

3-1フ区に位置する。規模は4.69×3.93m、深さは0.57mを測る。形態は長方形で、主軸はN-63°30'-E、床標高は71.82mである。

竈は東壁中央にあり長さ1.5×幅0.65mで、壁には河原石が使われるやや煙道の長い竈である。床にはいくつかの土坑が見られるが、竈手前のは1.55×1.18m、深さ0.3mと深い。他は南壁沿いに見られるが小形であり、それぞれ遺物が出土している。北西隅と南東隅に柱穴らしきものがあるが、他は不明である。

土層は1層が遺物を多量に含む黒褐色、2層が茶褐色、3層が竈付近で、炭化物・焼土を多量に含む暗茶褐色である。

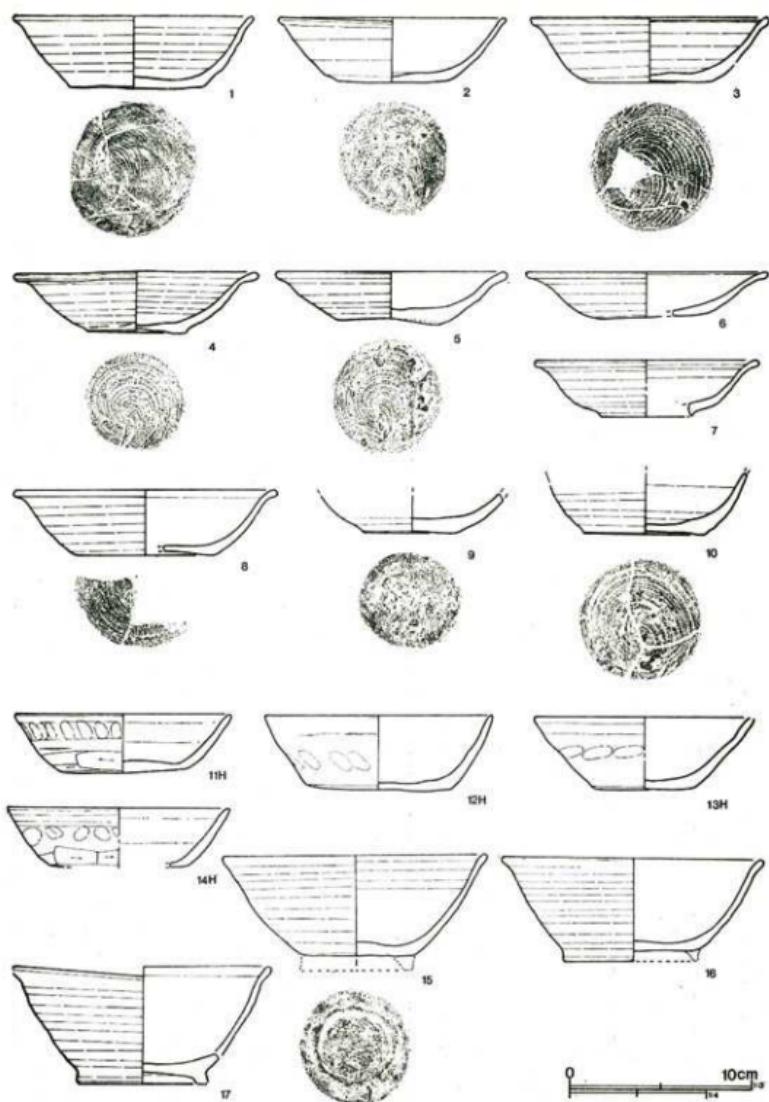
遺物は竈中から壺(8)・08、土師器坏(3)・04、皿(2)が、竈西方から壺(4)、皿(5)が、南西ピットから壺(1)・(9)・(10)・(2)、高环(1)、灰釉瓶(2)、土師器壺(4)・(9)・(8)など多くが出土する。他に南壁沿いから壺(3)・(9)、灰釉瓶(2)が出土する。(1)・(9)・(8)には鉄滓が付着する。いくつかの壺の破片は第76号住居跡の(2)・(3)・(4)と接合する。鉄滓は585g、羽口片が多く出土する。



第123図 第77号住居跡

第77号住居跡出土遺物（第124～126図）

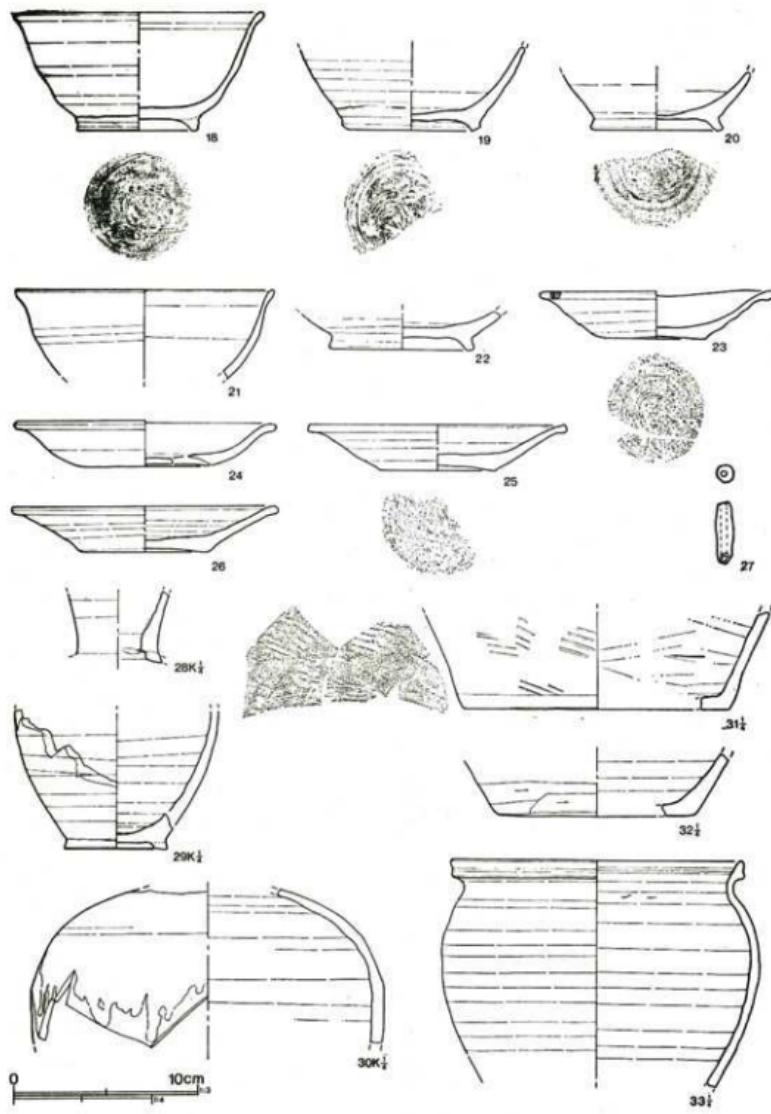
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 13.3 須恵器底径 7.4 器高 3.9	平底から較縫目の著しい体部を経て、外反する口唇に至る。鉄滓付着。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。	胎土：0.5以下B+C 燃成：5 色調：2.5Y7/1灰白 残存：90% 末野産
2	杯	口径 12.6	平底で、口唇はやや外反す	右回転撫で4周。底部右回	胎土：0.3以下B+C+D



第124図 第77号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器	底径 器高	6.0 3.5	る。	転まわし糸切り。 末野産 多+E 焼成: 3 色調: 2.5Y6/1黄灰 残存: 80% 胎土分析No.17 床
3	坏	口径 須恵器 底径 器高	13.2 6.7 3.5	体部下半が丸く、口唇は大きく外反し、肥厚する。	右回転拂で6周。底部右回転糸切り。 末野産 胎土: 0.5以下B+C 焼成: 5 色調: 7.5Y4/1灰 残存: 70% 床
4	坏	口径 須恵器 底径 器高	13.5 5.5 3.4	僅かに上げ底となり、口唇が肥厚し外反する。器高が低く、指差し込み部が明瞭。	右回転拂で7周。底部右回転まわし糸切り。 末野産 胎土: 0.7以下B+C+D 烧成: 5 色調: N5/0灰 残存: 70% 床
5	坏	口径 須恵器 底径 器高	12.8 5.6 2.9	焼け垂み上げ底となり、口唇は外反する、厚手の坏。	右回転拂で6周。底部右回転まわし糸切り。 末野産 胎土: 0.3以下B+C 烧成: 5 色調: 7.5YR6/1 褐灰 残存: 100% 床
6	坏	口径 須恵器 底径 器高	13.4 5.3 2.6	浅い形態で、体部は大きく開き、玉縁となる口唇で肥厚する。	右回転拂で6周。底部右回転糸切り。 末野産 胎土: A+B+H 烧成: 2 色調: 7.5YR7/3にぶい 橙 残存: 50%
7	坏	口径(12.4) 須恵器 底径(5.0) 器高		底部から指差し込み部で外反し、丸い体部を経て、大きくなる。	右回転拂で8周。末野産? 胎土: B+C 烧成: 5 色調: 10YR7/2にぶい黄 橙 残存: 25%
8	坏	口径(14.6) 須恵器 底径(7.6) 器高		底部は上げ底氣味で。口唇は大きく外反する。	右回転拂で7周。底部右回転糸切り。 末野産 胎土: B+C+D+H 烧成: 4 色調: 2.5Y5/1黄 灰 残存: 25% 床
9	坏	底径 須恵器	5.0	指差し込み部で強く外反し、内側する体部へ移る。 鉄滓付着。	右回転拂で。底部二次加熱により荒れて不明瞭。 末野産 胎土: 0.5以下B+C+H 焼成: 2 色調: 5Y7/3 浅黄 残存: 底部 100% 床
10	坏	底径 須恵器	6.7	底部はやや上げ底で、指差し込み部で外反する。体部は丸く立ち上がる。	右回転拂で6周+a。底部右回転まわし糸切り。 末野産 胎土: B+C+E 烧成: 2 色調: 7.5Y7/1灰白 残存: 底部 100% 床
11	坏	口径 土師器 底径 器高	11.9 6.8 3.2	平底氣味の底部から外傾する体部に至る。体部中位には指頭痕明瞭。	口縁横拂で。底部と体部下位は範削り。体位下部は右→左へ。内面木口拂で。 胎土: 略 A+B+E+F+G 烧成: 3 色調: 2.5 YR7/3淡赤橙 残存: 60%
12	坏	口径 土師器 底径 器高	12.6 8.0 4.0	平底から外傾して立ち上がる体部を経て、やや尖る口唇部へ。体部中位指頭痕。	口縁横拂で。底部は範削り。内外摩滅顯著。体部～底部に黒斑がある。 胎土: 略 A+D+E+F+G+H 烧成: 3 色調: 5 YR7/4にぶい橙 残存: 70%

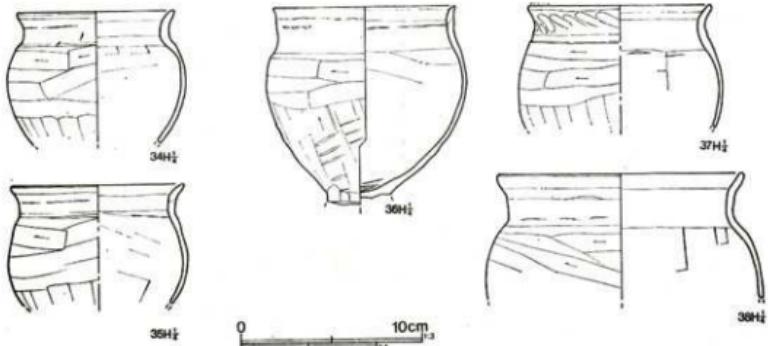
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
13	坏 土師器	口径(12.1) 底径 5.7 器高 4.0	平底から外傾する体部に至る。体部には指頭痕明顯。	口縁横撫で。底部笠削り。 内面は底部中央を除いて横撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：2.5 YR 6/6 橙 残存：40% 瓷
14	坏 土師器	口径(12.2) 底径(7.5) 現高 3.2	平底からやや脹らみ外傾する体部に至る。体部中位に指頭痕。	口縁横撫で、底部は笠削りし、体部下位も左→右へ笠削りする。	胎土：微A多+E+F+G +H 焼成：4 色調：2.5 YR 6/4 にぶい橙 残存： 30% 瓷
15	高台付 塊須恵器	口径 14.7 現高 5.5	高台がはがれる。口唇は外反する。	右回転撫で10周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.6以下B+C+D +E 烧成：3 色調：5 YR 5/6 明赤褐 残存：60% 床
16	高台付 塊須恵器	口径 14.5 高台径 7.4 器高 5.6	高台が一部はがれる。高台は先の丸い逆三角形となる。口唇は外反する。	右回転撫で12周。底部右回転離し糸切り。高台張りつけ後、回転撫で。 末野産	胎土：0.4以下B+C+D +E 多 烧成：1 色調： 10 YR 7/3 にぶい黄橙 残存：90% 胎土分析No.9
17	高台付 塊須恵器	口径 14.4 高台径 7.3 器高 6.4	高台は短かく幅広で、端面に窪みを入れ水平となる。口唇は外反し、玉縁となる。	右回転撫で10周。底部右回転離し糸切り。高台張りつけ後、回転撫で。 末野産	胎土：白色微砂粒微量含有 多孔質 烧成：3 色調： 10 YR 7/1 灰白 残存：50% 胎土分析No.10 床
18	高台付 塊須恵器	口径 13.8 底部 6.6 器高 6.3	高台は短かく下方に延び、体部中位が窪む。口唇は外反し玉縁状口縁をつくる。	右回転撫で6周。底部右回転糸切りであるが不明瞭。高台内外回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C 烧成：5 色調：7.5 Y 5/1 灰 残存：40% 瓷
19	高台付 塊須恵器	高台径(7.6)	高台は短かく外に張り、端面が外傾する。	右回転撫で6周+α。底部右回転糸切り。高台内外回転撫で。 末野産	胎土：B+C+D+E 烧成：5 色調：7.5 Y 7/1 灰 白 残存：30%
20	高台付 塊須恵器	高台径(7.2)	高台はへの字状に張り出し、端面は丸くつくられる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。 末野産	胎土：B+C+E+H 烧成：2 色調：10 YR 6/3 にぶい黄橙 残存：40%
21	高台付 塊須恵器	口径 14.2	体部は張り、口唇は大きく外反して玉縁をつくる。	右回転撫で。 末野産	胎土：B+C+E 多 烧成： 4 色調：7.5 G Y 8/1 明 绿灰 残存：口縁70%
22	高台付 塊須恵器	高台径 7.9	高台はへの字状に張り、端面は平坦部をつくる。	右回転撫で。摩滅著しく切り離し不明瞭。 末野産	胎土：B+C+D+E 烧成：1 色調：5 YR 6/4 にぶい橙 残存：高台70%
23	皿 須恵器	口径 12.8 底部 5.5 器高 2.5	焼け歪む。体部は輪轍目痕が著しく、口唇は肥厚し外反する。口縁に鉄滓付着。	右回転撫で5周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.5以下B+C+D +E 多 烧成：5 色調： N 4/0 灰 残存：70% 床



第125図 第77号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
24	皿 須恵器	口径 14.3 底径 6.6 器高 2.5	底部から内彎する体部に移行し、口唇で外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。摩減著しく、整形不明瞭。 胎土分析No.11	胎土：0.2以下B+C+D+E多 焼成：1 色調：2.5Y7/2灰黄 残存：60%
25	皿 須恵器	口径(14.1) 底径(6.2) 器高 2.5	底部は上げ底で、体部は外反し、口唇は肥厚するが端面をつくり、蓋であろうか。	右回転撫で4周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.8以下B+C+D 焼成：5 色調：2.5YR 5/2灰赤 残存：30% 褐
26	皿 須恵器	口径(14.6) 底径(7.0) 器高 2.5	底部は上げ底で、体部は外反する。口唇は玉縁となる。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：B+C+H 焼成：2 色調：2.5YR6/4にぶい橙 残存：20%
27	土 籠	現長 3.4 外径 1.0 孔径 0.3	細形であるが、つくりが悪い。一端を欠失する。	棒に巻きつけ成形。	胎土：微A+C+E+F+G 焼成：4 色調：7.5 YR5/4にぶい褐
28	瓶 灰釉	頸部径 (5.8)	肩部から屈折して頸部へ移行する。表に淡緑色の釉がかかる。	右回転撫で。口頸部の接合は、肩部の上に乗せるが、内側に粘土を巻き込んでいない。 東濃産？	胎土：ほとんど夾雜物含まず 焼成：5 色調：5Y 6/2灰黄 残存：口縁15%
29	瓶 灰釉	胴径 14.8 高台底径 7.5	高台は低く、端面は僅かに内傾する。胴部は緩やかな丸朱を持って立ち上がる。内面は鏡轍目が明顯である。底部と胴下位に斑点状の釉が掛かり、倒置して焼いている。	右回転撫でが基本となるが、胴部中位付近から上へは左回転撫で。胴下位外面は右回転削りが施された後、高台が張り付けられる。高台の内側は強く擦でられるが、外側には接合痕が見られる。 猿投産	胎土：白色微砂粒含有 焼成：5堅織 色調：2.5Y5/3黄褐 残存：下半部30% 床
30	壺 灰釉	胴径(25.5)	肩のやや張る胴上半部の破片。肩には淡緑色の釉が掛かるが、はげ落ちた部分もある。	右回転撫で。内面は胴最大径付近を境に上下で違う。上は引き上げによって付いた轍目である。猿投産？	胎土：0.3～0.5の小石僅か。B+C+黒色微粒子 焼成：5 色調：5Y6/1 灰 残存：胴上半30% 床
31	壺 須恵器	底径(19.0)	平底から僅かに外反して立ち上がる。	粘土帶積み上げ、平行叩き成形。体部最下位外面左→右への窪削り。内面撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：5 色調：10YR5/1 褐灰 残存：底部25%
32	壺 須恵器	底径(14.1)	平底から外傾する胴部へ至る。	粘土帶積み上げ後、右回転撫で。体部最下位左→右への窪削り。 末野産	胎土：0.6以下A+B+C+D 焼成：5 色調：10 R2/1赤黒 残存：底25%
33	鉢 須恵器	口径 20.7 胴径 22.7 現高 16.2	丸い胴部から大きく外反する短かい口縁に至る。口縁端部は塞みが巡る。	粘土帶積み上げ後、右回転撫で。 末野産	胎土：0.8以下A+B+C+D 焼成：5 色調：5 PB3/1暗青灰 残存：上

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
34	台付甕 土師器	口径(11.4) 胴径(12.9) 現高 9.5	丸い胴部から外反する口縁に至る。口縁は肥厚する。	口縁横撫で後、外面胴上半右→左への、胴下位上→下への箄削り。内面箄撫で。	位80% 床 胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：2.5 YR 3/6 暗赤褐 残存：30% 床
35	台付甕 土師器	口径(12.5) 胴径(12.9)	丸い胴部からコの字状口縁へ移る。口縁は肥厚する。 煤付着する。	口縁2段の横撫での後、胴部上位右→左へ、下位上→下へ箄削り。内面箄撫で。	胎土：微A+E+F+G 焼成：4 色調：2.5 YR 6/4 にぶい橙 残存：20%
36	台付甕 土師器	口径 13.1 胴部 14.4 現高 14.2	胴は胴部へ窄まるとともにコの字状口縁に移る。口唇部は短かいつくりである。	口縁には粘土接合痕が見られる。口縁部2段の横撫で後、胴部上位右→左へ、下位は下→上の箄削り。	胎土：微A多+E+F 烧成：4 色調：2.5 YR 6/2 灰赤 残存：60%
37	甕 土師器	口径(13.3) 胴径(14.8)	丸い胴からくの字状に屈曲する肥厚する口縁に至る。 二次加熱のため表面荒れる。	口縁横撫での後、胴上位右→左への箄削り。胴中位以下は下→上への箄削り。内面は右→左へ箄撫で。	胎土：微A多+E+F+G+H 烧成：2 色調：5 YR 6/6 橙 残存：49%
38	甕 土師器	口径 18.0 胴径 20.2	丸い胴から口唇の長いコの字状口縁に至る。	口縁横撫での後、胴上位右→左へ箄削り。内面右→左へ箄撫で。	胎土：微A多+F+F+G 烧成：3 色調：2.5 YR 6/2 灰赤 残存：50%



第126図 第777号住居跡出土遺物(3)

第78号住居跡（第127図）

2一チ区に位置し、土坑群に近接する。規模は3.43×3.3m、深さは0.24mを測る。形態は正方形で、主軸はN—22°30'—W、床標高は71.33mである。

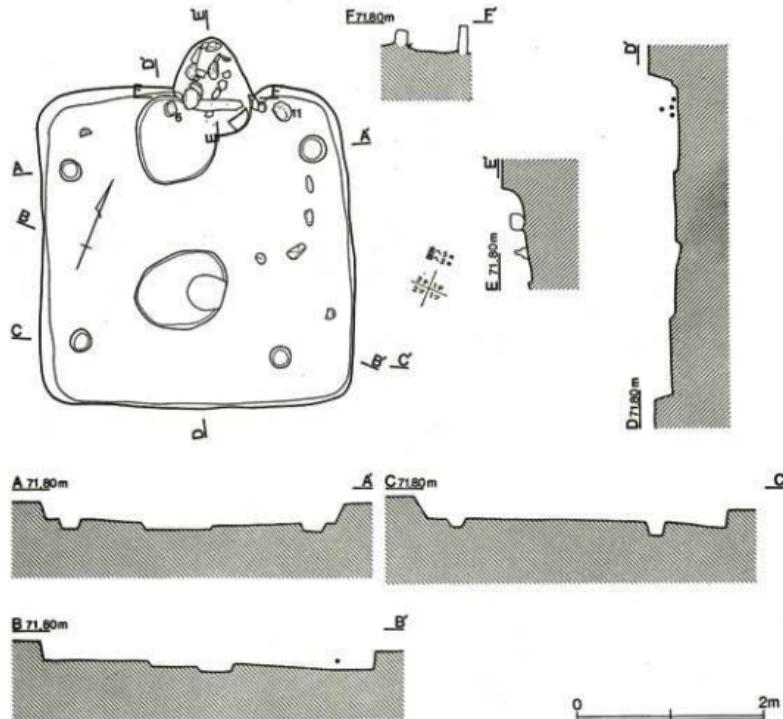
竈は北壁僅か右寄りにあり、長さ $1.05 \times$ 幅 $0.7m$ で、側壁には石が使われ、天井石に使われた横長の石が落下している。柱穴は各隅に見られるが、南東隅だけは西側へ寄り、いずれも浅い。

住居跡の覆土の主体は砂質の灰褐色土で、壁際では砂質の黒褐色土である。

遺物は竈内から壺(1)が、竈左脇から高台付壺(6)が、左から甕(1)が出土する。他にピット中から壺(2)・(5)が、覆土から高台付壺(3)・(4)、土師器甕(8)・(9)が出土する。甕が第75号住居跡跡と接合する。

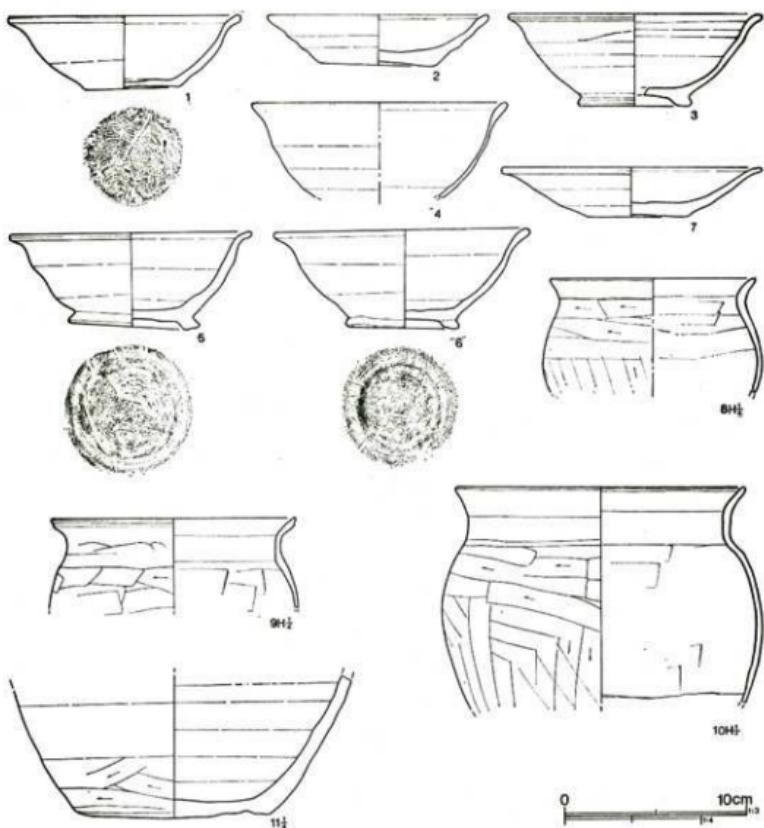
第78号住居跡出土遺物（第128図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径 12.9 須恵器底径 5.2 器高 4.0	小さな底部から外反し、体部中位で内凹して再び口縁で大きく外反する。口唇は玉縁状となる。	右回転撚で、底部右回転まわし糸切り。 末野産 3・5・6は同一形態で、胎土も同じ。	胎土：B+C少 焼成：5 色調：5B4/1暗青灰 現存：100% 竈



第127図 第78号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯 須恵器	口径 12.2 底径 6.3 器高 2.8	平底から外傾する体部へ移行する。器高の低い厚手の杯である。	右回転撫で 3周。底部右回転まわし糸切り。二次加熱のためか荒れる。 末野産	胎土: 0.6 以下 B+C+D 多 焼成: 2 色調: 5Y R 5/6 明赤褐 残存: 90%
3	高台付 杯 須恵器	口径(14.0) 高台径 (6.3) 器高 5.0	高台は低くへの字状に開く。口唇部は大きく外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外を回転撫で。 末野産	胎土: 0.5 以下 B+C+D +E 焼成: 5 色調: 10YR 6/1褐灰 残存: 30% 覆土



第128図 第78号住居跡出土遺物

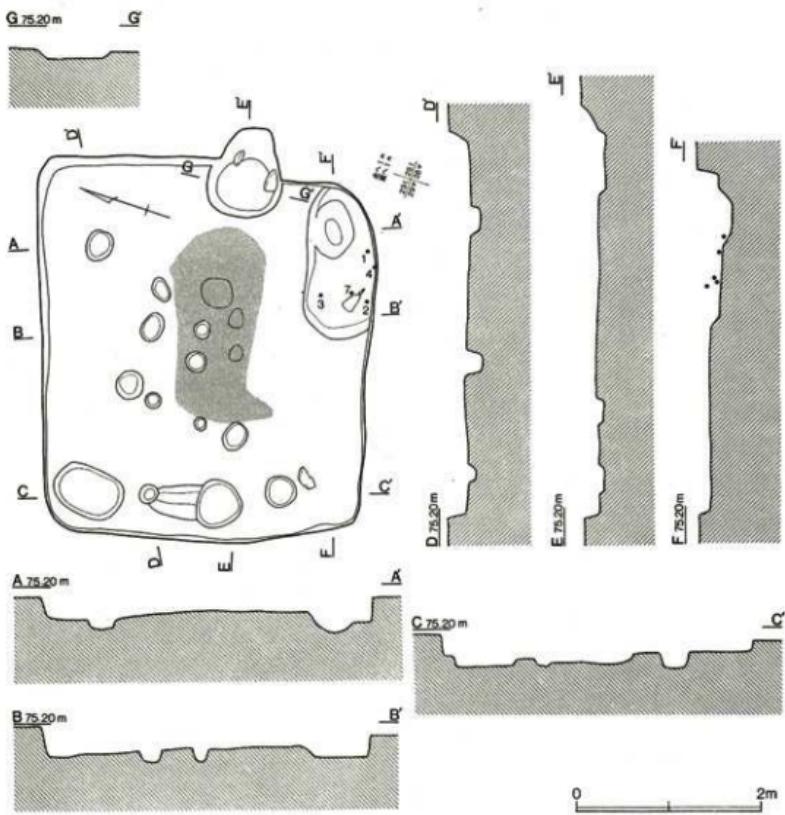
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	高台付 壺 須恵器	口径(14.1)	丸い体部から、大きく外反する口縁に至る。口唇は肥厚する。	右回転撚で。摩滅著しい。口縁に黒色で光沢を持つものが付着する。	胎土: 0.2以下 B+C+E 焼成: 2 色調: 7.5 YR 7/4にぶい橙 残存: 20% 覆土
5	高台付 壺 高台径 7.3 器高 5.3	口径 13.4	高台はハの字状に開き、大きい。端部は窪み、外傾する。	右回転撚で4周。底部右回転糸切り。中央が焼け歪み亀裂が入る。	胎土: B+C少 焼成: 4 色調: 5 Y 7/1 黄灰 残存: 95%
6	高台付 壺 高台径 6.2 器高 5.4	口径 14.1	高台は低く端面は内傾する。口唇は反り返る。	右回転撚で3周。底部右回転糸切り。	胎土: B+C少 焼成: 3 色調: 2.5 Y 6/1 黄灰 残存: 90% 胎土分析No.12 床
7	皿 須恵器	口径 14.4 底径 5.1 器高 2.7	平底から外傾して口唇は大きく外反する。	右回転撚で。底部右回転糸切り。摩滅顯著。	胎土: B+C少 焼成: 2 色調: 5 Y 7/1 黄灰 残存: 100% 覆土
8	甕 土師器 胴径(15.8)	口径(14.9)	丸い胴部から、外反する口縁に至る。口縁は肥厚する。	口縁横撚での後、胴部上位右→左への箇削り。胴下位は下→上へ箇削りする。内面は右→左への箇撚で。	胎土: 微A多+E+F+G+H 焼成: 3 色調: 5 YR 6/6 橙 残存: 25% 覆土
9	甕 土師器	口径(17.8)	コの字形状口縁で、口唇が外傾する。	口縁横撚で2段の後、胴上位は右→左への箇削り。内面は右→左への箇撚で。	胎土: 微A多+E+F 焼成: 4 色調: 5 YR 6/8 橙 残存: 25% 覆土
10	甕 土師器 胴径 23.0	口径 20.2	コの字形状口縁で、口唇は外傾する。	口縁横撚で2段の後、胴上位は右→左へ箇削りする。下位は上→下へ箇削りする。内面は箇撚で。	胎土: 微A多+E+F+G+H 焼成: 4 色調: 7.5 YR 7/4にぶい橙 残存: 80%
11	甕 須恵器	底径 13.9	平底から内壁気味に立ち上がる体部へ至る。	右回転撚で。体部最下位右→左へ箇削り。	胎土: 0.8以下 B+C+D+E 焼成: 5 色調: N 4/0 黄 残存: 床

第79号住居跡（第129図）

29—ミ区に位置する。規模は4.11×3.56mで、深さは0.38mを測る。形態は僅かに隅丸の長方形である。主軸はN-73°—Eで、床標高は74.67mである。

竈は東壁右寄りにあり、焚口は浅い窪みとなる。長さ1.0×幅0.8mで焚口は浅い窪みとなる。中央には多量の鉄滓が堆積し、中でも3ヶ所特に赤錆の出た範囲があった。床には多くの掘り込みがあるが、いずれも浅い。特に竈の右側南東隅からは、多くの遺物が出土する。

竈から土師器甕(8)が、南東隅掘り込みから壺(1)・(2)・(4)、鉄滓付着壺(3)、高台付甕(7)の他、床から壺(5)、土師器甕(9)～(11)が出土する。鉄滓は950gある。

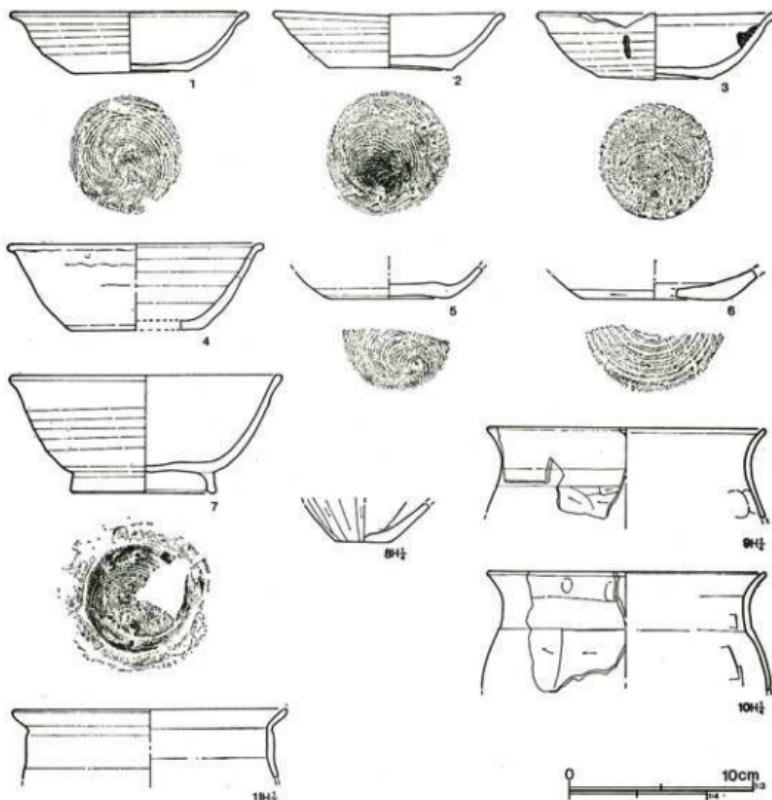


第129図 第79号住跡

第79号住跡出土遺物（第130図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 須恵器底径 器高	13.0 6.1 3.3	平底から丸味を持つ体部に 移り、口唇は外反する。口 唇内側に浅い沈線を持つ。	右回転撲で8周。底部右回 転離し糸切り。　末野産 胎土：0.6以下B+C+D +E多 焼成：5 色調： 5Y5/1灰 残存：60% 床
2	杯	口径 須恵器底径 器高	12.6 6.7 3.0	口唇部は外反し、丸い。	右回転撲で6周。底部右回 転離し糸切り。　末野産 胎土：0.5以下B+C+D +E多 焼成：3 色調： 5Y5/1灰 残存：95% 床

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
3	壺 須恵器	口径 底径 器高	13.0 6.1 3.5	体部は丸く、口唇は外反する。外面に鉄滓付着。	右回転撫で8周。底部右回転糸引き切り。 末野産	胎土：0.6以下B+C+D 焼成：5 色調：N4/0灰 残存：90%
4	壺 須恵器	口径(14.0) 底径(7.0) 器高(4.7)		体部は深くやや丸味を持ち、口唇は短かく外反する。	右回転撫で6周。底部右回転糸引き切り。 末野産	胎土：0.2以下のB+C 焼成：5 色調：N4/0灰 残存：20% 床
5	壺 須恵器	底径 器高	6.5 6.5	底部と比べて体部は薄作り。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：B+E+H 烧成： 2 色調：10YR7/2にぶ い黄橙 残存：50% 床



第130図 第79号住居跡出土遺物

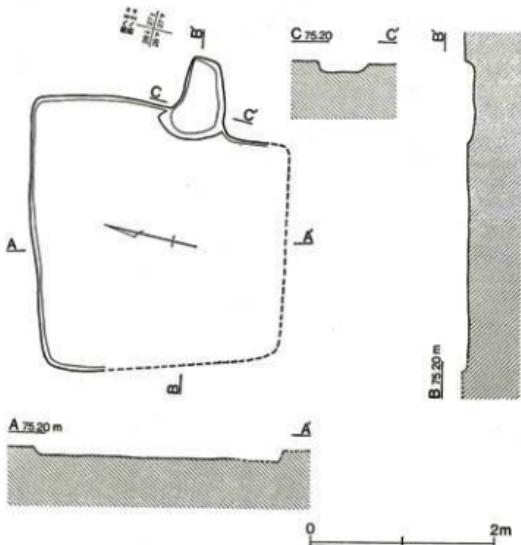
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	壺 須恵器	底径(7.8)	やや大き目の底部である。系目が太い。	右回転拂で。底部右回転糸切り後、周辺笠削り。 末野産	胎土: B+E 多 焼成: 5 色調: N 4/0 灰 残存: 底部20% 床
7	高台付 壺 須恵器	口径 14.9 高台径 8.0 須高 6.4	高台は高く、同一の厚さで作られる。体部は深く、口唇は僅かに外反する。	右回転拂で7周。底部右回転離し糸切り。高台内外回転拂で。 末野産	胎土: 1.0 以下 B+C+D+E+金H 焼成: 5 色調: N 4/0 灰 残存: 80% 床
8	甕 土師器	底径 4.0	胴最下位は丸味を持ち立ち上がる。	胴外面上→下笠削り。底部は一方向の笠削り。内面は右→左への笠拂で。	胎土: 微A多+B+C+F+G+H 焼成: 4 色調: 5 YR 6/4 にぶい橙 残存: 底部のみ 電
9	甕 土師器	口径(19.9)	口縁は大きく外反して作られるが薄い。	口縁部横拂で後、胴部右→左へ削る。	胎土: 微A多+E+F+G+H 焼成: 2 色調: 5 YR 7/4 にぶい橙 残存: 口縁25% 床
10	甕 土師器	口径(19.9)	口縁はコの字状口縁で、口唇は大きく外反する。	口縁部横拂での後、胴部を右→左へ笠削り。内面は右→左への笠拂で。	胎土: 微A多+E+F+G 焼成: 2 色調: 2.5 YR 6/6 橙 残存: 口縁15% 床
11	甕 土師器	口径(19.6)	口縁はコの字状口縁で、口唇部は外傾する。	口縁2段の横拂での後、胴部笠削り。	胎土: 微A多+D+E+F 焼成: 1 色調: 5 YR 7/6 橙 残存: 口縁20% 床

第80号住居跡（第131図）

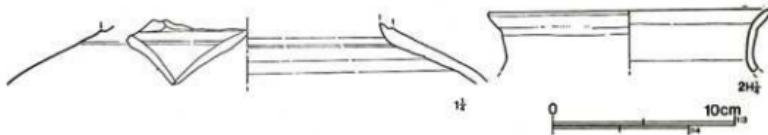
28—マ区に位置する。規模は2.99×2.81mで、深さは0.12mを測る。形態は正方形で、主軸はN—77°—E、床標高は74.91mである。竈は東壁右寄りにあり、長さ0.8×幅0.65mを測る。南壁と東壁の大部分が破壊される。遺物は竈から土師器の甕(2)が出土する。

第80号住居跡出土遺物（第132図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 須恵器	頸部径(21.0)	肩部から屈曲して口縁に移行する。	右回転拂で。 末野産	胎土: B+C 焼成: 5 色調: N 5/0 灰 残存: 13% 土坑
2	甕 土師器	口径(20.3)	コの字状口縁。	口縁は横拂で。	胎土: 微A多+E+F+G 焼成: 3 色調: 2.5 Y 6/6 明黄褐 残存: 8% 竈



第131図 第80号住居跡



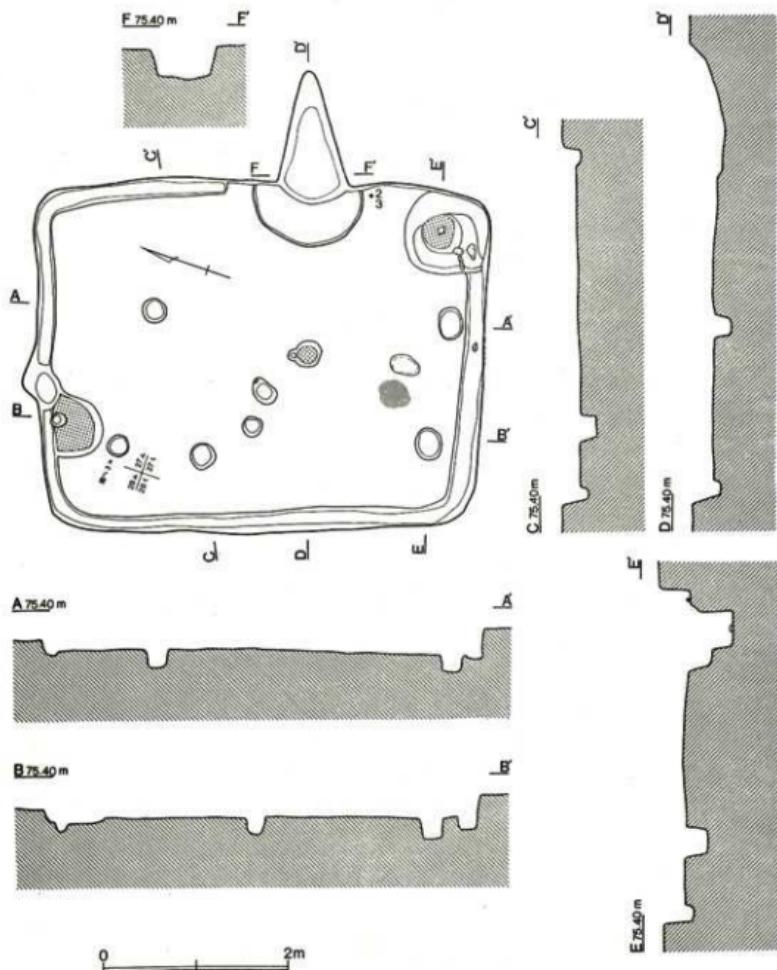
第132図 第80号住居跡出土遺物

第81号住居跡（第133図）

27—ミ区に位置し、規模は $3.83 \times 4.87\text{m}$ 、深さ 0.23m を測る。形態は長方形で主軸はN-71°Eで、床標高74.70mを測る。

竈は東壁右寄りにあり、長さ $1.9 \times$ 幅 0.8m の大形竈で、煙道は緩やかに立ち上がる。床はほぼ全周に幅 0.2m の壁溝が巡り、壁は垂直に立ち上がる。南東隅に径 0.9m 、深さ 0.5m の貯蔵穴が見られる。この中には焼土が入っていた。また焼土が中央と北西隅に見られ、鉄滓が中央南西に散布していた。いくつかのビットが見られるが、柱穴と認定できるものはない。

遺物は、竈から壺(1)と甕(2)、土師器甕(3)・(4)が、覆土から壺(3)、蓋(4)、高台付壺(6)、甕(7)・(9)、土師器甕(8)、鉄釘(11)が出土する。鉄滓は 560g である。

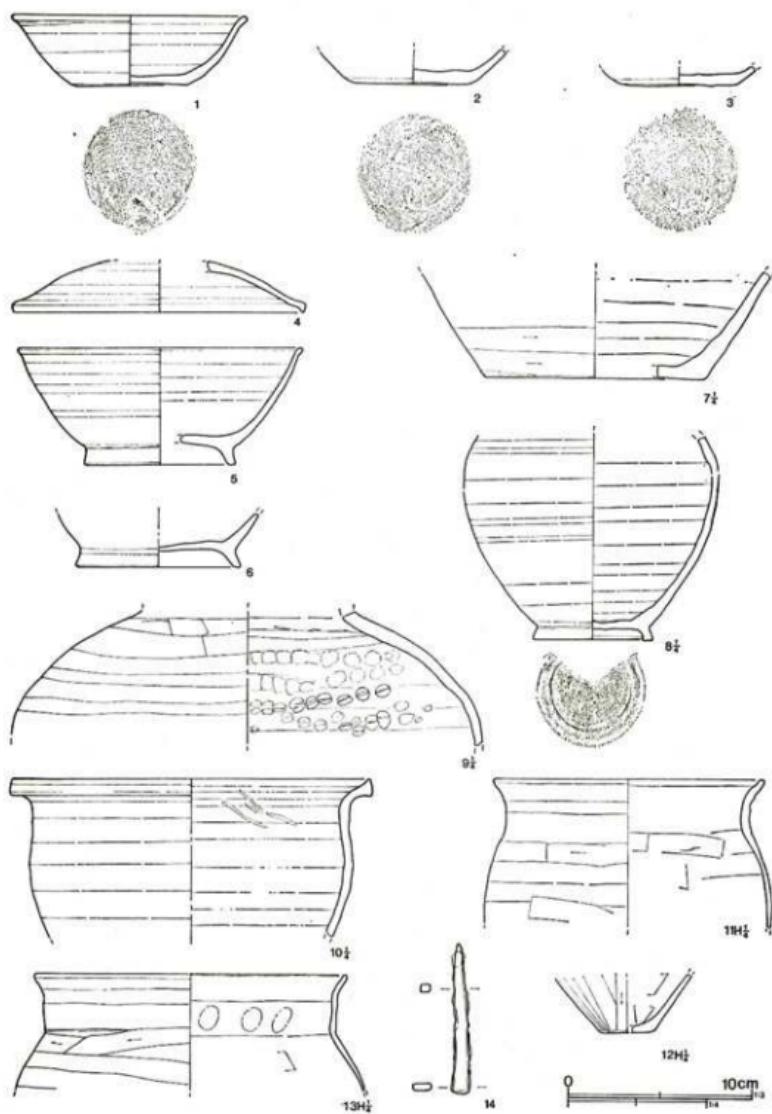


第133図 第81号住居跡

第81号住居出土遺物（第134図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器 底径 器高	口径 12.8 6.5 3.8	平底から丸い体部を経て外 反する口縁に至る。	右回転撲で5周。底部右回 転離し糸切り。 末野産	胎土：0.9以下B+C+E 焼成：5 色調：7.5Y5/1 灰 残存：70% 電

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	环 須恵器	底径 6.0	平底から外傾する体部へ移る。	右回転拂で。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.6以下 B+C 焼成：5 色調：2.5 YR7/1 明赤灰 残存：底部のみ
3	环 須恵器	底径 6.0	体部へ丸味を持って移行する。	右回転拂で。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.3以下 B+C 焼成：2 色調：5 Y 7/1 灰白 残存：底部のみ 覆土
4	蓋 須恵器	口径 15.8	口唇部は垂直に垂れ、三角形となる。	右回転拂で6周。内外面摩滅する。 末野産	胎土：B+C+E+H 焼成：1 色調：2.5 Y 7/2 灰黄 残存：12% 覆土
5	高台付 塊 高台径 (8.3) 器高 6.3	口径(15.5)	高台はへの字状に開き、端面は水平になる。	右回転拂で7周。底部右回転糸切り。高台内外回転拂で。 末野産	胎土：B+C+D+E+H 焼成：2 色調：7.5 Y R 6/4にぶい橙 残存：20% 覆土
6	高台付 塊 高台径 (9.0)	高台径	高台はへの字状に大きく開き、端部が薄くなる。	右回転拂で。 末野産	胎土：B+C+D+E+H 焼成：1 色調：5 Y R5/8 明赤褐 残存：45% 覆土
7	壺 須恵器	底径(15.0)	平底から外傾する体部に至る。	右回転拂で。底部笠削り。 内外面木口拂で。 末野産	胎土：0.9以下 B+C 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：27% 覆土
8	壺 須恵器	胴径 18.2 高台径 8.6	高台は外に開き、端面内側は中央に向い突き出す。胴部は圓卵形になる。	右回転拂で。底部右回転糸切り。胴部下位は回転笠削り。高台付着後回転拂で。 末野産	胎土：0.5以下 B+C 多 焼成：5 色調：7.5 Y R 2/1 黒 残存：50% 覆土
9	壺 須恵器	頸部径 15.4	肩部は緩やかに窄まり頸部へ至る。	右回転拂で。内面に指頭痕 明瞭。 末野産	胎土：0.7以下 B+C 焼成：5 色調：5 P B 4/1 暗青灰 残存：25% 覆土
10	鉢 須恵器	口径(25.5) 胴部(23.2)	口縁は強く外反し、口唇は上方に延びる。内側は摩滅する。	粘土帶積み上げ右回転拂で。内面に火燐痕あり。 末野産	胎土：1.0以下 B+C+E 焼成：5 色調：5 Y 6/1 灰 残存：20% 覆土
11	壺 土師器	口径 19.5 胴径 20.7	口縁はコの字状 口縁に近く、口唇内側には窪みを巡らす。二次加熱で荒れる。	口縁は2段の横拂での後、 胴部上位を右→左へ笠削りする。内面は右→左への笠拂で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：3 色調：2.5 Y R 5/8 明赤褐 残存：70% 覆土
12	壺 土師器	底径 3.7	平底から外傾する胴部へ移行する。	外面底部上→下への笠削り。底部も同じく笠削り。 内面右→左への笠拂で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：2.5 Y R 5/8 明赤褐 残存：底 覆土



第134図 第81号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
13	甕 土器部	口径(22.4)	直立するコの字状口縁で、大形である。薄手。	口縁2段の横撫での後、胴部右→左へ窪削り。内面右→左へ窪撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：5Y R6/8 径 残存：23% 甕
14	棒状鉄 製品	全長 8.1 幅 1.0	一端が細くなり尖るが断面やや長方形。他方は平らなつくりである。	鍛造。	重量：8.49g 覆土

第82号住居跡（第135図）

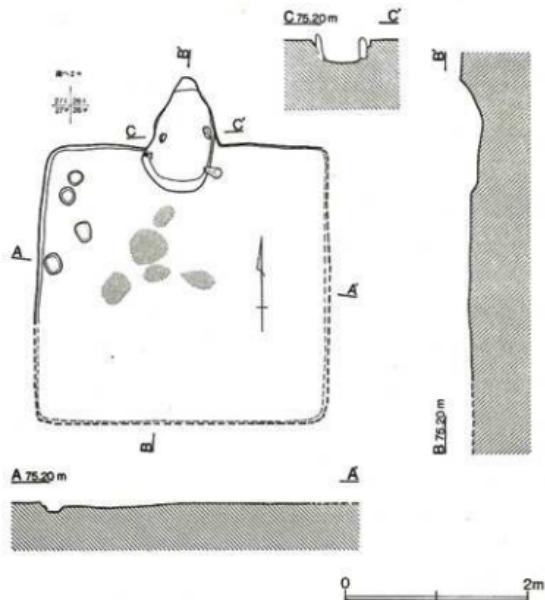
26-マ区に位置する。

規模は3.05m × 3.22mで、深さは0.11mである。形態は正方形で、主軸はN-1°-E、床標高は74.87mである。

竈は北壁中央にあり、長さ1.25×幅0.75m、袖には河原石が使われている。

床面の竈前方には5ヶ所に鉄滓の分布が見られる。壁は東と南が破壊され、柱穴は未確認。

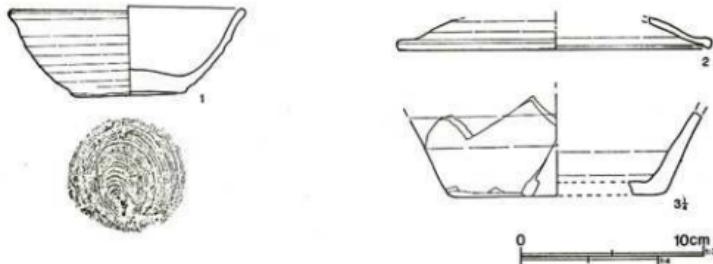
遺物は竈脇から壺(1)、土坑の底から蓋(2)、覆土から甕(3)が出土した。



第135図 第82号住居跡

第82号住居跡出土遺物(第136図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 13.0 底径 6.3 器高 4.9	焼け歪み、やや上げ底で、口唇は外反する。底部中央には、1.3cmと厚い。	右回転撚で9周。底部右回転まわし糸切り。多孔質。 南比企窓	胎土：白A少 焼成：4 色調：5B3/1暗青灰 残存：90% 電脇
2	蓋 須恵器	口径(17.0)	口唇は屈曲し下方へ垂れ下がる。口唇内側には沈縫が巡る。	右回転撚で。二次加熱のため表面が荒れる。末野産	胎土：0.5以下B+C+D+E 焼成：1 色調：7.5 YR 7/4に近い橙 残存：15% 土坑床面
3	甕 須恵器	底径(15.6)	平底から外傾する胴部へ移行する。	粘土帶積み上げ後、右回転撚で。底部外面は一方向窓削り。 末野産	胎土：0.6以下B+D+E 焼成：5 色調：5B3/1 暗青灰 残存：20% 覆土



第136図 第82号住居跡出土遺物

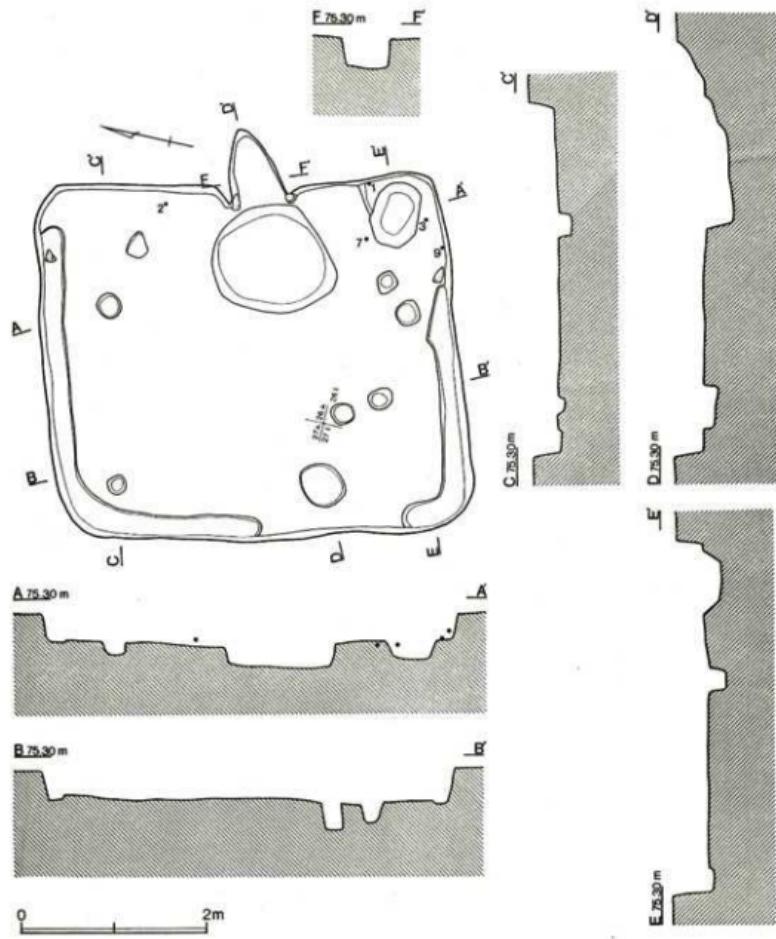
第83号住居跡(第137図)

26—ム区に位置する。規模は3.82×4.51m、深さは0.3mを測る。形態は長方形で、主軸はN—74°—Eで、床標高は74.55mである。

竈は東壁中央にあり、長さ0.9×幅0.6mを測る。焚口袖に河原石が使われ、煙道は傾斜を持って直線的に立ち上がる。

床の竈前方に径1.3m、深さ0.25mの掘り込みがあるが、付属施設か不明である。南東隅には貯蔵穴と考えられる楕円形の落ち込みがある。北壁、西壁、南壁の一部に、幅0.2mの壁溝が巡る。床にはいくつかのピットが見られるが、柱穴と認定できるものはない。

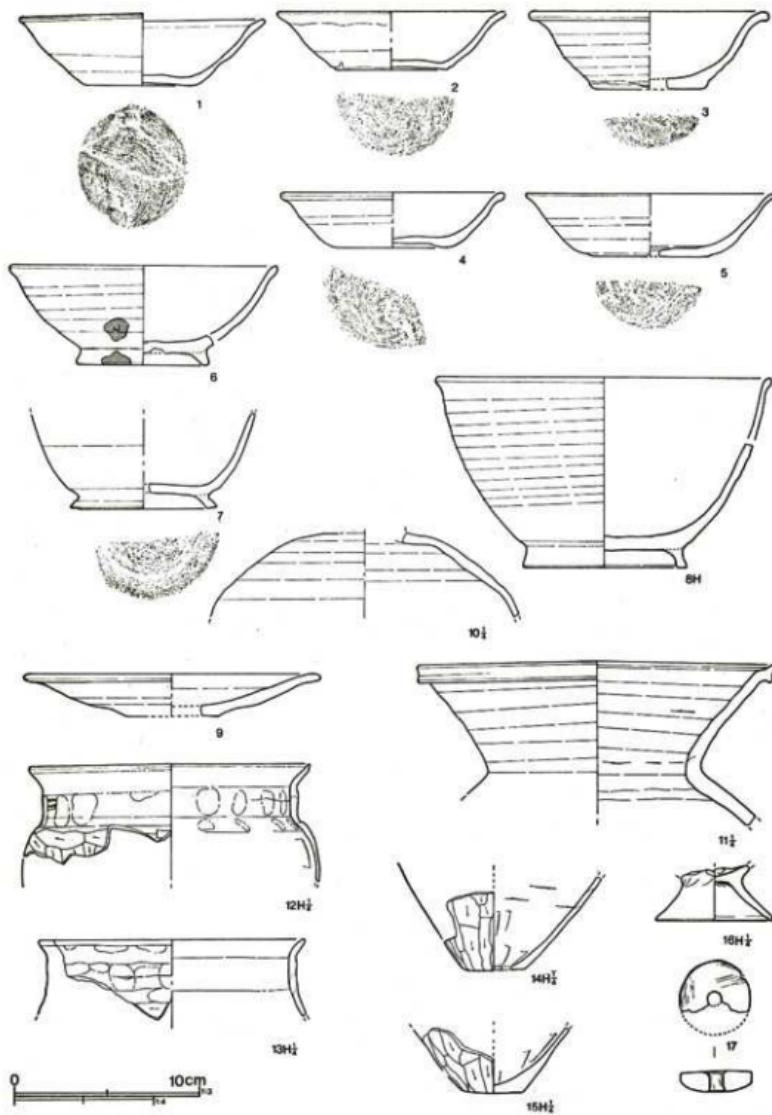
遺物は竈内から土師器甕⑩・⑪が、南東ピット周辺から坏①、高台付塊⑧、甕⑩、土師器甕⑫、土師器台付甕⑬が、ピット内から灰釉瓶⑭が、床面から筋錘車⑮などが出土している。覆土からは鉄滓付着の高台付塊⑥が出土する。鉄滓は845gと羽口片も出土する。



第137図 第83号住居跡

第83号住居跡出土遺物（第138図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	环 須恵器	口径 底径 器高	13.3 6.0 3.9	口唇は肥厚する。 右回転撫で。底部右回転ま わし糸切り。	胎土：白微A+B+E多 焼成：1 色調：2.5 YR 7/2 明赤灰 残存：80% 床



第138図 第83号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	壺 須恵器	口径(12.4) 底径(6.1) 器高 3.2	底部はやや上げ底で、口唇部は大きく外反する。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+C+D+E 焼成：2 色調：N 3/0暗灰 残存：40%
3	壺 須恵器	口径(13.0) 底径(6.4) 器高 4.2	底部周辺に粘土のまくれがある。口唇部は大きく外反する。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：B+C+E 焼成： 5 色調：N 3/0暗灰 残存： 40%
4	壺 須恵器	口径(12.2) 底径(6.0) 器高 3.0	底部は上げ底で、口唇は外反する。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.2以下B+C+D+E 焼成：2 色調： 7.5Y4/2灰オリーブ 残存： 30% 覆土
5	壺 須恵器	口径(13.5) 底径(6.3) 器高 3.4	底部から指差し込み部で外反して、口縁でも外反する。	右回転撫で4周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：B+D+E 多 焼成： 3 色調：7.5Y5/2灰オリーブ 残存： 25% 覆土
6	高台付 壺 須恵器	口径(14.6) 高台径 7.2 器高 5.4	高台はハの字状に開き、端部は丸くなる。口唇は大きく外反する扁平な壺。器面上に鉄滓が付着する。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+C+E 多 烧成：3 色調：7.5 YR 5/1褐灰 残存：35% 覆土
7	高台付 壺 須恵器	高台径 (8.0) 現高 5.2	高台はハの字状に大きく開き、端面に窪みが入る精緻なつくりである。体部は腰があり内彎して立ち上がる。	右回転撫で10周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後に外側を強く回転撫でを行なう。	胎土：B+E 多 烧成：5 色調：N 4/0灰 残存：40%
8	高台付 壺 須恵器	口径 18.3 高台径 8.9 器高 10.3	高台は薄く、端部は水平で、体部は深く、口唇は外反する。体部は薄く、輪轍目が横走する。	右回転撫で12周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後に内外を撫でる。 末野産	胎土：0.2以下A+D+E 多 烧成：1 色調：10Y R 8/3浅黄橙 残存：50% 胎土分析No.6 床
9	皿 須恵器	口径(16.2) 底径(4.9) 器高 2.3	底径は小さく、口唇は反り返える、やや厚手のつくりである。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+C+D+E 焼成：3 色調：5 Y 5/2灰オリーブ 残存： 20%
10	瓶 須恵器	頸部径 灰 級 (6.0)	肩が張り頸部付近で水平になる。	右回転撫で。肩に緑色釉が掛かる。 猿投産	胎土：黒微A+B+C均質 焼成：5 色調：10Y R5/3 にぶい黄褐 残存：肩部25% ピット
11	壺 須恵器	口径 25.3	口縁はハの字状に延び、口唇部で上下に突き出す。端面と上面に窪みをつくる。	粘土帶積み上げ。右回転撫で口縁部7周。 末野産	胎土：0.8以下B+C+E 多 烧成：5 色調：N 3/0 暗灰 残存：口縁90% 床

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
12	甕 土師器	口径 20.1 肩部 21.3	直立するコの字状口縁で、 口唇部は外反し、端部がつ まみ出され薄くなる。	口縁 2段の横撫でその後、口 肩部横撫で。肩部は右→左 への削りが主体。内面は右 →左への籠撫で後、口縁横 撫で。	胎土：微A多+B+F+H 焼成：3 色調：5Y6/4 にぶい橙 残存：口縁90% 床
13	甕 土師器	口径(19.0)	直立するコの字状口縁で、 口唇は外反するがやや短か い。	口縁 2段の横撫でその後、口 肩部に横撫で。肩部は右 →左への籠削り。	胎土：微A多+E+F+G 多 焼成：4 色調：7.5 YR6/4にぶい橙 残存： 口縁20% 床
14	甕 土師器	底径 4.5	平底から僅かな丸味を持っ て外傾する肩部に至る。	肩部外面は上→下の籠削 り。内面は右→左への籠撫 で。	胎土：微A多+F+H 焼成：3 色調：5YR5/6 明赤褐 残存：肩下位60% 床・甕・覆土
15	甕 土師器	底径 4.3	平底から外傾する肩部へ移 行する。	肩部外面は上→下の籠削 り。内面は右→下への籠撫 で。	胎土：微A多+F+H 焼成：3 色調：2.5YR5/8 明赤褐 残存：底部のみ
16	台付甕 脚径	8.4	脚台部はハの字状に大きく 開く。脚端部内側は、僅か に窪む。	底部内面と脚部天井部は右 回りの籠撫でを行なう。脚 裾部は横撫で。	胎土：微A多+F+G+H 焼成：3 色調：2.5YR 6/6 橙 残存：脚のみ 床
17	筋鍾車 石製品	外径 3.85 厚さ 1.1 孔径 0.7	上面は僅か丸味を持ち、側 面は垂直である。下面は弧 を描くように丸くつくられる。 孔部は両面側がやや太 くなり、上面は受口状にな る。	上面は不定方向、下面是周 縁に沿って、側面は横位の 擦りが施される。孔部に斜 行する擦れが見られる。	重量：13.81g 變灰質砂岩 残存：70% 床

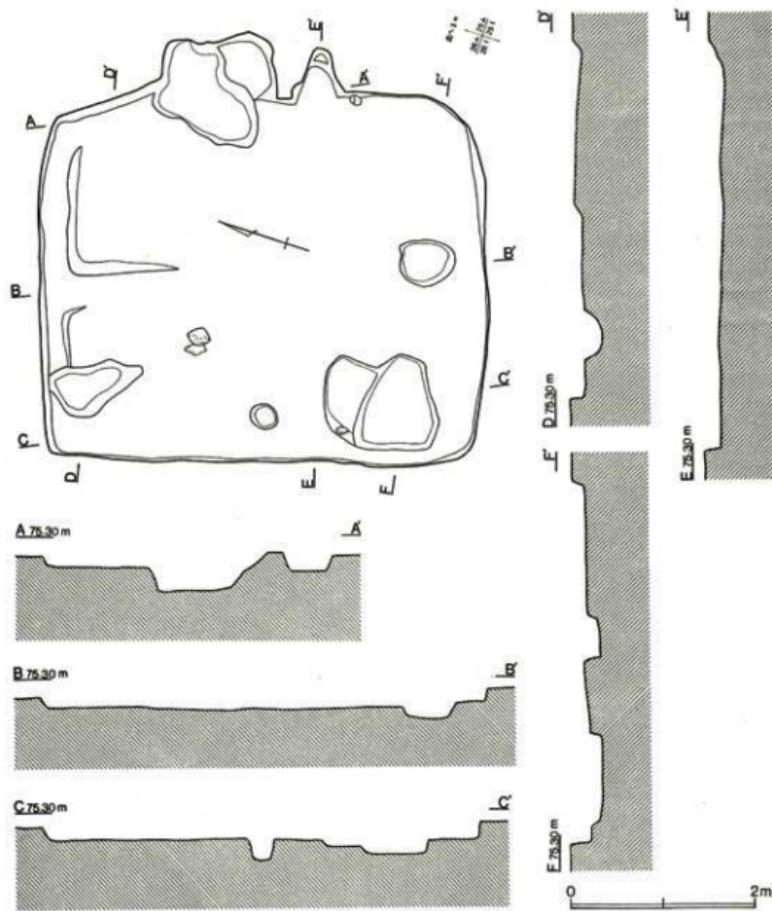
第84号住居跡（第139図）

26—ム区に位置し、規模は4.05×4.89mで、深さは0.38mである。形態は長方形で、主軸はN—78°—E、床標高は74.72mである。

竈は東壁右寄りで、長さ0.5×幅0.5mを測る。煙道は傾斜を持って立ち上がる。

床は竈の左側の東壁を不整形ピットが切る。西壁付近に深さ0.2mのピットが存在するが、柱穴はない。

出土遺物は床面から甕(1)・(2)、皿(6)、高台付塊(3)・(5)、土師器甕(8)・(9)・(10)の他、竈左ピットから中世的な鉢(2)と釘(3)が出土する。鉄付着土器は4点で、鉄滓は270g、羽口片3点が出土する。



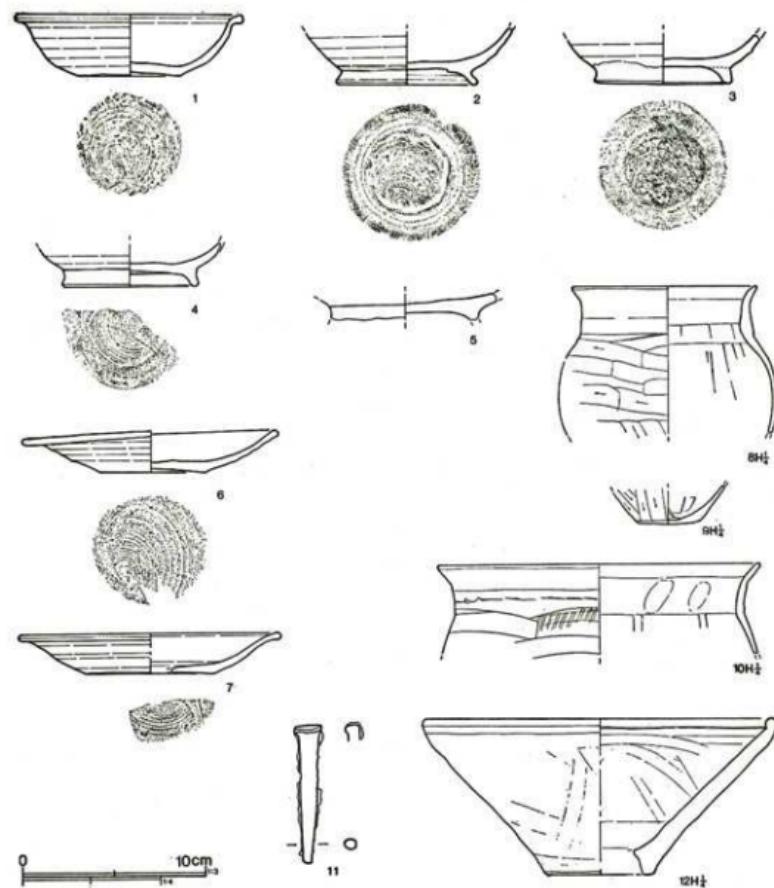
第139図 第84号住居跡

第84号住居跡出土遺物（第140図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(12.4) 須恵器底径 6.1 器高 3.3	体部は丸く。口唇は折れ曲 るように反り、玉縁状にな る。	右回転撫で6周。底部右回 転まわし糸切り。末野産	胎土: 0.8以下 B+C 焼 成: 5 色調: 5PB4/1 暗青灰 残存: 40% 床
2	高台付 壺	高台径 7.7	高台は大きく外に張る薄い つくりで、端面が外傾す	右回転撫で。底部右回転糸 切り。高台張りつけ後、内	胎土: 0.8以下 B+C+E 焼成: 4 色調: 10YR6/1

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器		る。	外回転拂で。 末野産	褐灰 残存: 底部完床
3	高台付 塊 須恵器	高台径 7.5	高台はあまり開かず、端面は内傾する。内面荒れて整形不明瞭。	右回転拂で。 底部右回転糸切り。 高台張りつけ後、内外回転拂で。 末野産	胎土: 0.9 以下 B+C+E+黒H 焼成: 2 色調: 10R 6/4 にぶい黄橙 残存: 高台 100% 床
4	高台付 塊 須恵器	高台径 7.5	高台はあまり開かず、端面は僅かに外傾する。	右回転拂で。 底部右回転糸切り。 高台張りつけ後、内外回転拂で。 末野産	胎土: 0.4 以下 B+C+E+H 焼成: 2 色調: 10R 7/3 にぶい黄橙 残存: 45%
5	高台付 塊 須恵器		高台はやや大きくて 8cm 近い。	右回転拂で。 末野産	胎土: B+C+D+E 焼成: 1 色調: 2.5Y7/3浅黄 残存: 底部80% 床
6	皿 須恵器	口径 14.0 底径 5.9 器高 2.2	やや上げ底で、口唇は反り 反えり、玉縁となる。焼け 歪む。輪轤目明瞭。	右回転拂で 6周。 底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土: 0.3 以下 B+C 焼成: 5 色調: N 3/0 暗灰 残存: 70% 床
7	皿 須恵器	口径(14.3) 底径(7.0) 器高 2.2	口唇は大きく外反し、玉縁 状となる。	右回転拂で 5周。 底部右回転糸切り。 末野産	胎土: 0.5 以下 B+C 焼成: 5 色調: 2.5Y6/2灰黄 残存: 20%
8	甕 土師器	口径(13.2) 胴径(15.6)	口縁は直立するコの字状口 縁で、口縁下部が肥厚す る。	口縁 2段の横拂での後、胴 上位右→左への箝削り、下 位上→下への箝削り。 内面 は右→左への箝拂で。	胎土: 微A多+E+F+H 焼成: 3 色調: 5YR 6/6 橙 残存: 70% 床
9	甕 土師器	底径 4.6	底部は僅かに丸味を持つ。	胴部外面は上→下への箝削 り。 内面は箝拂で。 底部外 面は一方向の箝削り。	胎土: 微A多+D+E+F +G 焼成: 4 色調: 5 YR 6/4 にぶい橙 残存: 底部 100% 床
10	甕 土師器	口径(23.1)	やや外傾するコの字状口 縁。	口縁外面に粘土接合痕あり。 口縁上下 2段の横拂での後、 胴部外面右→左への箝削り。 内面右→左へ箝拂で。	胎土: 微A多+E+F+G 焼成: 4 色調: 5YR 6/6 橙 残存: 40% 床
11	釘 鉄製品	現長 7.5 頭幅 1.45	頭部は折り反えされる角釘 で、扁平である。先端は角 がとれて丸くなるが、旧態 を呈するか不明である。	鍛造。	重量: 14.79g 窓脇ビット
12	鉢 須恵器	口径(25.6) 底径(8.0) 器高 11.1	平底から外反気味に立ち上 がり外傾する体部を経て、 玉縁状となる口唇に至る。	外面には指痕痕が明瞭。 下 位は木口拂でを行なう。 口 縁は横拂でし、内面は指痕	胎土: 0.6 以下 B+C+D+E 焼成: 3 色調: 表 面 5Y4/1灰、器肉 2.5YR

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			口唇は内側に折り返す。 内面中央は使用により擦り減って器内の色が出る。	で拂でられる。形態は中世的であるが、土は羽釜に類似している。	5/6 明赤褐 残存: 20% 竈脇ピット 末野産



第140図 第84号住居跡出土遺物

第85号住居跡（第141図）

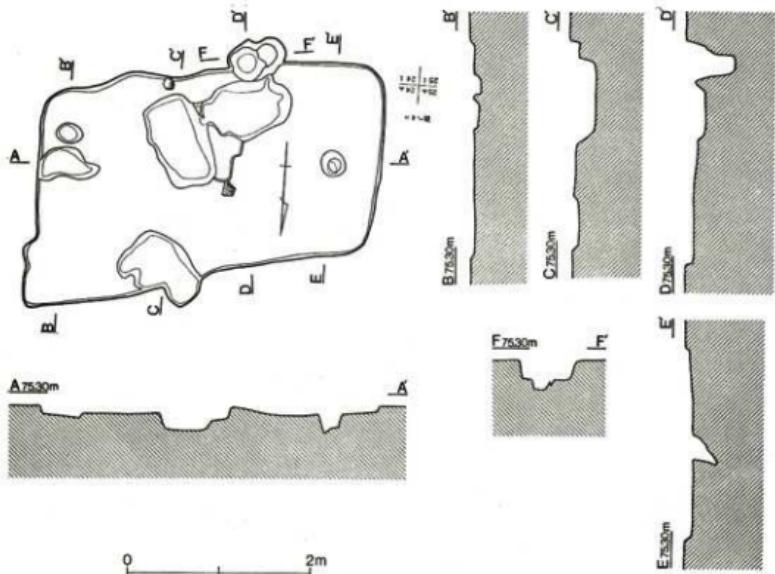
25-1区に位置する。第86号住居跡に近接する。規模は $2.43 \times 3.76\text{m}$ 、深さ 0.28m を測る。形態は不整長方形で、主軸はN-87°-E、床標高は 74.89m である。

床はいくつかのピットによって破壊される。南壁中央には深さ 0.45m のピットが壁を切る。中央西壁寄りに柱穴らしきものがあるが不明である。

遺物は床面から壺(3)・甕(1)・甕(4)が、東ピットから壺(2)、土師器(6)が出土する。他に鉄滓付着土師器壺(5)もある。鉄滓は 130g で、羽口片も出土する。

第85号住居跡出土遺物（第142図）

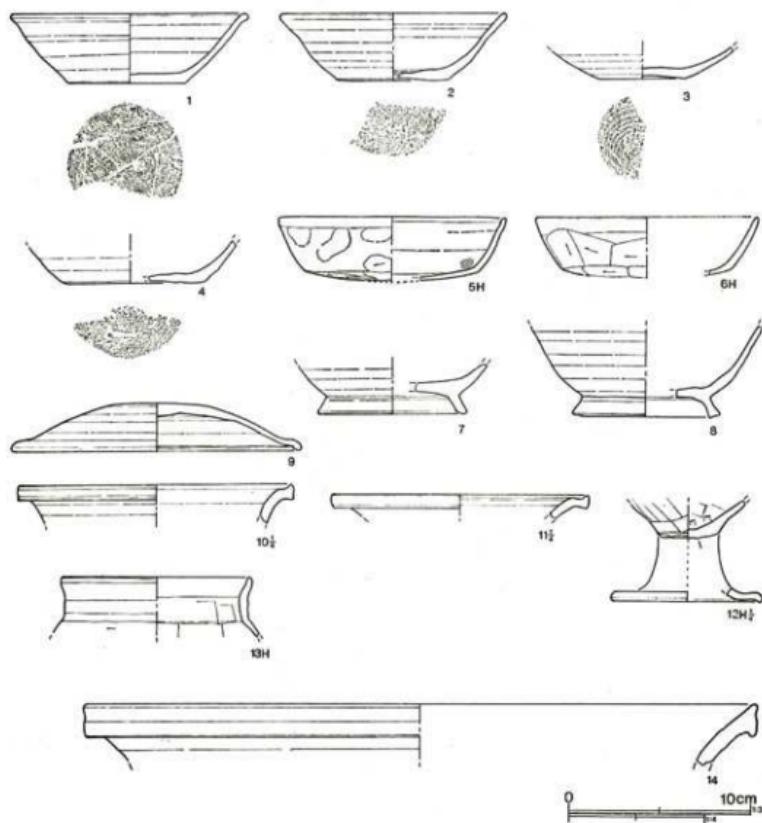
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	口径 13.1 底径 6.5 器高 3.8	体部は外傾し、口唇はある より外反せず玉縁をつくる。 底部擦り減る。	右回転撚で4周。底部右回 転糸切り。	胎土：0.8以下B+C+D 焼成：5 色調：10YR7/1 灰白 残存：70% 覆土
2	壺 須恵器	口径(12.5) 底径(6.2) 器高 3.7	体部上位で外方へ屈曲す る。	右回転撚で6周。底部右回 転糸切り。	胎土：0.5以下B+C 烧 成：5 色調：N 5/0 灰 残存：30% 東ピット
3	壺 須恵器	底径(4.6)	小さな底部から丸い体部へ 移行する。	右回転撚で。底部右回転糸 切り。	胎土：0.3以下B+C 烧 成：5 色調：N 4/0 灰



第141図 第85号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	杯 須恵器	底径(7.6)	体部は外傾し、縁輪目明瞭。	右回転撫で。底部右回転難し糸切り。 末野産	胎土：0.4以下B+C+D+E 焼成：4 色調：2.5 Y5/1黄灰 残存：30%
5	杯 土師器 現高	口径(12.5) 3.5	浅い丸底から屈曲して外傾する体部を経て、内側に瘤みを入れる口唇に至る。内面に鉄滓が付着する。	口唇部と内面屈曲部に横撫で。外面底部は不定方向窓削り。削りは一部体部まで至る。	胎土：微A多+F+G 焼成：3 色調：5YR7/4 にぶい橙 残存：35%
6	杯 土師器 現高	口径(12.3) 3.2	5とほぼ同形態であるが、口唇には沈線がない。	口線と内面は横撫で。底部は窓削りで、体部は右→左への木口撫で。	胎土：微A多+F+G 焼成：4 色調：5YR6/6 橙 残存：18% 東ピット
7	高台付 須恵器	高台径 (8.2)	高台は外方にへの字状に張り内し、端部は内傾する。	右回転撫で。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	胎土：0.5以下B+C+D+E 焼成：1 色調：2.5 Y7/3浅黄 残存：27%
8	高台付 須恵器	高台径 (8.1)	高台はへの字状に大きく張り、端部が厚く端面は沈線を巡らせ外傾する。	右回転撫で。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	胎土：0.8以下B+C+D 焼成：5 色調：N4/0灰 残存：25%
9	蓋 須恵器	口径 16.0 高 2.6	天井部は丸く、口縁部は丸く折り返えされ、内側に沈線を巡らせる。	右回転撫で4周。摩滅によって整形痕不明瞭。末野産	胎土：0.9以下B+C+D+E 焼成：1 色調：7.5 YR6/6橙 残存：60%
10	壺 須恵器	口径(19.8)	口縁部は外反し、口唇部は上方に尖り、内側に瘤みを持つ。端面には沈線が巡る。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.3以下B+C+H 焼成：5 色調：N4/0灰 残存：13% 床
11	壺 須恵器	口径(18.6)	10に類似するが薄い。端面には沈線がない。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C多 焼成：5 色調：5B5/1 青灰 残存：11%
12	台付壺 土師器	脚径(10.9)	脚端部は下方に垂れ下がる。	脚端部横撫で。底部外面上→下へ窓削り。内面窓撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：5YR6/6 橙 残存：底80%
13	壺 土師器	口径(13.7)	直立するコの字状口縁で、口唇は僅かに内凹する。厚手。	口縁部は3段の横撫でを、胴部は右→左への窓削り。内面は右→左への窓撫で。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：2.5 YR6/6橙 残存：30%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
14	甕 須恵器	口径(27.0)	大きく外反する口縁で、口唇は上下に丸く突き出す。 端面には瘤みを巡らす。	右回転撚で。 末野産	胎土: 0.3 以下 B+C 烘成: 5 色調: 5 P B 6/1 青灰 残存: 8% 床



第142図 第85号住居跡出土遺物

第86号住居跡（第143図）

25—1ム区に位置し、第85号住居跡に近接する。規模は4.0×3.3m、深さ0.26mを測る。形態は不整長方形で、主軸はN-81°30'—E、床標高は74.64mである。

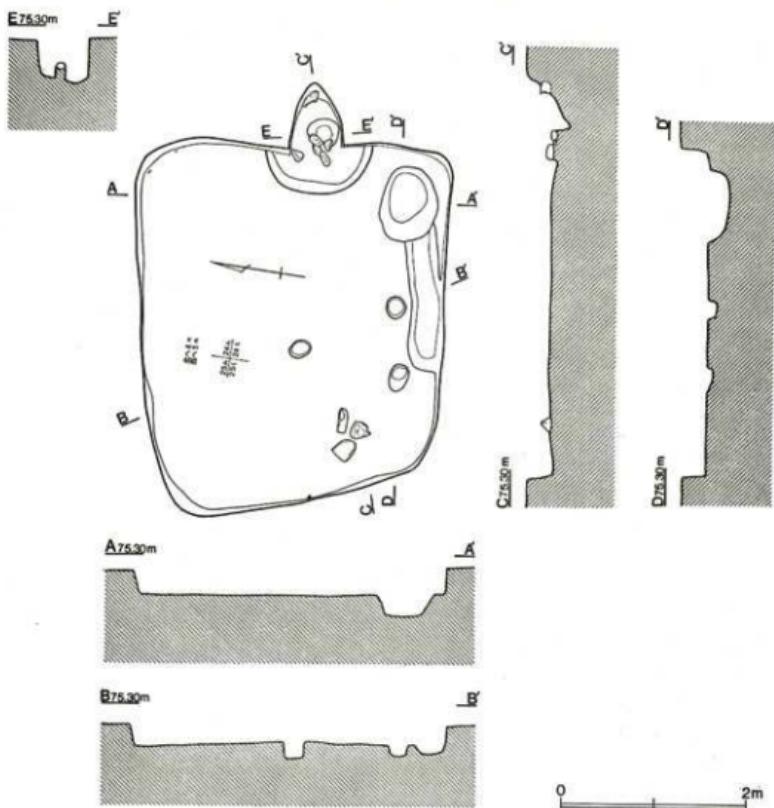
竈は東壁中央にあり長さ1.2×幅0.55mで、焚口は深く、煙道へ急傾斜で立ち上がる。床には15cm大の石が数個見られる。床面南東隅に椭円形の貯蔵穴がある。貯蔵穴から西へ、壁に沿って溝が

走る。柱穴は確認できなかった。

遺物は竈内から壺(1)、土器窯(5)が、竈脇床面から高台付塊(2)、窯(4)が、床面から高台付塊(3)が出土した。

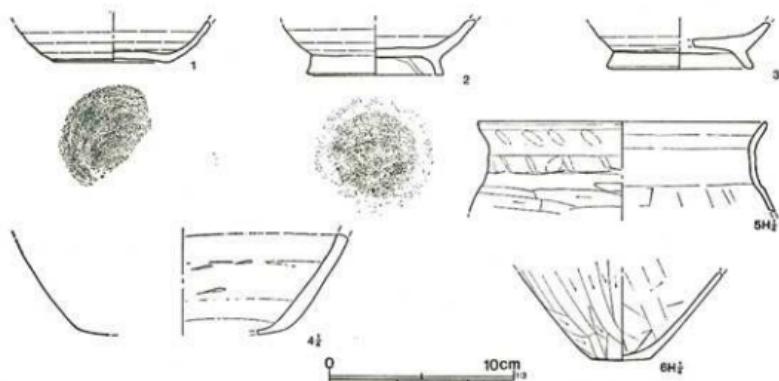
第86号住居跡出土遺物（第144図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	底径 6.2	やや上げ底で、体部は丸い。	右回転拂で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：B+C+E 焼成： 4 色調：10 YR 6/1 福灰 残存：55% 窯
2	高台付 塊	高台径 7.5	高台は端正で薄く、端部で広がり端面が水平になる。	右回転拂で。底部右回転糸切り。高台内面に火押あ	胎土：0.4以下 B+C 焼成：3 色調：10 YR 6/1



第143図 第86号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付 塊	高台径 (8.0)	高台はハの字状に広がり、端面が摩滅のため丸くなる。	右回転撫で。右回転撫で。末野産	胎土: 0.6 以下 B+C+D+E 焼成: 1 色調: 2.5 Y7/2 灰黄 残存: 27% 床
4	甕 須恵器	底径(15.0)	体部の厚さに比べ底部は薄い。	右回転撫で。	胎土: 0.8 以下 B+C+D+E+H 焼成: 1 色調: 5Y7/1 灰白 残存: 25% 床
5	甕 土師器	口径(20.6) 底径 4.2	接合しないが遺出土で、同一個体と考えられる。口縁は直立するコの字状口縁で、口唇は肥厚し外反する。	口縁 2段の横撫での後、肩部右→左へ、下位は上→下への籠削り。内面は右→左への籠撫で。	胎土: 微A多+E+F 焼成: 4 色調: 2.5YR5/6 明赤褐 残存: 30% 床



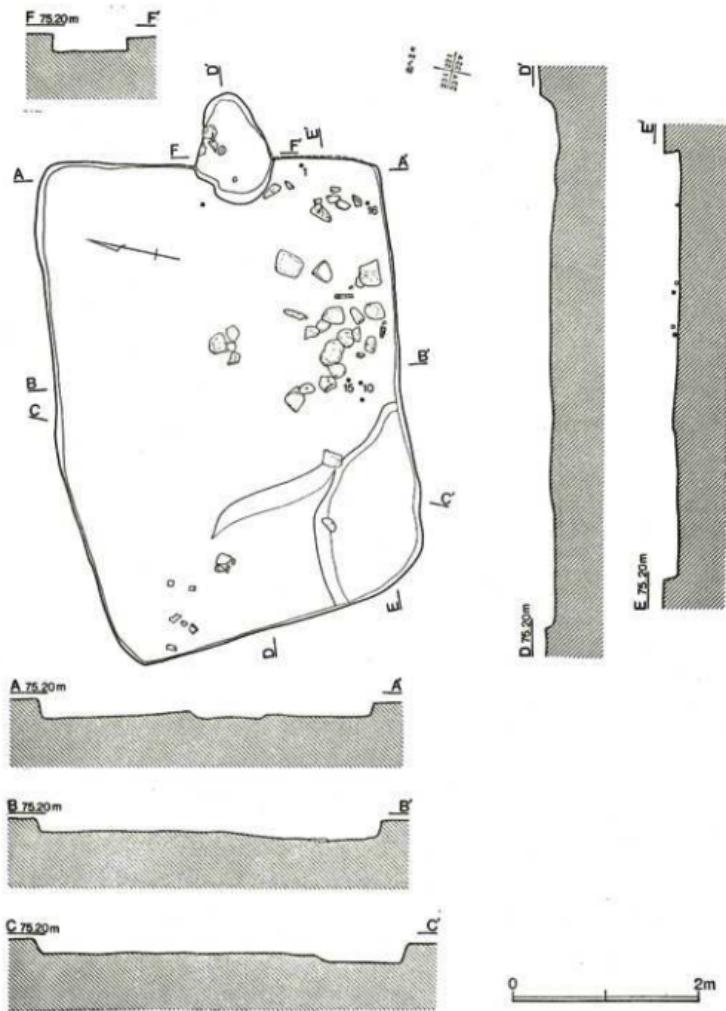
第144図 第86号住居跡出土遺物

第87号住居跡（第145図）

23—ミ区に位置し、第93住居跡の上方につくられる。規模は5.26×3.74mで、深さは0.18mである。形態は不整正方形で、主軸はN-75°30'-E、床標高は74.93mである。

竈は東壁中央にあり、長さ1.2×幅0.85mである。床面の南東隅には浅い落ち込みがあり、南半部には多量の石が分布する。柱穴はない。

遺物は竈内から甕(1)・(2)・(3)・(4)・(6)、塊(7)、高台付塊(8)・(9)・(10)・(11)、皿(2)・(3)、鉢(4)、土師器甕(5)、鎌(7)、不明鉄器(8)が出土する。(10)・(11)・(12)は鉄滓が付着するが、(11)は内面に砂鉄が見られるため、砂鉄容器と考えられる。鉄滓は4.24kgと羽口が4片出土する。



第145図 第87号住居跡

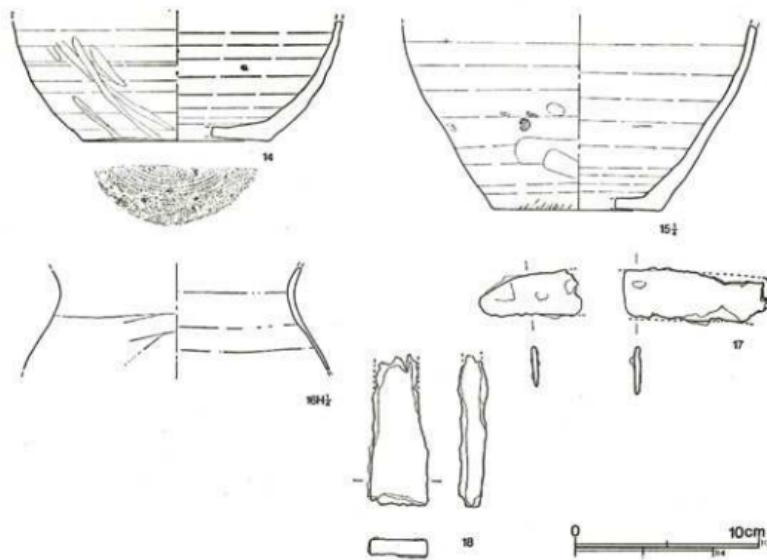
第87号住居跡出土遺物（第146・147図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 11.9 底径 5.8 器高 3.3	体部中位から外反が始まる。指差し入れ痕明顯である。体部上位まで離した糸が走り、糸目を残す。	右回転撲で。底部右回転糸切り。 東野産	胎土：0.3以下 B+C+E 多 焼成：3 色調：N6/0 灰 残存：80% 床
2	杯 須恵器	口径 12.5 底径 6.0 器高 3.5	体部は緩やかに丸味を持つ立ち上がる。器内の厚さが不均一。	右回転撲で6周。底部右回転糸切り。 東野産	胎土：0.7以下 B+C+D+E 多 焼成：1 色調：5 Y 6/2灰オーライプ 残存：90% 床
3	杯 須恵器	口径 12.6 底径 5.9 器高 3.8	体部中位で屈曲し外反する。1と同様体部に糸切りの際の糸目が残る。	右回転撲で8周。底部右回転糸切り。 東野産	胎土：0.5以下 B+C+E 焼成：3 色調：2.5Y6/1 黄灰 残存：50% 床
4	杯 須恵器	口径 11.6 底径 7.1 器高 4.4	厚手で底部が広く、体部はあまり開かない。口唇部は薄くなる。摩滅顯著。	右回転撲で3周。底部右回転糸切り後、周辺手持ち範削り。整形不明瞭。東野産	胎土：0.5以下 B+C+D+H 多 焼成：1 色調：10 Y R 7/4にい黄橙 残存：50%
5	杯 須恵器	口径(13.6) 底径 6.5 器高 3.4	平たくやや大振りである。口縁は外反する。	右回転撲で4周。底部右回転糸切り。焼成惡く器面剥離が著しい。 東野産	胎土：B+C+E 焼成：2 色調：5 Y 6/1灰 残存：60% 覆土
6	杯 須恵器	底径 6.7	体部は丸味を持つ。	右回転撲で。底部右回転糸前引き切り。 東野産	胎土：B+C+D+E 焼成：4 色調：5 Y 5/1灰 残存：底部 100% 床
7	塊 須恵器	口径(14.8) 底径(7.2) 器高 6.1	台耕地では塊は高台が付くが、高台のない例。口唇は外反し玉縁状に肥厚する。	右回転撲で6周。底部右回転糸切り。焼け歪み、作りが悪い。 南北企窓	胎土：0.4以下 B+C+D 1 (1cd-2) 焼成：4 色調：10 Y 5/1灰 残存：40% 床
8	高台付 塊 須恵器	口径 14.0 高台径 7.8 器高 6.0	高台はハの字状に大きく開き、端面は外傾する。体部は直線的に外傾し、口唇で外反する。燒成目顯著。内面使用により平滑となる。	右回転撲で8周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外回転撲で。 東野産	胎土：0.8以下 B+C+D+E 多 焼成：5 色調：N 5/0灰 残存：80% 床
9	高台付 塊 須恵器	口径 14.0 高台径 7.8 器高 6.2	8と類似する作りである。	右回転撲で9周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外回転撲で。 東野産	胎土：0.6以下 B+C+E 焼成：5 色調：2.5Y5/2 暗灰黄 残存：50% 床
10	高台付 塊 須恵器	口径(15.5) 高台径 8.3 器高 7.8	高台はハの字状に開き、端面に沈線を巡らし内傾する。体部は直線的に立ち上	右回転撲で12周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後内外回転撲で。 東野産	胎土：0.6以下 B+C+E 多 色調：N 5/0灰 残存：40%



第146図 第87号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			がる大振りの施である。高台内側に鉄滓付着する。		
11	高台付 塊須恵器	口径(15.3) 底径 7.8 現高 6.5	高台が剥落する。口唇は僅かに外反する。	右回転拂で11周。底部右回転まわし糸切り。高台張りつけ後内外回転拂で。 末野産	胎土: 0.6 以下 B+C+E 焼成: 5 色調: 5Y6/1 灰 残存: 高台欠60% 床
12	皿 須恵器	口径 15.1 底径 6.6 器高 2.1	体部は直線的に開く。	右回転拂で14周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土: 0.2 以下 B+C+E 焼成: 5 色調: 2.5GY 6/1 灰オリーブ 残存: 65% 床
13	皿 須恵器	口径(16.3) 底径 (5.5) 器高 2.6	第60号住居跡に類似形態の蓋が見られ、比較するに13は口唇端部に底みをつくるが、口唇内側には身と合わせる段がないため皿とした。しかし蓋の可能性も残る。	右回転拂で5周。底部右回転糸切り後、天井部最上位を削る。 末野産	胎土: 0.4 以下 B+C+D 焼成: 3 色調: 2.5Y7/2 灰黄 残存: 30% 覆土
14	鉢 須恵器	底径(10.1)	体部は丸く内凹して立ち上がる。内面に鉄滓付着。	右回転拂で7周+α。底部右回転糸切り。外面に火葬痕明瞭。 末野産?	胎土: 1.1 以下 B+C+D 焼成: 5 色調: 7.5YR 5/1褐灰 残存: 30% 床
15	甕 須恵器	底径(12.0)	体部は外傾して立ち上がるが上位で内凹する。外面に鉄滓付着。	右回転拂で8周+α。底部笠削り。体部下位回転笠削り。 末野産	胎土: 0.6 以下 B+C 烧成: 5 色調: N3/0暗灰 残存: 30% 瓶
16	甕 土師器	頸部径 (16.7)	胴部から口縁へは緩やかに外反する。	二次加熱により内外摩滅著しく整形不明瞭。	胎土: 微A多+D+E+F +G+H 烧成: 2 色調: 7.5YR7/4Kにぶい橙 残存: 25% 床
17	錫 鉄製品	身幅 2.6	2片に折れ破損が著しい。厚さは基部の付近で 0.5 mm である。切先付近はやや曲り丸くなるが、旧態を留めているか不明である。	鍛造。反対側に長軸に沿って木目が付着する。	重量: 31.7g 床
18	板状鉄 製品	現長 8.2 幅 3.1 厚 0.85	厚い板状であり、断面長方形となるが、刃はない。上方が狭くなる。未製品の可能性もある。	鍛造?。	重量: 80.77g 床



第147図 第87号住居跡出土遺物(2)

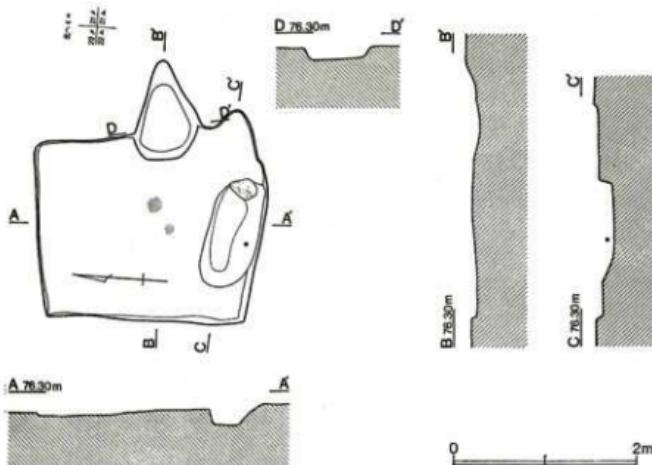
第88号住居跡（第148図）

22—×区に位置し、第89号住居跡に近接する。規模は $1.92 \times 2.5m$ 、深さは $0.22m$ である。形態は不整方形で、主軸はN—89°—E、床面高は75.93mである。

竈は東壁中央にあり、長さ $1.05m \times$ 幅 $0.7m$ である。床面南壁脇に梢円形の浅い掘り込みがある。中央に僅か鉄滓が分布する。遺物は覆土中から壺(1)・(2)、鉄滓付着甕(4)、鉄滓 $590g$ 、羽口片。

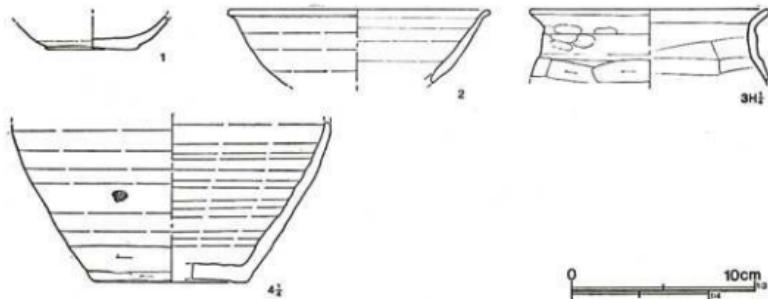
第88号住居跡出土遺物（第149図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	底径 5.1	指差し込み部が明瞭。	右回転撲で。底部右回転糸 切り。 末野座	胎土： 0.7 B + C + D + E 焼成：3 色調： $7Y5/1$ 灰 残存：底完 覆土
2	壺 須恵器	口径(14.4)	口唇部は短く外反し、玉縁 状になる。	右回転撲で。 末野座	胎土： 0.8 以下 B + C + H 焼成：2 色調： $5YR5/8$ 明赤褐 残存：25% 覆土
3	甕 土師器	口径(17.2)	やや内傾するコの字状口縁 で、やや厚手である。二次 加熱を受ける。	口縁2段の横撲での後、胴 上位を右→左へ範削りす る。内面は範撲で。	胎土：微A多 + E + F + G + H 烧成：4 色調： 5 $YR5/8$ 明赤褐 残存： 20 % 覆土



第148図 第88号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	鉢 須恵器	底径(11.1)	胴部は外傾し、上位で内凹する。外面胴部に鉄滓付着する。	粘土帶積み上げ後、右回転撲で。底部笠削り。体部最下位は回転笠削り。内面底部に指頭痕明顯。末野塗	胎土：0.3以下B+C+E 焼成：2 色調：10YR5/3 にぶい黄褐 残存：30% 覆土



第149図 第88号住居跡出土遺物

第89号住居跡（第150図）

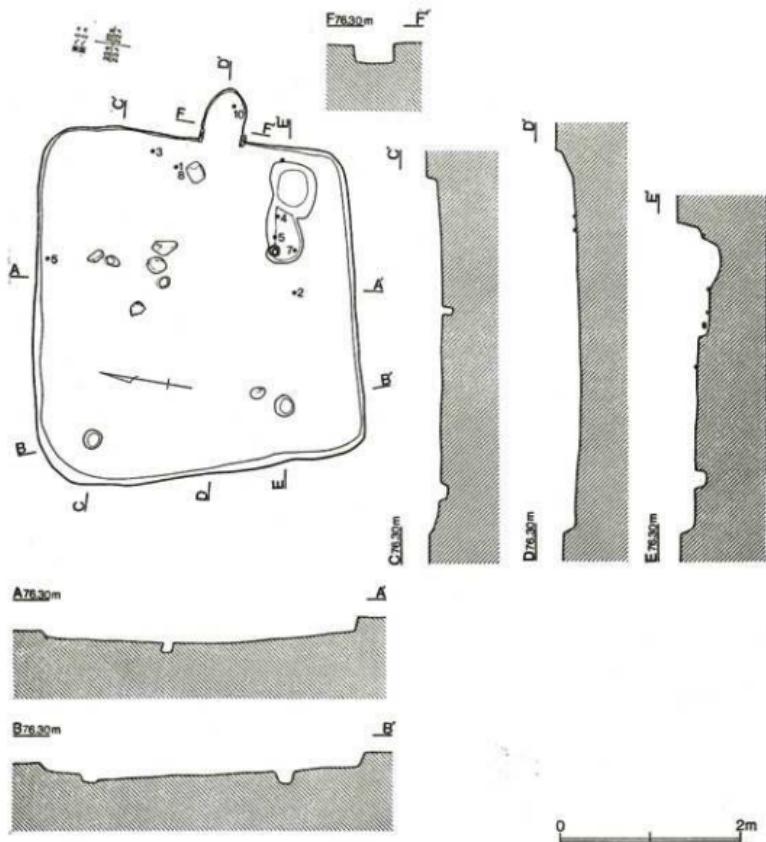
22-メ区に位置し、第88号住居跡に近接する。規模は3.89×3.57m、深さは0.3mである。形態は北壁の長い台形で、主軸はN-82°30'-Eで、床標高は75.71mである。

竈は東壁右寄りに位置し、長さ0.6×幅0.45m、焚口袖には石が使われている。南東隅には貯蔵

穴がある。床には約15cmの石が數個散乱する。

柱穴は西壁沿いに浅いピットが2本存在しており、可能性が高い。

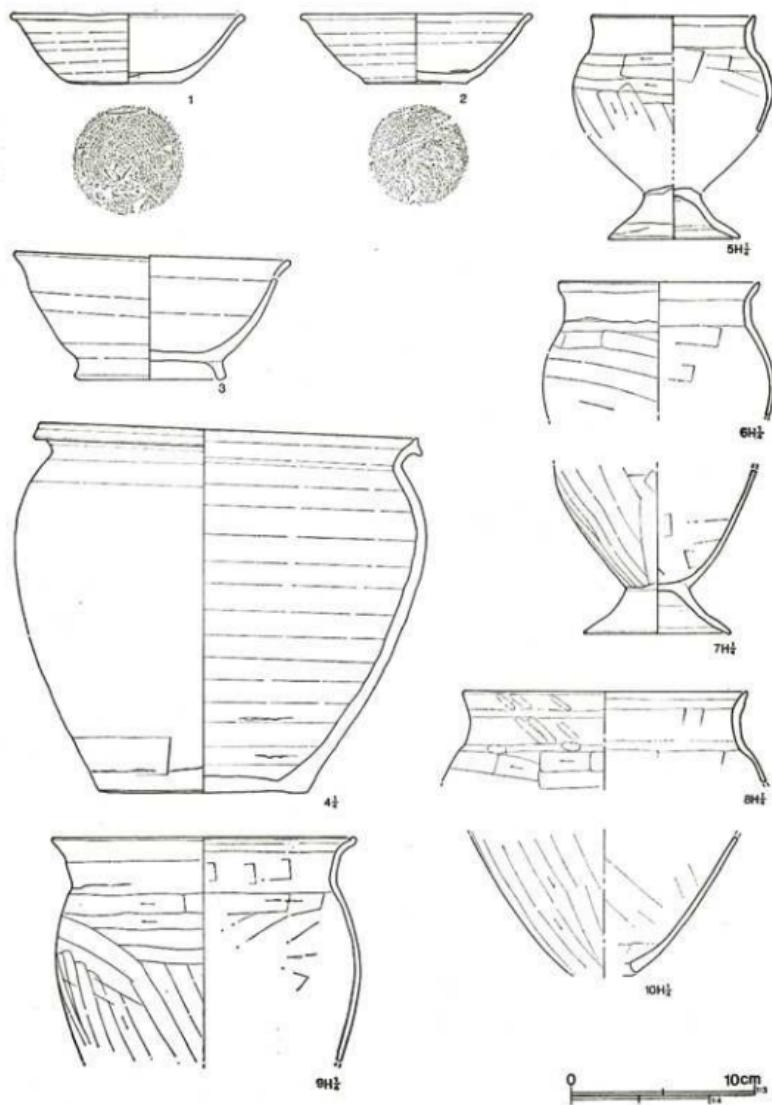
遺物は竈内から土師器甕(8)・(9)が、竈西から壺(1)、高台付塊(3)、土師器甕(8)が、貯蔵穴南には壺(2)、甕(4)、土師器台付甕(5)・(7)などが出土する。他に鉄滓が160kg出土する。



第150図 第89号住居跡

第89号住居跡出土遺物（第151回）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 12.7 底径 6.2 器高 3.8	口縁は緩やかに外反する。 口唇部は玉縁状になる。	右回転撫で 6周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.7以下B+C+E 焼成：3 色調：2.5Y5/2 暗灰黄 残存：80% 床
2	杯 須恵器	口径 12.6 底径 5.6 器高 3.8	指差し込み痕が明瞭で、口唇は外反する。	右回転撫で 5周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.7以下B+C+D+E 焼成：2 色調：5Y6/1灰 残存：75% 床
3	高台付 杯	口径 15.1 高台径 8.3 器高 6.9	高台はハの字状に開き、端部は外傾する。口唇は外反する。 胎土分析No.7	右回転成形後、左回転撫で。底部右回転糸切り。高台付着後回転撫で。末野産	胎土：0.5以下B+D多 焼成：2 色調：2.5Y7/1 灰白 残存：60% 床
4	鉢 須恵器	口径(27.3) 胴径(29.8) 底径 15.1 器高 26.0	平底から内側気味に開き、端部は外傾する。口唇は外反する。 胎土分析No.7	粘土帶積み上げ後、右回転撫で。内外面摩滅。末野産	胎土：1.1以下B+C+D+E 焼成：2 色調：5Y6/1灰 残存：60% 床
5	台付甕 土師器	口径(11.8) 胴径(14.3) 脚径 9.3	脚部はハの字状に開くが中位で開きが大きくなる。胴部は丸く、口唇の開かないコの字状口縁に至る。	口縁および胴部横撫で。胴上位右→左へ、下位上→下への箇削り。内面は右→左への箇撫で。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：3 色調：5YR6/6橙 残存：上半部45%、脚部80% 床
6	甕 土師器	口径 14.3 胴径 16.5	丸い胴部から、直立するコの字状口縁に至る。	口縁は2段の横撫での後、胴上位は右→左への箇削りを行なう。内面は右→左への箇無で。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：7.5YR6/6橙 残存：80% 床
7	台付甕 土師器	脚径 10.5 現高 11.6	6と同一個体の可能性あり。胴部は脚に向って細く窄まり、脚はハの字状に開くが、中位でさらに開く。	胴部外面は上→下への箇削り、内面は右→左への箇撫で。脚部は横撫でが行なわれる。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：3 色調：7.5YR6/6橙 残存：70% 床
8	甕 土師器	口径(20.4)	胴部からやや内傾するコの字状口縁に至る。	口縁は2段の横撫での後、胴部上位を右→左へ箇削りする。内面は木口撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：2.5YR6/6橙 残存：45%床・甕
9	甕 土師器	口径 22.0 胴径 21.9 現高 16.0	口縁は外反するコの字状口縁で、口唇端部は内側へ巻き込む。	口縁は2段の横撫での後、胴上位を右→左へ、下位を左上→右下へ箇削りする。内面は箇撫でを行なう。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：5YR6/6橙 残存：上半75% 床
10	甕 土師器	現高 9.8	胴部は下方へ直線的に窄まる。	外面は上→下への箇削りで内面は箇撫でが施される。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：5YR5/4にぶい赤褐 残存：25% 甕



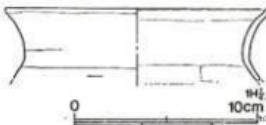
第151図 第89号住居跡出土遺物

第90号住居跡（第153図）

22—モ区に位置するが、規模は $2.56 \times 2.55\text{m}$ 、深さ 0.17m を測る。形態は正方形で、主軸はN-86°30'-E、床標高は 74.77m である。

竈は東壁右寄りにあり、長さ $0.6 \times$ 幅 0.43m である。床面には北西隅に深さ 0.2m の下整形の落ち込みがある。

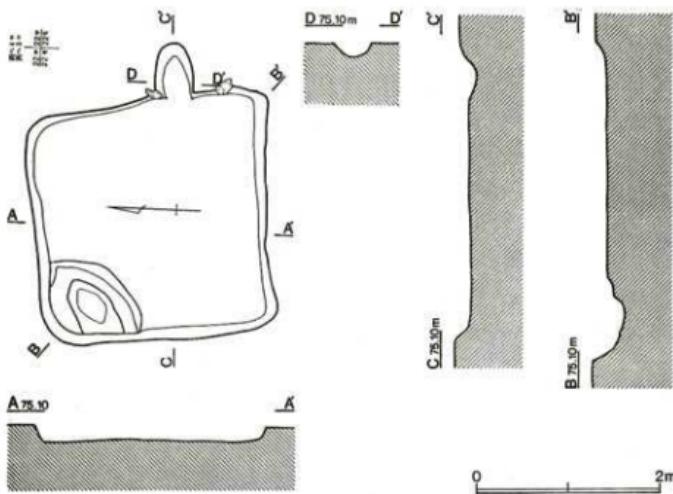
遺物は土坑の中から土師器の甕(1)が1点出土する。



第152図 第90号住居跡出土遺物

第90号住居跡出土遺物（第152図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 土師器	口径(19.0)	口縁は大きく外反し、口唇端部が内側へ僅かに曲る。	口縁横撫での後、胴部右→左への削り。外面摩滅著しく、整形不明確。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：5 YR 6/6 機 残存：30% 土坑



第153図 第90号住居跡

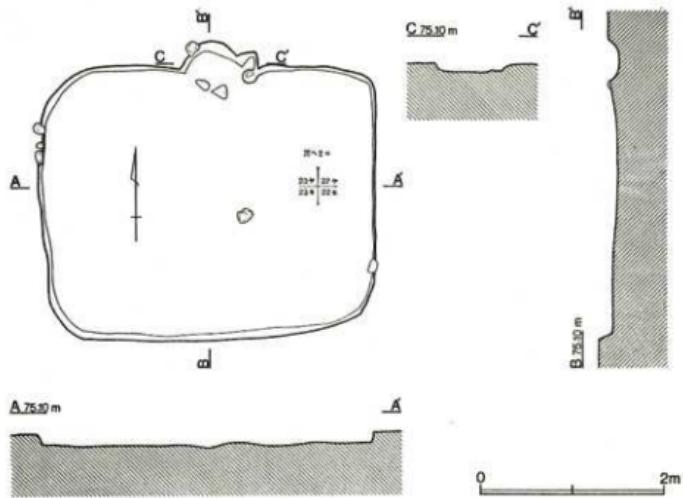
第91号住居跡（第154図）

23—モ・ヤ区に位置する。規模は $2.99 \times 3.69\text{m}$ で、深さ 0.17m を測る。

形態は隅丸長方形で主軸はN-0°30'-E、床標高は 74.71m である。

竈は北壁中央にあるが、浅いため不明確である。長さ $0.5 \times$ 幅 0.8m で、周辺に石が散乱する。

出土遺物は、竈内から壺(1)・(2)が出土する。



第154図 第91号住居跡

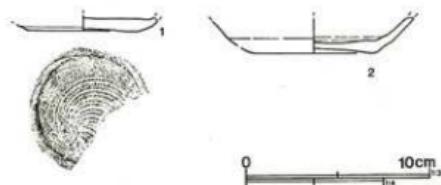
第91号住居跡出土物（第155図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径 7.1	底部と体部の境は、削りによって丸くなる。	右回転拂で。底部右回転糸 切り後、周辺右回転削り 2周。 南北企座	胎土：B+C+I (1cm=2) 焼成：5 色調：5Y 5/1 灰 残存：底部70% 電床
2	杯 須恵器	底径 6.5	上げ底で、指差し込み部が明瞭。	右回転拂で。底部右回転糸 切り。摩滅顯著。末野産	胎土：0.2以下 B+C+D +E 烧成：1 色調：5 Y 7/1 灰白 残存：底部50% 電床

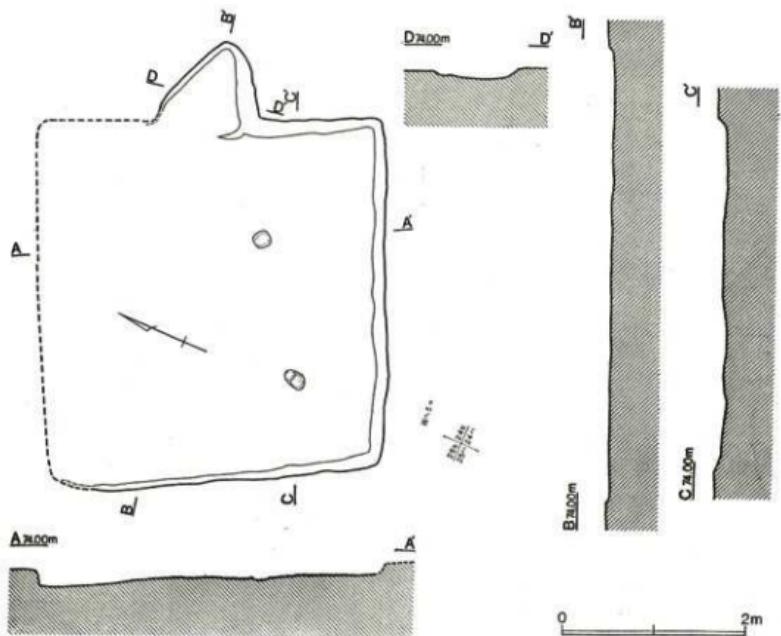
第92号住居跡（第156図）

25—ワ区に位置し、規模は3.80×3.41mで、深さは0.2mである。形態は長方形で主軸はN-65°30'-E、床標高は73.56m。竈は東壁中央にあり、長さ1.01×幅1.1mを測るが、浅いため不明瞭である。柱穴はない。

遺物は杯(1)、蓋(2)、壺(4)、甕(3)、土師器甕(5)・(7)、土師器台付甕(6)および、製鉄関係の鉄滓400g、羽口1個体と破片が多く出土する。



第155図 第91号住居跡出土物

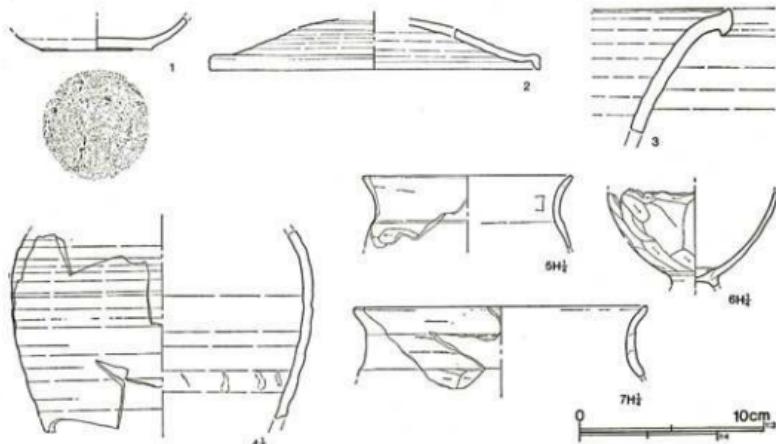


第156図 第92号住居跡

第92号住居跡出土遺物（第156図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	底径 6.0	指差しへ込み部が明瞭。	右回転撚で。底部右回転難し糸切り。 末野産	胎土：0.7以下B+C多 焼成：5 色調：5P B4/1 暗青灰 残存：底部完
2	蓋 須恵器	口径(17.9)	口唇は強く屈曲して下方へ垂れ下がる。	右回転撚で5周。天井部を右回転範削りする。内面中央に火拂あり。南北企産	胎土：B+C+I 焼成： 5 色調：5P B4/1暗青 灰 残存：25%
3	甕 須恵器	口径(40.5)	口縁は大きく外反し、口唇はT字状に上下に尖る。器内の色はセピア色を呈する。	粘土帶積み上げ、右回転撚で。 南北企産？	胎土：0.3以下B+C 焼成： 5 色調：N 4/0灰 残存：5%
4	壺 須恵器	胴径(21.5)	胴部中位で、上方は窄まり始める。表に輪縫目顯著。	粘土帶積み上げ、右回転撚で。特に胴上半は細かな回転撚で。 南北企産？	胎土：B+C少 焼成：3 色調：2.5Y R5/1赤灰 残存：胴35%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕 土師器	口径(14.9)	外反する口縁である。	口縁横撫での後、胴部を右→左へ窓削りする。内面は窓撫でを行なう。	胎土：微A多+ F 焼成：3 色調：5 YR 5/4にぶい赤褐色 残存：口縁25%
6	台付甕 土師器	胴径 12.1 基部径 3.2	胴部は丸く、基部で窄まる。	底部は最後に粘土を押し込んで成形しているようである。胴外面左上→右下への窓削り。内面右→左への窓撫で。	胎土：微A多+ 0.6以下D+F 焼成：3 色調：5 YR 6/6 橙 残存：胴下半部70%
7	甕 土師器	口径(20.9)	コの字状口縁で大形甕である。口縁は厚手。	口縁2段の横撫での後、胴部右→左の窓削り。	胎土：微A+F+G 焼成：3 色調：5 YR 7/6 橙 残存：口縁20%



第157図 第92号住居跡出土遺物

第93号住居跡（第158図）

22~24一区に位置するが、東に接して第2号製錬炉が存在しており、互いに有機的関連を持つ遺構である。規模は全長21.17mあり、幅は3.5~4.45mの、不整円形の遺構がいくつも連結した形となる。横断面を見るに、最低3つの掘り形があり、前後関係も東がより古いと考えられる。床には粘土質の土が貼ってあり、皿状の掘り形を埋めた状態となる。覆土は多くの鉄滓・炭・焼土が混入する。竈・柱穴は持たず、住居と言えるか疑問であるが、出土遺物と遺構の状況から製鉄関係の工房跡と考えられる。

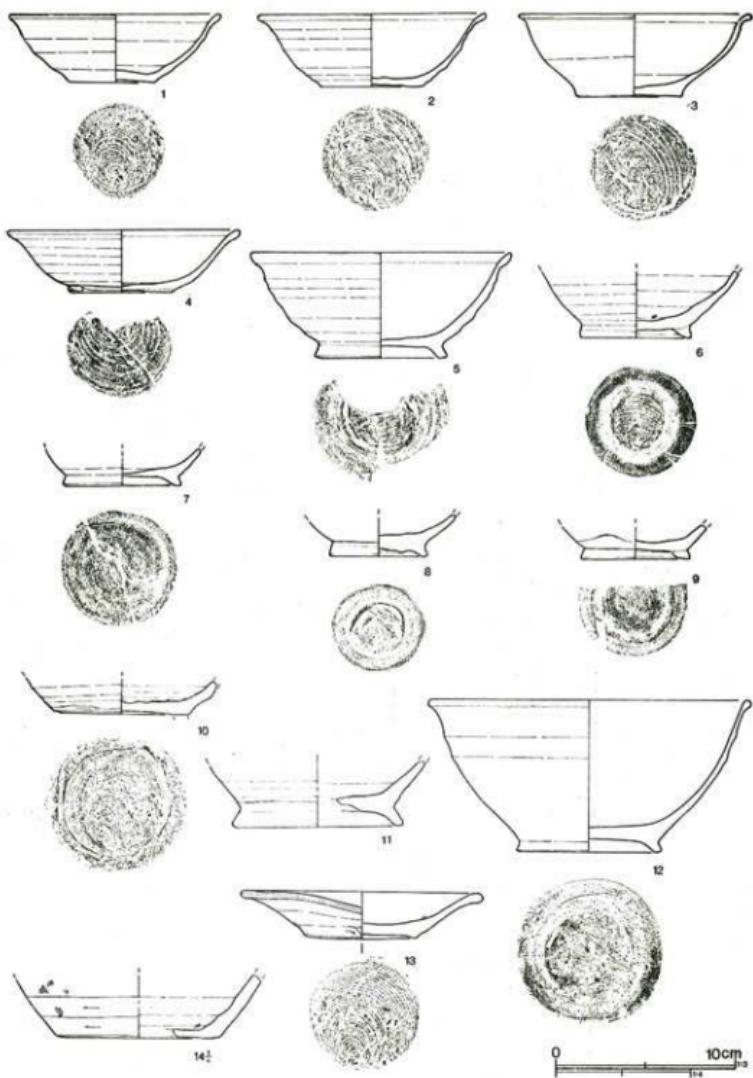
出土遺物は坏類の他、獸脚の鉄型(1)・(2)、砂鉄付着土器(3)および鉄製品が多く、獸脚(2)、鉄造容器(4)などが出土した。鉄滓は1.48g、羽口片・炉壁片も出土する。

第93号住居跡出土遺物（第159・160図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	口径 11.8 底径 4.8 器高 3.8	指差込み部で外反し、口唇は肥厚し外反する。焼き歪む。	右回転撲で5周。底部右回転離し糸切り。 東野産	胎土：B+C多 焼成：5 色調：10B G 3/1暗青灰 残存：100% 床
2	壺 須恵器	口径(12.8) 底径(5.7) 器高 4.0	口縁部は大きく外反し、口唇は肥厚する。	右回転撲で7周。底部右回転離し糸切り。粘土は粘りがある。 南北企産？	胎土：B+C 焼成：5 色調：N 5/0 灰 残存：40% 床
3	壺 須恵器	口径 13.0 底径 5.9 器高 4.6	底部から大きく外反し、口唇では再び大きく外反する。内外面に小さな鉄滓付着。	右回転撲で。底部右回転離し糸切り。 東野産	胎土：微B・C・D少 焼成：3 色調：7.5Y7/2灰白
4	壺 須恵器	口径 13.0 底径 5.8 器高 3.4	指差し込み部で外反し、口唇で肥厚し、再び外反する。	右回転撲で7周。底部右回転糸切り。 東野産	胎土：B+C+E 焼成：2 色調：10Y R 6/4にぶい黄橙 残存：50%
5	高台付 塊 須恵器	口径(14.5) 高台径 7.3 器高 5.9	高台はハの字状に開き、端面が僅かに外傾する。口唇は肥厚する。	右回転撲で7周。底部右回転糸切り。高台内外回転撲で。 東野産	胎土：0.4以下B+C+E 焼成：2 色調：5Y R 6/3 にぶい橙 残存：35% 床
6	高台付 塊 須恵器	高台径 6.2	高台は小さく、ハの字状に開くが、先端は尖る。内面に小さな鉄滓付着する。	右回転撲で。底部右回転糸切り。高台内外回転撲で。 東野産	胎土：B+C 焼成：4 色調：7.5Y R 5/4にぶい褐 残存：底部 100%
7	高台付 塊 須恵器	高台径 6.6	高台は低くハの字状に開く。端部は内傾する。	右回転撲で。底部右回転糸切り。高台内外回転撲で。 東野産	胎土：B+C+E 焼成：1 色調：10Y R 6/2灰黄褐 残存：底部 100%
8	高台付 壺 須恵器	高台径 5.5	高台は小さく、ハの字状に開く。端部は丸い。高台は焼け歪む。	右回転撲で。底部右回転糸切り。内外面回転撲でを施すが、内が強い。 東野産	胎土：B+C+E+H 焼成：2 色調：7.5Y R 6/1 褐灰 残存：底部 100%
9	高台付 塊 須恵器	高台径 6.1	高台は小さく、ハの字状に開き低い。端面は内傾する。	右回転撲で。底部右回転糸切り。高台内外面を回転撲で。 東野産	胎土：B+C 焼成：5 色調：10Y 5/1灰 残存： 底部60% B区
10	高台付 塊 須恵器	底径 7.6	高台は剥れる。指差し込み部で外反。内面に鉄滓付着する。	右回転撲で。底部右回転糸切り。高台内外を回転撲で。 東野産	胎土：B+C+H 焼成： 5 色調：5P B 4/1暗青 灰 残存：底完 A区床下
11	高台付 塊 須恵器	高台径 (9.6)	高台はハの字状に大きく開き、高い。端面は内傾する。	右回転撲で。高台の内外を回転指撲で。 東野産	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：2 色調：10Y R 7/3 にぶい黄橙 残存：底部30% G区床

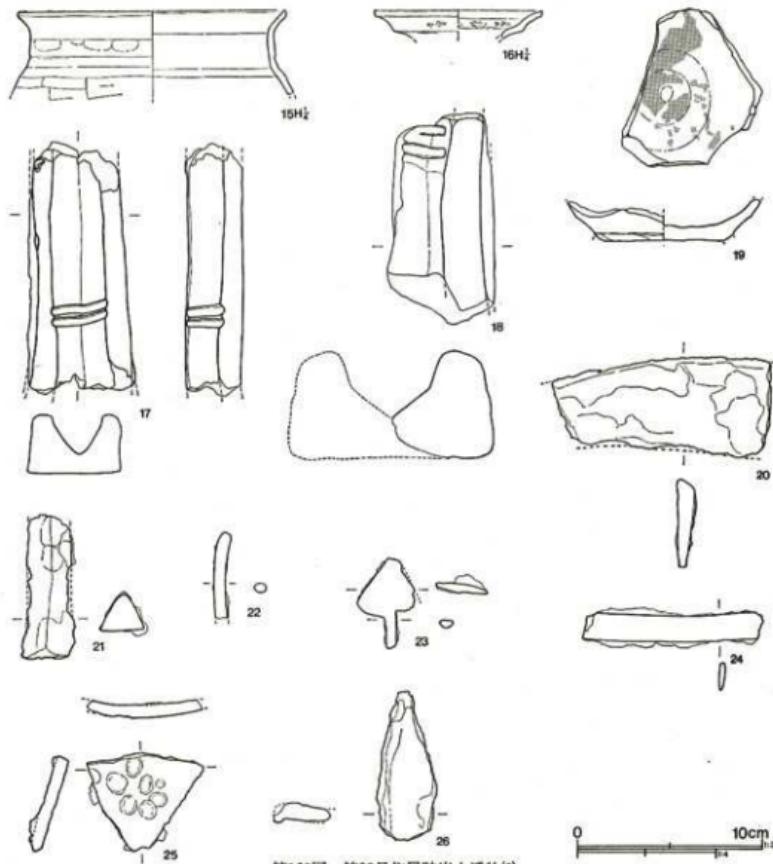


第158図 第98号住居跡



第159図 第93号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
12	高台付 壇 須恵器	口径(18.0) 高台径 8.1 器高 8.4	高台は体部に比べ短く、口唇は肥厚し大きく外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.5以下B+C+D+E多 烧成：2 色調：5YR6/6橙 残存：40% E区床
13	皿	口径 13.6 底径 6.4 器高 2.6	体部は大きく外反し、口唇は玉縁状に肥厚する。焼け歪む。一部鉄滓付着。	右回転撫で5周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：B+C 烧成：5 色調：5B4/1暗青灰 残存：70%
14	甕	底径 12.0 須恵器	平底から外傾して立ち上がる。内外面に鉄滓付着。	右回転撫で。底部回転範削り。	胎土：B+C+E 烧成：4 色調：10YR7/3にぶい黄橙 残存：25% B区
15	甕 土器	口径(19.0)	直立するコの字状口縁で、口唇は内側へ僅かに巻く。	口縁2段の横撫での後、胴部右→左へ範削り。内面は範撫で。	胎土：微A多+F 烧成：3 色調：2.5YR6/6橙 残存：口縁25%
16	壺 土器	口径(11.9)	中位に段を持つ口縁で、口唇は端面をつくる。	外面に刷毛目が施される。一部赤彩が見られる。五領期と考えられる。	胎土：微A+F+G+H 烧成：4 色調：7.5YR7/4にぶい橙 残存：20% B区床
17	獸脚鉢 現長 型 高 土製品 幅	13.6 3.1 4.8~ 5.6	内型の横断面はやや膨らむ三角形で、二本の沈線がある。脚端部は欠損するが、やや大きくなる。内面は還元吸炭する。2Iはこの形態の鉢型でつくられたであろう。	胎土を平らなところに押しつけ底をつくり、側面は指頭により成形。内型は平滑に仕上げられる。	胎土：0.4以下微A多+B+C+0.5以下黄白色砂質粘土塊多 烧成：3 色調：7.5YR7/4にぶい橙 残存：上端下端欠 C区床
18	獸脚鉢 現長 型 高 土製品 幅	11.4 5.7 (11.0)	横断面五角形となる。二本の沈線は幅が広い。鉄滓が付着する。内面は還元する。	粘土塊から作り出された型である。	胎土：微A多+H+モミガラ 烧成：2 色調：10YR7/3にぶい黄橙
19	高台付 壇 須恵器		高台、口縁が欠ける。内面割れ目に砂鉄、鉄滓が付着する。摩滅著しい。	右回転撫で。底部糸切り。 末野産	胎土：微白A+E 烧成：1 色調：7.5YR6/6橙 残存：底部60%
20	鎌	現長 11.9 身幅 5.3 背幅 0.9	身の厚い大振りの鎌である。両端が欠損する。	鍛造。	重量：147.09g
21	鉄製獸 脚 幅 高	現長 7.8 2.4 1.9	17から推定するに獸脚である。重量があり、鎌は塊状ではがれる。	鍛造。	重量：97.43g
22	棒状鉄 現長	4.6	一端は丸く旧態を呈する。	表面は平滑となる。	重量：6.33g



第160図 第93号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	製品	幅 0.65	横断面は卵形となる。		
23	鉄 剣	切先長 3.2 幅 (3.4)	短頭腹抜筑造正三角形式であるが、頭が薄い。	鍛造。	重量: 10.15g
24	刀子?	現長 9.9 身幅 1.4	厚い錯で覆われる。刀子とすれば細長い。	鍛造。	重量: 24.93g B区 分析資料
25	容器状器 鉄製品	厚 0.65	表面に円形の割れ頭著。重量がある。獸脚に付く容器であろう。	鍛造。	重量: 72.62g B区 分析資料

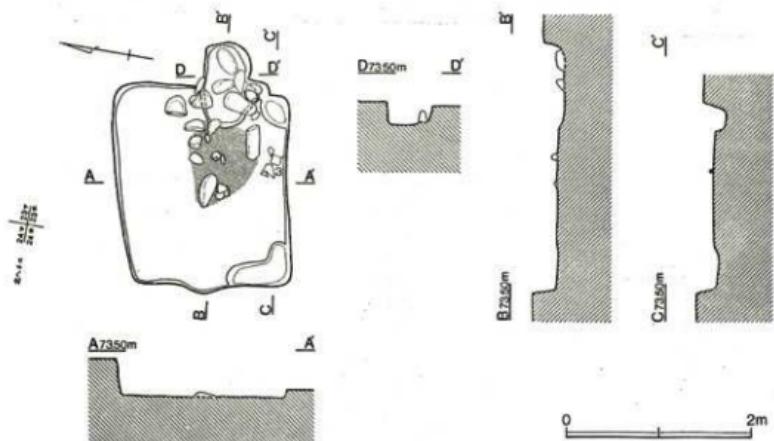
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
26	板状鉄 製品	現長 8.0	鋸で割れ、不整形である。 部分的に平らな面を持つ。		重量: 60.23g B区

第94号住居跡（第161図）

23—ホ区に位置し、第95号住居跡に近接し、第93号住居跡（工房跡）の下にある。規模は2.16×1.85m、深さ0.4mを測る。形態は長方形で、主軸はN-81°30'—E、床標高72.93mである。

窓は東壁右寄りにあり、長さ0.95×幅0.5mで窓道は垂直に立ち上がる。窓前方から中央にかけて大形の石とともに鉄滓が出土した。壁は垂直に立ち上がり、残存部で0.4mを測る。

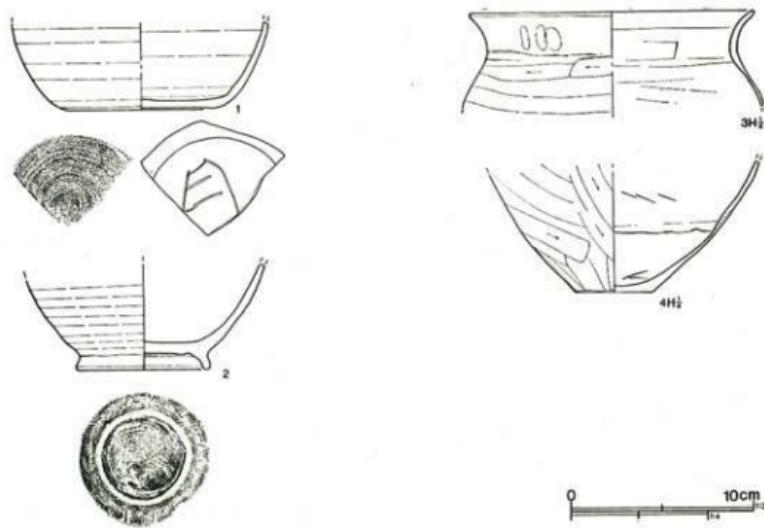
遺物は窓から焼(1)が出土するが、底部に「月」の篆書きがあり、第9号住居跡窓出土品と接合した。南壁際から土師器の甕(3)が出土する他、高台付塊(2)、土師器甕(4)がある。製鉄関連遺物として鉄滓が975g出土した。



第161図 第94号住居跡

第94号住居跡出土遺物（第162図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	塊 須恵器		第9号住居跡N.5と接合した。同一個体のため説明は第9号住居跡を参照。		窓出土
2	高台付 塊	高台径 7.4	高台はへの字に開き、端面は丸くなる。	右回転拂で9周+α。底部右回転糸切り。高台内外右	胎土: B+C+E 焼成: 2 色調: 2.5YR6/1赤灰



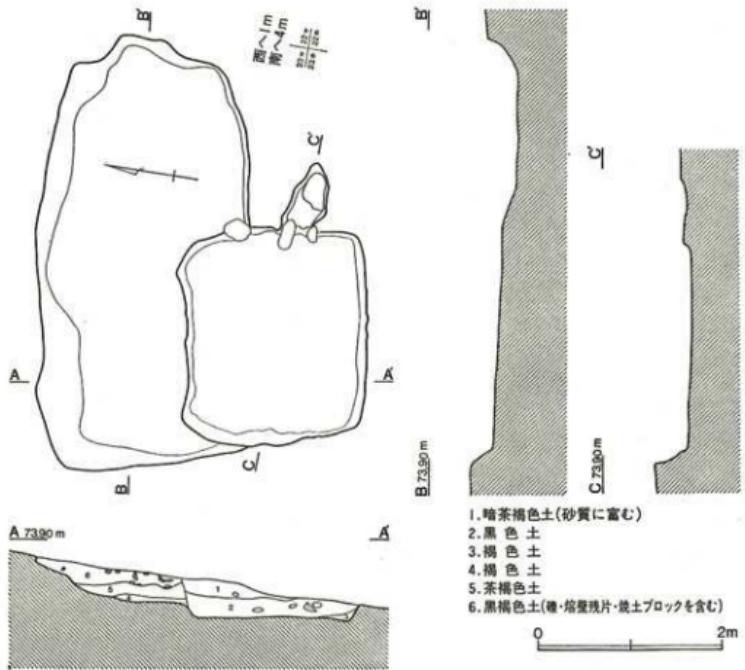
第162図 第94号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器 土師器			回転撚で。 末野産	残存: 口縁欠
3	甕 土師器	口径 20.5	口縁は大きく外反し、やや厚手である。	口縁 2段の横撚での後、胴部上位を右→左への窓削りする。内面は右→左へ窓撚です。	胎土: 粘 A多 + E + F + G + H 焼成: 4 色調: 5 YR 4/8 赤褐 残存: 60% 床
4	甕 土師器	底径 5.6	やや大きい平底から内窓気味に立ち上がる。	胴部外面上→下へ窓削りする。内面は窓撚で。胴下位に接合痕がある。	胎土: 粘 A多 + E + F + G + H 焼成: 3 色調: 5 YR 4/8 赤褐 残存: 下半部 50% 蔵

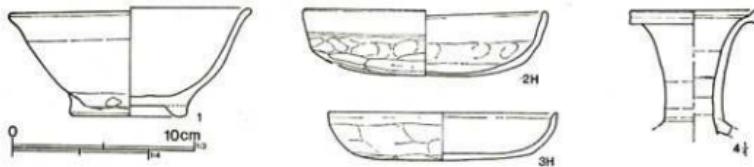
第95号住居跡（第163図）

23—ホ区に位置するが、第94号住居跡に近接し、第93号住居跡（工房跡）の下にある。規模は2.37×1.99mで、深さは0.39mである。形態は長方形で、主軸はN—81°—E、床標高は+72.92m。甕は東壁右側にあり、長さ1.02×幅0.4mで右袖に河原石が使われる。住居跡の上には不整長方形で隔壁・焼土ブロックを覆土とする掘り込みがあるが、それを切り込んで構築している。

出土遺物は、高台付环(1)、土師器环(2)・(3)、壺(4)が出土する。



第163図 第95号住居跡



第164図 第95号住居跡出土遺物

第95号住居跡出土遺物（第164図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	高台付 壺 須恵器	口径 13.4 高台径 6.4 器高 6.0	高台は太く低い。つくりも悪く、端部は丸くなる。口縁は大きく外反する。	右回転撫で。底部斜切り、摩滅のため不明瞭。胎土は練り込み風となる。末野産	胎土: 0.3 以下 B+C+E 多焼成: 2 色調: 5 Y 6/2 灰オリーブ 残存: 80% 胎土分析No. 8

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	壺 土師器	口径 13.5 器高 3.6	浅い丸底から緩やかに立ち上がり、口縁に至る。口唇は僅かに内側が窪む。	口縁内外横撫で。底部範削り。内面中央部横撫で。	胎土：微A・B・F少 焼成：3 色調：7.5YR7/4 ない橙 残存：50%
3	壺 土師器	口径 12.7 器高 2.6	浅い丸底で、丸く立ち上がるが、口唇は内側が外反し尖る。	内面全面撫で。外面口縁横撫での後、体部を2段、底径を一方向に範削りする。	胎土：微A+E+F 焼成：2 色調：7.5YR7/4 ない橙 残存：90%
4	壺 須恵器 頭部径 (4.3) 現高 9.0	口径(9.1) 頭部径 (4.3)	口縁は大きく外反し、口唇部で上下に尖りT字形となる。端面は浅く窪む。	粘土帶積み上げ後、右回転撫で。口縁部の接合は、胴部に乘せ、少し粘土を内側に巻く。 南比企産？	胎土：0.2以下B+C 焼成：5 色調：5PB5/1 青灰 残存：口縁40%

第96号住居跡（第165図）

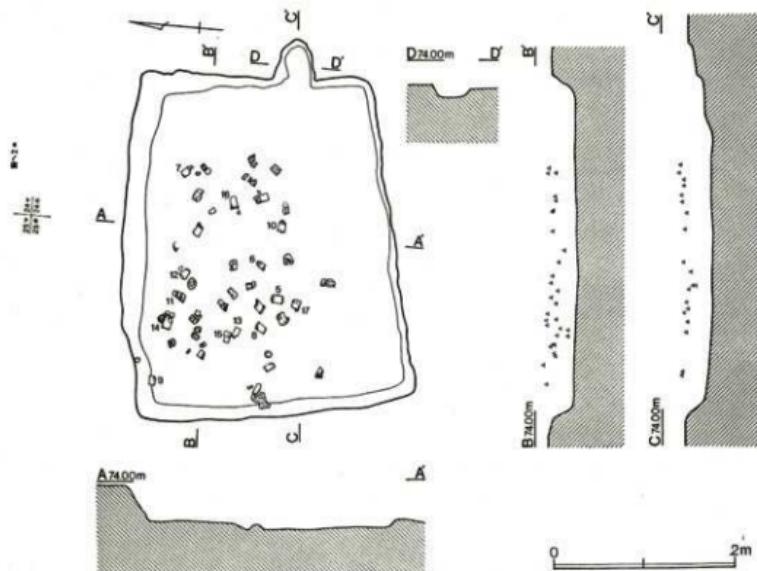
24・25・ホ区に位置し、第93号住居跡（工房跡）の下にある。規模は3.01×3.78mで、深さは0.31mである。形態はやや東壁が狭くなる長方形で、主軸はN-85°-Eで、床標高は73.53m。

龜は東壁右寄りにあり、長さ0.8×幅0.45mである。床には柱穴などの施設はない。

出土遺物で注目できるものは、覆土中から検出された、50点の羽口である。第93号住居跡（工房跡）が上にあることから、廃棄されたものを投げ入れたと考えられる。他に蓋(1)、鉄滓付着の甕(2)土師器甕(3)、釘(4)などが出土する。鉄滓は75gと少ない。

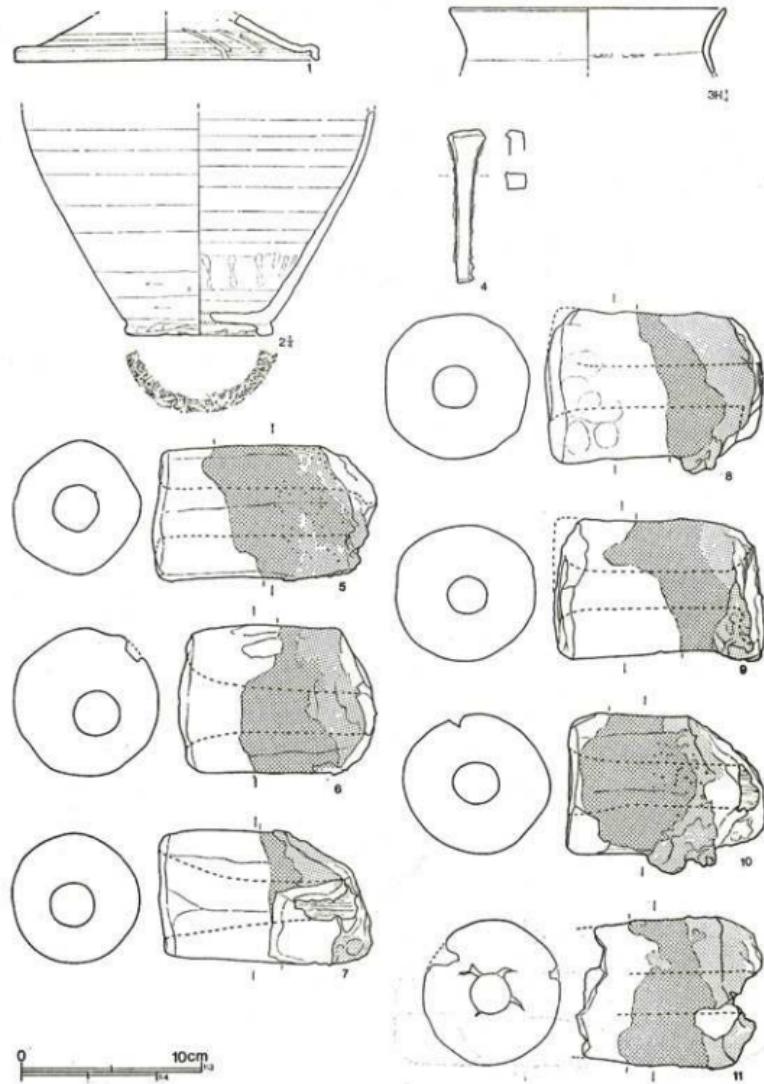
第96号住居跡出土遺物（第166・167図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	蓋 須恵器	口径(16.8)	口縁は強く屈曲して下方に垂れ下がる。口唇の内側は沈線状になる。	右回転撫で。内面に火燐が見られる。 南比企産	胎土：微B+C 焼成：5 色調：5PB4/1暗青灰 残存：20% 覆土
2	壺 須恵器 高台径10.8	胴径 25.7	高台は重みでつぶれ、端面に乾燥時の圧痕が残る。体部は外傾して直線状に延び上位で内彎する。鉄滓付着	粘土帶積み上げ後、右回転撫で。胴部下位は回転範削り。 末野産	胎土：0.6以下B+C 焼成：3 色調：7.5Y7/1灰白 残存：下半部40%
3	甕 土師器	口径(20.2)	緩やかにくの字状に折れ曲る。二次加熱。	口縁横撫で。摩滅著しい。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：2 色調：5YR6/6 橙 残存：22% 覆土
4	釘 鉄製品	現長 8.4	断面方形の角釘と考えられ。頭部は僅かな折り返しで作られる。頭部は幅広となり2.1cmを測る。	鍛造。	重量：34.42g

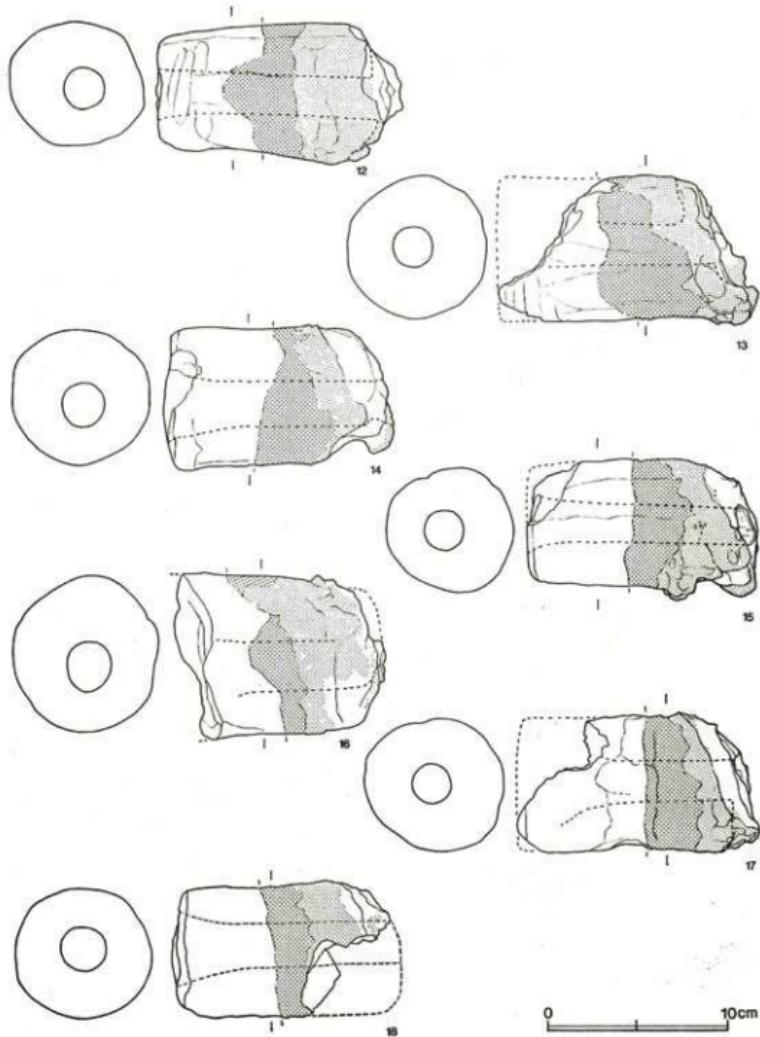


第165図 第96号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	羽口	全長 外径 孔径	12.5 7.4 2.4 高温のため口部が融解して垂れ下がり、黒色ガラス化する。蓮元部が広く発泡。	棒に巻き、板に押しつけ多面形をつくる。口部周辺に鉄滓付着。	胎土：B+F多+スサ多 残存：100%
6	羽口	全長 外径 孔径	11.1 8.1 2.5 短かく、孔部は基部で擦れ太くなる。口部は黒色ガラス化する。	棒に巻き、板に押しつける。口部周辺に鉄滓が付着する。	胎土：A多+E+スサ 残存：100%
7	羽口	全長 外径 孔径	11.8 7.2 2.4 口部は融解して上部を失う。孔部は基部で擦り減り太くなる。口部は黒色ガラス化。	棒に巻きつけ板に押しつける。口部周辺に鉄滓が付着する。	胎土：微A多+スサ 均質 残存：90%
8	羽口	全長 外径 孔径	12.2 7.9 2.3 基部が太く、孔部も擦り減って太い。口部は黒色ガラス化。	棒に巻きつけ、板に押しつけた後、外部を指で押し括されさす。鉄滓垂れ下がる。	胎土：多A+スサ 残存：95%
9	羽口	全長 外径 孔径	11.6 7.3 2.2 基部はやや太くなる。孔部もやや太い。口部黒色ガラス化。	棒に巻きつけ、板に押しつけ、指撫で整形。鉄滓が垂れ下がる。	胎土：多A+スサ 残存：95%



第166图 第96号住居跡出土遺物(1)



第167図 第96号住居跡出土遺物(2)

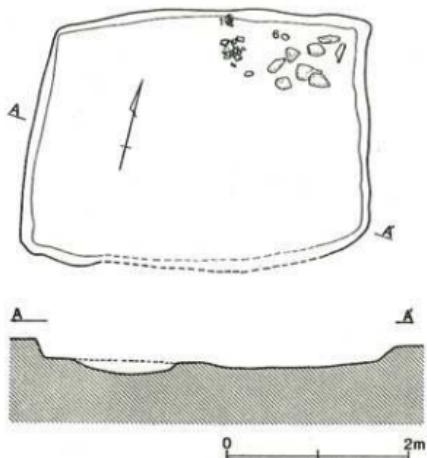
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	羽	口全長 外径 孔径	10.9 7.8 2.3 基部はやや太くなる。還元部が広く、口部の融解黒色ガラス化、発泡化する。	棒に巻きつけ、板に押しつける。口部周辺に鉄滓垂れ下がる。	胎土：0.5以下A+スサ多 残存：100%
11	羽	口現長 外径 孔径	10.3 8.0 2.2 基部は細く窄まり、口部は発泡するが黒色ガラス化しない。	棒に巻き、表を指頭痕で整形。口部周辺に鉄滓付着。	胎土：多A+スサ+F微 残存：60%
12	羽	口全長 外径 孔径	13.7 7.2 2.3 10と同様基部が細くなる。外径孔径	棒に巻き、表を指頭撫で。口部に鉄滓付着。	胎土：多A+スサ 残存：100%
13	羽	口全長 外径 孔径	14.5 7.8 2.2 基部はやや太くなるが、欠損する。口部は熔けて斜に孔径なる。	棒に巻き、指頭痕が残る。口部周辺には厚く鉄滓が垂れ下がる。	胎土：A+B+F+スサ 残存：70%
14	羽	口全長 外径 孔径	12.5 7.5 2.4 中程度に折れ、基部にて太く外径孔径なる。口部は融解して黒色ガラス化。孔部摩耗する。	棒に巻きつけ、板に押しつけ、指にて整形する。口部周辺には鉄分が付着する。	胎土：0.5以下A+スサ多 残存：95%
15	羽	口全長 外径 孔径	12.9 7.1 2.25 基部で細くなる形態である。口部は融解黒色ガラス化する。	棒に巻きつけ、板に押しつける。鉄滓は厚く垂れ下がる。	胎土：1.0以下A+スサ多 残存：95%
16	羽	口現長 外径 孔径	11.8 8.9 2.5 最も太い形で、基部が破損する。口部は黒色ガラス化する。	棒に巻きつけ、表に指頭痕がみられる。周辺に鉄滓付着する。	胎土：A+スサ、やや少ない 残存：80%
17	羽	口全長 外径 孔径	13.6 7.8 2.15 指頭での押圧により中窪みする。口部黒色ガラス化。	棒に巻きつけ、表に指頭痕が見られる。口部周辺に鉄滓付着する。	胎土：A多+スサ+E 残存：60%
18	羽	口現長 外径 孔径	12.3 7.2 2.4 基部がやや太くなる。孔部は摩耗により太くなる。口部は黒色ガラス化。	棒に巻きつけ、表を指頭撫で。口部周辺は鉄滓が付着する。	胎土：0.4以下A多+スサ 残存：75%

第97号住居跡（第168図）

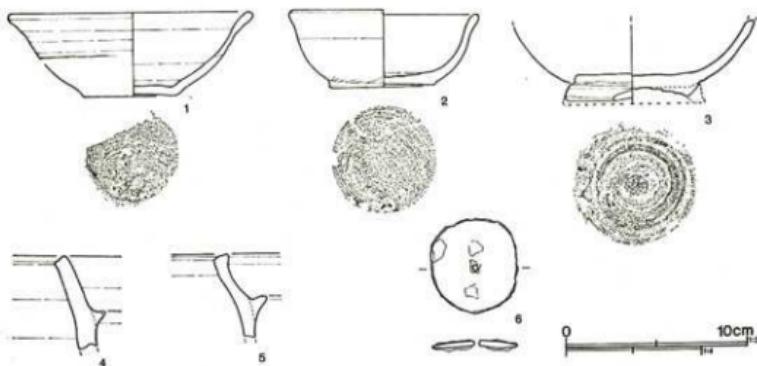
8一ヶ区に位置し、1軒だけ段丘を造ってつくられる。黒田第20号墳の周溝の上で墳丘の風下につくられ、規模は3.75×2.85mである。形態は長方形を呈し、主軸はN-79°-Eである。

竈はなく、柱穴も存在しない。

出土遺物は(1)・(2)、高台付塊(3)、羽釜(4)・(5)、鉄製紡錘車(6)が出土する。



第168図 第97号住居跡



第169図 第97号住居跡出土遺物

第97号住居跡出土遺物（第169図）

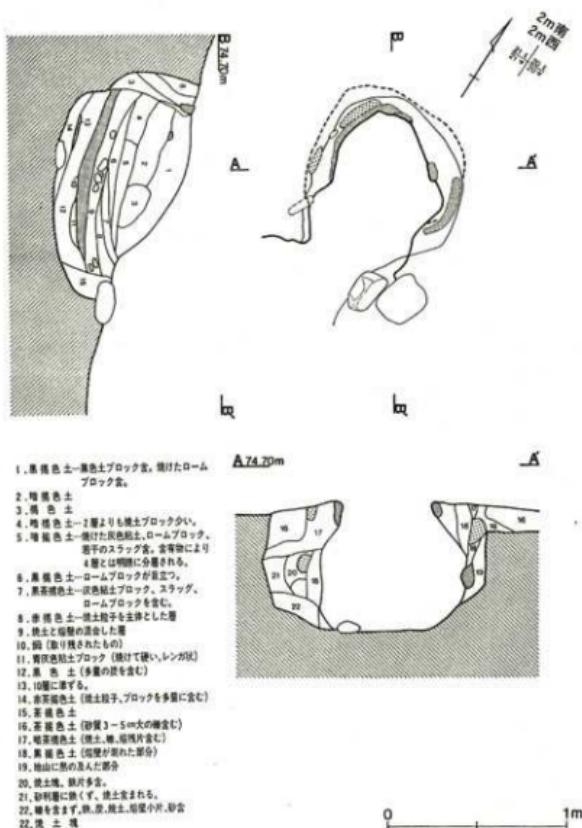
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1 須恵器	壺	口径 13.5 底径 5.2	平底から外反して立ち上がり、口唇にて再び外反し、	体部外面中位に接合痕らしきものあり。右回転撚で。	胎土：0.4以下B+C+E 多焼成：3 色調：7.5

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯 土師質	器高 4.6 口径 10.4 底径 5.9 器高 4.2	肥厚する。 平底から僅かに直立し、腰 の張る体部から外反して口 縁に至る。やや厚手。	底部右回転まわし糸切り。 末野産	Y 5/1 灰 残存: 30% 床
3	高台付 壺 須恵器	高台径 (7.8)	高台はやや聞く形態である が、内側に粘土が張りつけ てあるため、段を持つ。体 部は丸い。	右回転撚で。底部右回転ま わし糸切り。胎土・作りか ら土師質土器。	胎土: B + C + E + F + 金 H 烧成: 3 色調: 7.5 Y R 7/6 橙 残存: 80% 床
4	羽釜 須恵器	器厚 0.9	口縁は内傾し、口唇には沈 線が入る。	右回転撚で。底部回転糸切 り後高台を張りつけ、内側 を右回転撚で4周で整形。 末野産	胎土: B + C + D + F 焼成: 2 色調: 5 Y R 8/5 明赤褐 残存: 底部80% 覆土
5	羽釜 須恵器	器厚 0.6	口縁は内傾して反り、口唇 は外へ突き出す。	粘土帶積み上げ、回転撚 で。 末野産	胎土: 0.1 以下散A多+H 焼成: 3 色調: 7.5 Y R 6/4 にぶい橙 床
6	劫鉗車 鉄製品	外径 5.1 厚 0.3 孔径 0.25	僅かに彎曲しており、端部 は薄く尖る。	鍛造。	重量: 27.1 g

2 製鉄関連遺構

第1号製錬炉（第170図）

21—マ区に位置し、段丘傾斜面に作られ、3基存在する製錬炉のうち、最も東にある。シャフト炉であり、規模は上端幅0.5m、下端幅0.75mあり、深さは現存0.7mを測ることができる。壁の残りは悪く、特に下方では旧状を示すものか、融解した壁は存在しない。炉の中の土層は焼土・



第170図 第1号製錬炉

粘土、炭化物、スラッグなどが混入するが、炉底から0.15m上には鉢であろうか、厚さ8mm近くの層が見られた。この層は皿状になり、あるいはここが本来の炉底であると考えられる。この層の下には多量の炭を含む黒色土層が存在するが、これが防湿の役をはたした可能性がある。

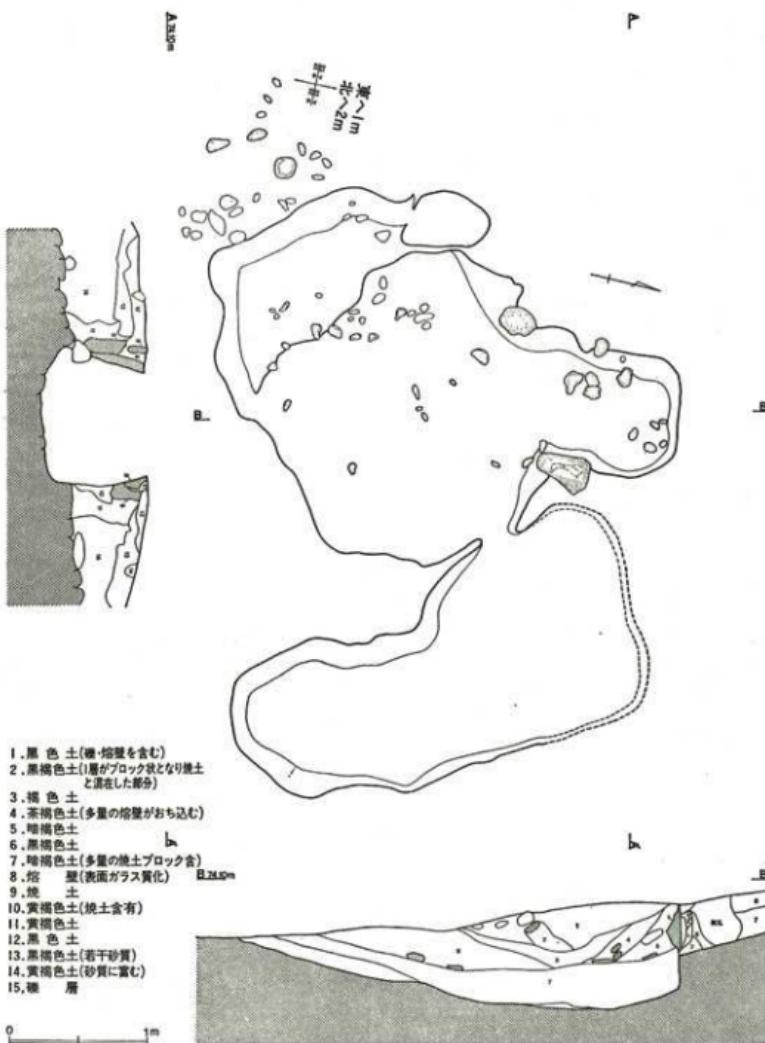
炉の構築は、まず炉よりも大きな掘り込みをつくり、そこに土を入れ、壁をスサ入り粘土で塗つてある。埋め込んだ土の中にも焼土、あるいは鉄滓が含まれる。このような壁をつくるのは、地山が疊層で、崩れ易いことも一因であろう。

第2号製錬炉（第171図）

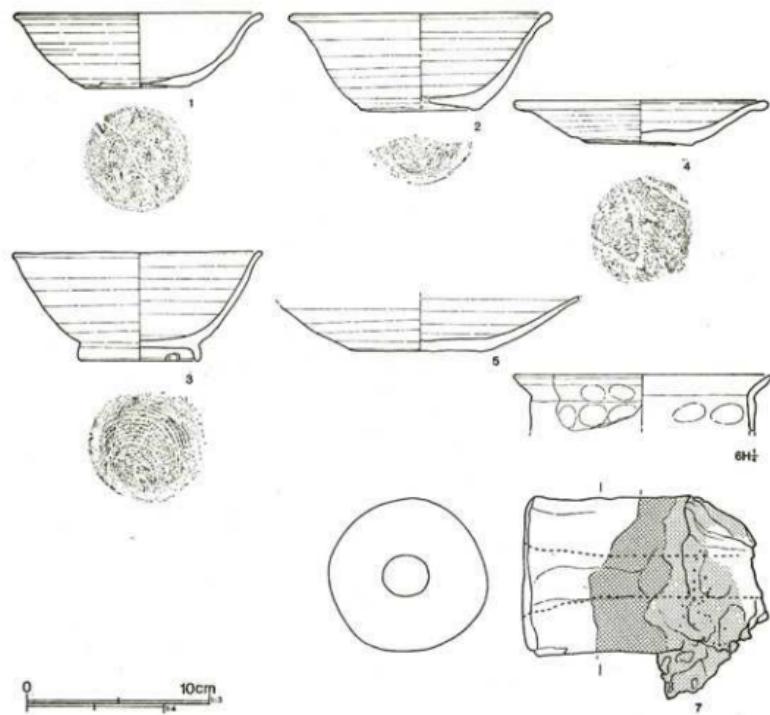
22—マ区に位置し、3基の炉の最も西に位置し、第93号住居跡と近接しており、両者は有機的な関連があったと考えられる。壁の残りはよいが、前部はすでに破壊されていた。炉の上幅は0.75m、下幅は0.98mを測る。ガラス化した壁は西側によく残り、厚さ7cmある。左右の壁は内傾するが奥壁はほぼ直立する。前方へは緩やかに立ち上がり、前底部は炉に向って傾斜する形となる。炉内は、炉の残存高0.75mの下半部を、焼土を含む暗褐色土で占めている。この土層の上には鉄滓が点々と堆積しており、炉壁の高さもこの土層を最下位として、それより下はほとんど焼けてはいない。おそらく第1号炉と同様、ここが炉底と考えられる。この炉の掘り形は、奥壁に一部見られる出土遺物は須恵器坏類と羽口が出土する。

第2号製錬炉出土遺物（第172図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 13.7 底径 5.9 器高 4.1	底部中央は極く薄くなる。 口唇は大きく外反する。	右回転拂で5周。底部右回転糸切り。	胎土：0.3以下B+C+D+E多 烧成：2 色調：10YR 5/3にぶい黄褐 残存：40% 胎土分析No18
2	高台付 須恵器	口径(14.4) 現高 5.3	高台は剥落する。腰部と口 唇部は厚い。	右回転拂で8周。底部右回 転糸切り。	胎土：1.5以下B+C+D 烧成：3 色調：2.5 YR 6/2灰赤 残存：30%
3	高台付 須恵器	口径(13.7) 高台径 6.7 器高 5.9	高台は下方に延び、端部は 丸い。口唇は外反する。	右回転拂で6周。底部右回 転糸切り。	胎土：0.8以下B+C+D +E 烧成：3 色調：2.5 YR 6/2灰赤 残存：60%
4	皿 須恵器	口径 14.0 底径 6.0 器高 2.4	指差し込み部は明瞭。口唇 は大きく外反し、肥厚す る。	右回転拂で6周。底部右回 転糸切り。	胎土：B+C+E 烧成： 2 色調：5Y 6/2灰オリ ーブ 残存：60%
5	皿 須恵器	底径 7.5	平底から外傾する体部へ移 る。口唇は欠ける。	右回転拂で5周+α。底部 右回転糸切り。	胎土：0.6以下B+C 烧 成：2 色調：2.5YR 6/3 にぶい橙 残存：50%



第171図 第2号製鍊炉



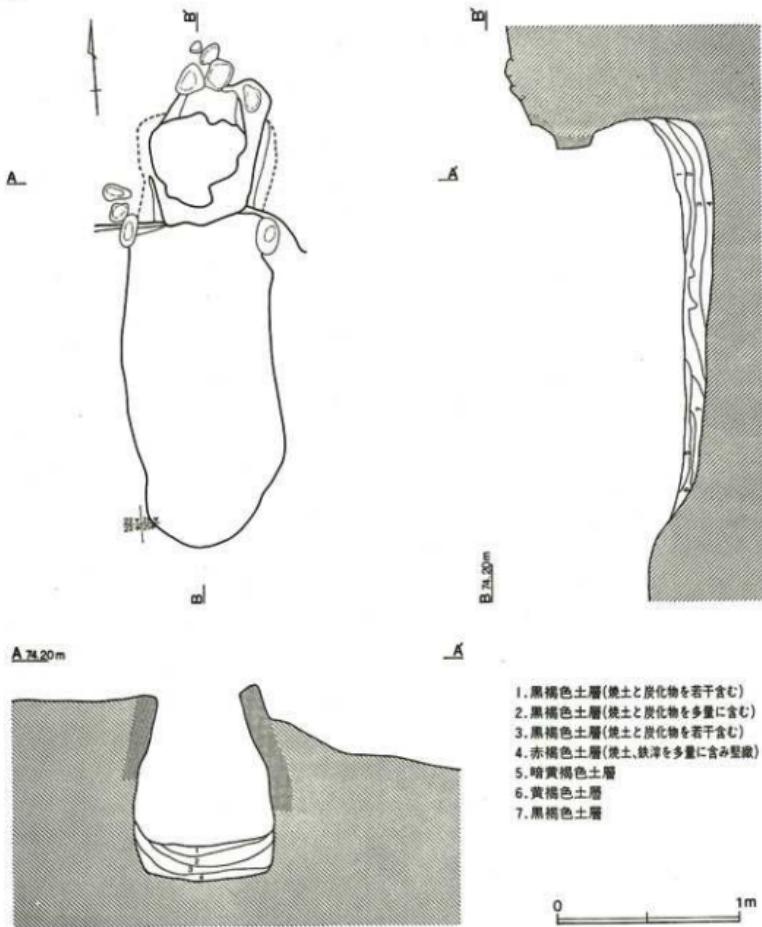
第172図 第2号製錬炉出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	甕 土師器	口径(18.6)	口縁は外傾し、口唇が薄くつまみ出される。	口縁横撫で。	胎土: 0.3以下B+C+F+G+H 焼成: 3 色調: 7.5YR6/6橙 残存: 13%
7	羽	口全長 13.3 外径 8.4 孔径 2.4	基部がやや太く、孔径も基部で擦り減り太くなる。口部は黒色ガラス化。	棒に巻き、板に押しつける。基部は指で押しつける。口部周辺に鉄滓流れ。	胎土: A多+B+Sサ 残存: 90%

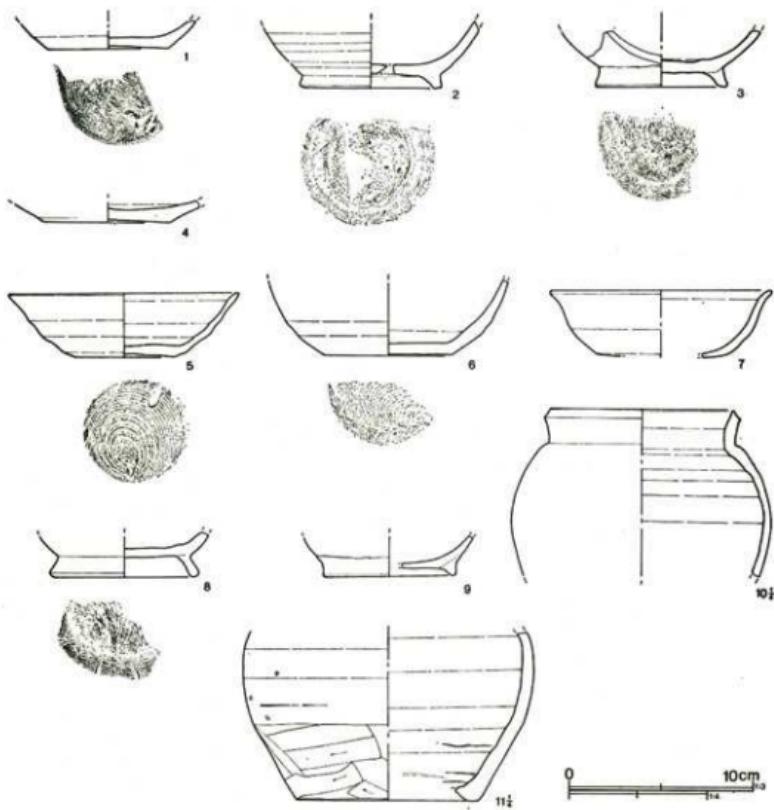
第3号製錬炉（第173図）

21—マ区に位置し、3基の炉の中央にある。炉の残りが最もよく、前方の壁も上部だけが存在した。規模は幅が上端で0.45m、下端で0.75mで、深さ1.1mである。炉の壁厚は、0.12mと厚く、

ガラス化して残りはよいが、炉底から上へ西壁で0.5m、東壁では0.35mの位置から下は存在しない。このことは他の炉と同様、本来の炉底が案外上方にあったと考えられる。現状の炉底には、焼土・鉄滓を多量に含む堅緻な層が存在するが、この層は奥壁から1.1mも前庭部方面まで延びており、炉からすでにみ出している。この層よりも上層も同様に前庭部まで延びており、最下層が炉底となったとは考えられない。前庭部は掘り方が僅かに炉に向い傾斜するが、埋土によって水平となる。出土遺物は近辺から須恵器壺類が出土している。なおこの炉は保存処理を施し、取り上げた。



第173図 第3号製錬炉



第174図 第3号製錬炉近辺出土遺物

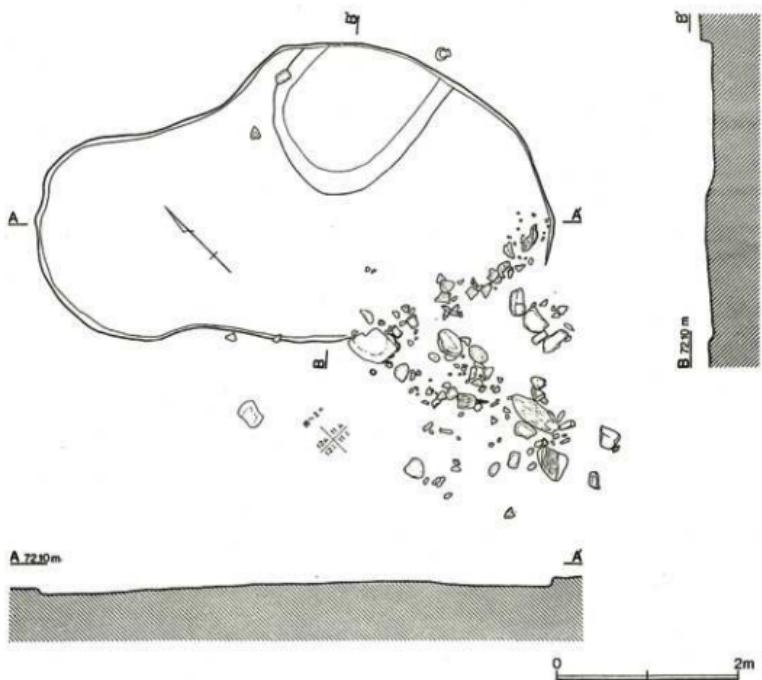
第3号製錬炉近辺出土遺物（第174図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径(6.5)	指差し込み部がある。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土: 0.6 以下 B + D + E 焼成: 2 色調: 7.5 YR 6/6 橙 残存: 底40% 炉左
2	高台付 塊 須恵器	高台径 (7.7)	高台はハの字状に開く。端面には浅い沈縞を入れ、外傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土: B + C + E 少 焼成: 5 色調: 5 Y 6/2 黒オ リーブ 残存: 40%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付 塊須恵器	高台径 (7.1)	高台はハの字状に開き、端部が内傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+D+E 焼成：4 色調：2.5Y6/2 灰黄 残存：40%
4	坏 須恵器	底径 7.0	指差し込み部で外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：B+C+D+E多 焼成：2 色調：5Y7/1 灰白 残存：底部完 炉左
5	坏 須恵器	口径 12.5 底径 5.4 器高 3.4	体部に輪轍目明瞭。口唇は外傾する。	右回転撫で4周。底部右回転まわし糸切り。南北企座	胎土：B+I(1cm=1) 焼成：3 色調：2.5Y8/1灰 白 残存：40% 炉上部
6	坏 須恵器	底径 6.9	体部は丸い。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 南北企座	胎土：B+C+I(1cm=1) 焼成：5 色調：2.5Y7/1 灰白 残存：30% 炉上部
7	坏 須恵器	口径(12.0)	体部中位に削り出された稜を持つ。	右回転撫で。体部下位は回転籠削りされる。 末野産	胎土：B+C+D 焼成： 2 色調：7.5YR5/4にぶ い褐 残存：20%
8	高台付 塊 須恵器	高台径 8.1	高台は細くハの字状に大き く開く。端面は外傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 高台張りつけ後、内 外回転撫で。 末野産	胎土：B+C+D+E 焼 成：2 色調：10YR7/4 にぶい黄橙 残存：底30%
9	高台付 塊 須恵器	高台径 7.3	高台端部は細くなり、端面 は外傾する。二次加熱を受け、赤色、表面黒色化。	右回転撫で。底部摩滅整形 不明。 末野産	胎土：B+C+D 焼成： 2 色調：2.5YR6/8橙 残存：底30%
10	壹 須恵器	口径(13.0) 胴径(12.5)	胴部は丸く、口縁部は短く 立ち上がる。口唇は外傾す る端面をつくる。	右回転撫で。特に口縁部に 強い撫で。 末野産 炉上部	胎土：0.5以下B+C+D +E 焼成：4 色調：2.5 Y6/1 黄灰 残存：20%
11	壹 須恵器	底径(13.0)	底部から外傾し、屈曲して 内彎する。	右回転撫で。胴下位は右→ 左への窪削り。形態、焼 成、胎土から10と同一か。	胎土：0.3以下B+C+D +E 焼成：5 色調：2.5 Y6/1 黄灰 残存：25%

製鉄関連遺構（第175図）

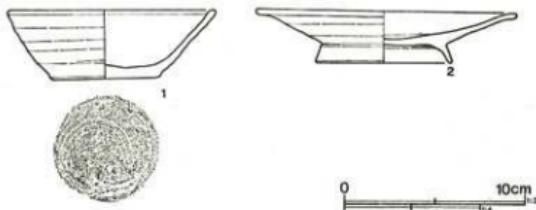
11—11区に位置するが、発掘調査開始時は製錬炉と考え調査を進めたが、製鉄遺構とはならなかつた。遺構は不蓋梢円形を呈する浅い掘り込みであるが、そこにはならんら施設は存在しなかつた。しかしその南側には多量の炉壁、鉄滓、焼石が散乱しており、製鉄関連遺構との有機的な関連をうかがうことができる。他に須恵器の小片も出土する。



第175図 製鉄関連遺構

3 土 坑

土坑の形態はさまざまであるが、長方形、円形、橢円形に大きく分けられる。時期を限定できる土坑は数少なく、1号、99号土坑群から須恵器が検出されているだけである。



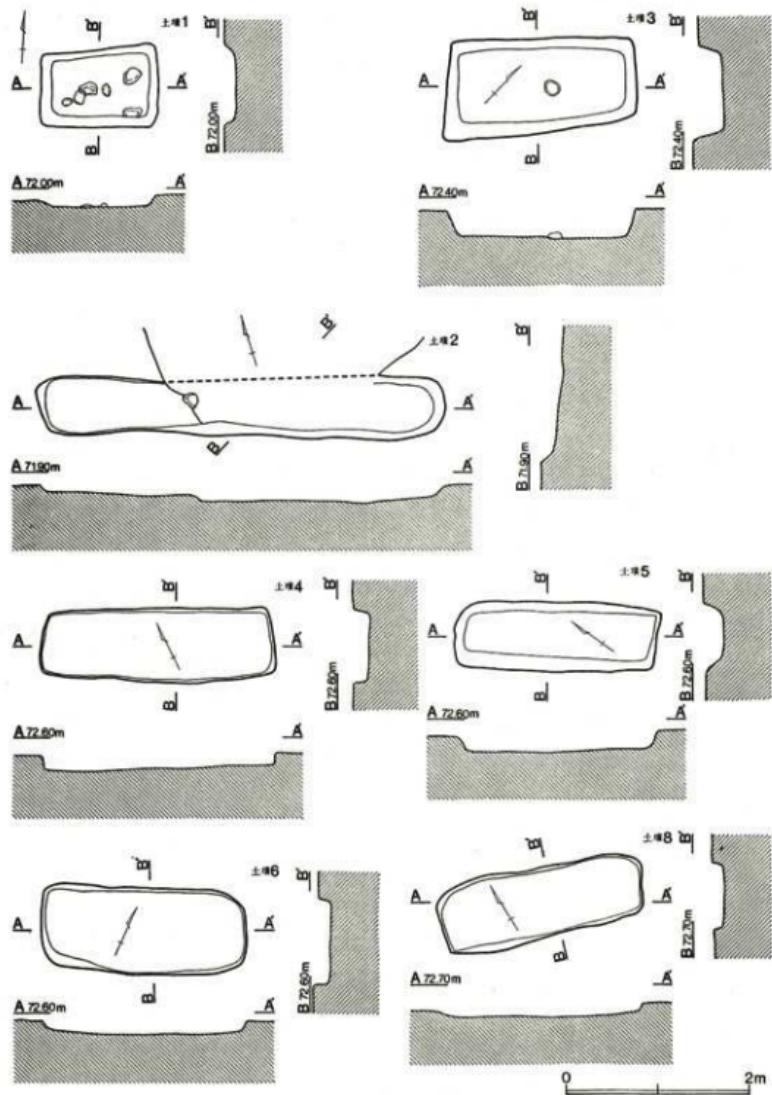
第176図 第99号土坑出土遺物

第99号土坑出土遺物（第176図）

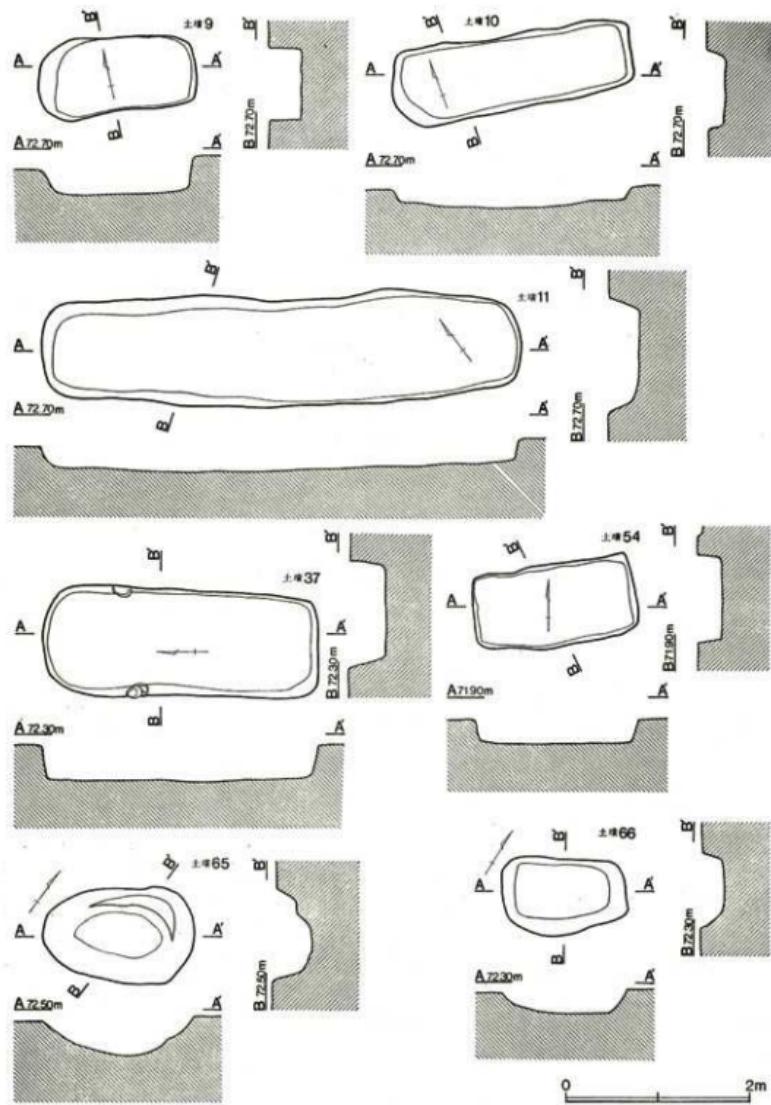
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
1	杯 須恵器	口径 底径 器高	11.5 6.1 3.8	指差し込み部が明瞭で、体部は外傾し、口唇部は肥厚する。	右回転撫で。底部右回転難し糸切り。 末野座	胎土：B+C 焼成：5 色調：N 5/0 灰 残存：60%
2	高台付皿 須恵器	口径 高台径 器高	14.5 7.6 2.9	全体に薄造り。高台はハの字状に直線的に開き、体部は浅く口唇は大きく開く。	右回転撫で。軟質で摩滅著しく整形不明。 末野座	胎土：0.8 以下 B+C+D+E 焼成：1 色調：7.5 YR 7/4 にぶい橙 残存：70%

第3表 土坑計測表

番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位	番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位
1	1.30×0.86×0.10 ^m	N-85°30'-E	80	3.94×1.34×0.35 ^m	N-52°30'-E
2	4.5×0.72×0.20	N-73°-W	81	1.10×0.61×0.16	N-31°-W
3	2.10×1.04×0.32	N-42°30'-E	82	0.96×0.87×0.38	N-3°-W
4	2.60×0.82×0.18	N-63°30'-W	83	0.17×0.15×0.22	-
5	2.21×0.76×0.20	N-33°-W	84	1.09×0.99×0.09	-
6	2.26×0.95×0.15	N-68°-E	85	1.82×1.57×0.49	-
8	2.30×0.84×0.11	N-72°-W	86	0.86×0.76×0.14	N-4°-E
9	1.74×0.86×0.34	N-86°-W	87	0.11×0.82×0.12	N-17°-E
10	2.66×0.7×0.11	N-80°-W	88	1.27×1.21×0.37	-
11	5.26×1.2×0.31	N-54°-W	89	3.36×0.82×0.17	N-61°30'-E
37	3.04×1.13×0.37	N-3°-E	90	0.97×0.87×0.09	N-48°-E
54	1.80×0.92×0.27	N-82°-E	91	2.14×0.72×0.24	N-28°30'-W
63	2.87×2.82×0.39	N-57°-E	92	1.27×0.62×0.15	N-26°-W
64	3.17×2.07×0.52	N-68°-W	98	2.07×1.66×0.21	N-48°-E
65	1.65×1.04×0.39	N-55°30'-E	99	2.06×1.58×0.24	N-61°-E
66	1.35×0.85×0.23	N-57°-E	100	1.63×1.00×0.54	N-24°30'-E
67	1.78×1.30×0.58	N-34°-E	101	1.63×0.66×0.60	N-73°-E
68	2.00×0.82×0.43	N-80°-W	102	0.63×0.43×0.70	N-58°-E
69	1.86×0.73×0.19	N-71°-E	103	1.12×0.62×0.24	N-61°30'-E
70	1.28×0.82×0.32	N-35°-W	104	1.19×0.49×0.18	N-17°30'-W
71	5.25×1.0×0.15	N-41°-W	105	0.77×0.62×0.13	N-98°30'-W
72	1.33×1.16×0.34	N-14°30'-W	106	0.72×0.42×0.09	N-65°-E
79	2.69×1.63×0.25	N-27°30'-W	107	0.72×0.49×0.09	N-69°-E
73	3.36×1.13×0.70	N-65°-E	108	2.95×2.53×0.12	-
74	1.53×1.05×0.60	N-49°30'-E	109	1.09×0.80×0.32	N-58°-E
75	2.55×1.25×0.86	N-65°-E	110	1.18×0.10×0.35	N-21°-W
76	2.97×2.92×0.75	-	111	0.50×0.65×0.14	N-6°-W
77	1.36×1.19×0.21	N-29°-W	112	2.05×2.00×0.48	-
78	1.82×1.29×0.44	N-29°-W	113	1.04×0.88×0.13	N-21°-W
79	2.69×1.63×0.25	N-27°30'-W			



第177図 第1~6・8号土坑



第178図 第9~11・37・54・65・66号土坑